

「好き」を深める。「好き」が広がる。



CROSS OVER

第15回

全国高校生

地歴甲子園

歴史フォーラム

発表集



# 目 次

ごあいさつ	審査委員長・奈良大学学長 清水 哲郎	4
審査結果の講評	第15回全国高校生歴史フォーラム実行委員長 外岡慎一郎	5
審査結果 優秀賞		6
審査結果 佳作		7
優秀賞受賞レポート（高等学校等コード順に掲載、敬称略）		
東京都・豊島岡女子学園高等学校		11
研究者名	忠垣希佳	
研究タイトル	東京を舞台とした異性装が犯罪と結びつく近代小説と 当時の異性装に対する認識	
東京都・本郷高等学校		23
研究者名	渡邊尊仁	
研究タイトル	柳沢吉保時代における六義園の変遷	
鳥取県立八頭高等学校		35
研究グループ名	亀の会	
研究者名	大東樹生・岡田和華・國米優月・前田一輝・村田颯土・山根瑠斗	
研究タイトル	鳥取池田家の家老墓について	
鳥取県立青谷高等学校		51
研究グループ名	課題探究（文学歴史コース）	
研究者名	森本瑠奈・岡本杏珠・山村崇人・福本孔明・谷口恵澄・永江紗輔 森井優我	
研究タイトル	青谷上寺地遺跡出土土器の黒斑分析 —土器づくり体験からのアプローチ—	
長崎県立壱岐高等学校		67
研究グループ名	東アジア歴史・中国語コース2年歴史学専攻	
研究者名	坂本蒼羽・中上海大・野口柊亨・森崎光舞	
研究タイトル	定光寺前遺跡出土の土師器からみた中世壱岐の研究	
佳作ポスター（高等学校等コード順に掲載、敬称略）		83
第15回全国高校生歴史フォーラム 応募タイトル一覧		92

# ごあいさつ

審査委員長・奈良大学学長 清水 哲郎

今年のコロナ禍は、昨年末の第3波から始まり、4月には第4波となり、その後第5波として感染力の極めて強いデルタ株が全国で猛威を振るっていましたが、このところ新規感染者が急減し収束に向かっているようにみえます。このような感染状況の中、新型コロナウイルス感染への恐怖と先が見通せないという不安な日々を過ごされてきた皆さまにとって高校生活は大変だっただろうと推察いたします。WEB授業や短縮授業、夏季休業の延長、クラスの絆を深める文化祭や体育祭、修学旅行の中止や延期、また開催などさまざまな経験をされたのではないのでしょうか。その困難な状況の中で、日頃の学習の成果を発揮すべく、全国高校生歴史フォーラム応募のために調査研究を遂行され、私たちの期待に応えられたことにまず敬意を表しますとともに、心より感謝申し上げます。

1300年以上の歴史が息づくこの地に奈良大学が誕生したのは1969年のことです。本学には、現在文学部（国文学科・史学科・地理学科・文化財学科）と社会学部（心理学科・総合社会学科）、さらに大学院（文学研究科・社会学研究科）および通信教育部が置かれており、学生数は約3900名、全国各地から多くの学生を迎えています。図書館には56万冊以上の蔵書があり、特に15万冊を超える文化財専門書を擁する本学図書館は、日本屈指の歴史・文化財情報に関する知の拠点として国内外から注目されています。

さて、全国高校生歴史フォーラムは2007年に第1回フォーラムが開催されています。当時、多くの生徒にとっては「暗記科目」という印象が強い歴史や地理に、暗記ではなく、自分たちで調べ、考え、真実を発見するなど、課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学びを導入することで、歴史や地理を探究する醍醐味を実感してほしいとの願いから全国高校生歴史フォーラムが企画・開催されました。幸い私達の思いは、全国の高校生と、生徒の皆さんを指導しておられる先生方に届いて、準備期間や周知が十分でなかったにもかかわらず全国の22校から72編の応募がありました。

その後、応募校数は過去15年間の平均では、参加校が48校、また応募点数では110編となっております。今年度の状況は、参加校が全国24都府県から70校、応募点数が88編を数え、審査委員会による厳正なる審査の結果、全国から選び抜かれた優秀賞に5編が、また佳作として7編が選ばれました。

最後になりますが、全国高校生歴史フォーラムの開催にあたり、ご尽力を賜りました皆さまに心から感謝申し上げますとともに、ご指導にあたられた先生方と熱心に研究して応募された高校生の皆さまに、お礼の言葉を申しあげます。

# 審査結果の講評

第15回全国高校生歴史フォーラム実行委員長 外 岡 慎一郎

第15回歴史フォーラムには、日本列島各地から88編の作品が寄せられました。それぞれに歴史愛、地元愛に満ち、素直な好奇心に発した地道な調査・研究の成果と受け止めさせていただきました。

コロナ禍という劣悪な環境のなか、歴史のその時、その場、その人に寄りそうことはなかなか困難なことではなかったかと思います。可能な限り現場に足を運び、時には実験もおこない、難解な原史料にもチャレンジした皆さんに敬意を表します。また、巣ごもりという状況に適応して、独創的な構想力や発想力、表現力で勝負してきた作品も少なからずありました。

歴史研究に限りませんが、研究の発展には発想力、構想力、行動力、実行力、表現力、いずれも欠かせません。もちろん、その力は企業社会、地域社会でも必ず求められるものです。かけがえのない時間を費やして仕上げられた作品は、必ず皆さんの心の糧、未来に花を咲かせる種になると確信しています。

さて、第15回全国高校生歴史フォーラム実行委員会では、このたび厳正な審査を経て、優秀賞5編、佳作7編を選出いたしました。

受賞された皆さんには、心から「おめでとう」を申し上げたいと思います。なかには大学の卒業研究にしても優秀な成績を収めるだろうと感じた作品があります。部活動や授業の延長として、時間をかけ、工夫を重ね、知恵を絞る姿が見えてくるような作品もあります。審査する我々もまた多くを学ばせていただきました。ありがとうございます。

また、選には漏れたものの、入選した作品と等しく知恵を絞り、工夫を重ね、汗をかいた作品を仕上げ、奈良にお届けいただいた皆さんにも、厚く感謝申し上げます。作品を仕上げた達成感があればその達成感を、選に漏れた悔しさがあればその悔しさを、後悔があればその後悔を、未来に花を咲かせる肥やしにしてください。

近頃は、いや昔からかもしれませんが、歴史好きの友達がクラスにはいない、同じ学年でももう一人いるかな、という状況ではありませんか。歴史系の部活動なども部としての存続が危ぶまれるほどの低調さだという話を聞くこともあります。そんななかで、質の高い作品に触れることができたことは大きな喜びでした。絶対大丈夫。歴史を学ぶ、歴史に学ぶ営みは絶えることはありません。歴史探究が何より好きな高校生、そんな歴史好きが集うサークルの活動を奈良大学は応援しています。後輩たちにも全国高校生歴史フォーラムの存在を伝えていってください。

最後になりましたが、ご多忙のなか、歴史フォーラム応募を目指す生徒さんたちに、折に触れご指導、ご助言をあたえられた先生方に感謝申し上げます。応募基準に照らせば、あくまで黒子に徹していただかなければならないのですが、黒子無くして役者は立てず、舞えません。今後とも、全国高校生歴史フォーラムにご支援賜りますようお願い申し上げます。

審査結果

優 秀 賞

(高等学校等コード順に掲載、敬称略)



東京都・豊島岡女子学園高等学校

研究者名：忠垣希佳

研究タイトル：東京を舞台とした異性装が犯罪と結びつく近代小説と  
当時の異性装に対する認識



東京都・本郷高等学校

研究者名：渡邊尊仁

研究タイトル：柳沢吉保時代における六義園の変遷



鳥取県立八頭高等学校

研究グループ名：亀の会

研究者名：大東樹生・岡田和華・國米優月・前田一輝・村田颯士・山根瑠斗

研究タイトル：鳥取池田家の家老墓について



鳥取県立青谷高等学校

研究グループ名：課題探究（文学歴史コース）

研究者名：森本瑠奈・岡本杏珠・山村崇人・福本孔明・谷口恵澄  
永江紗輔・森井優我

研究タイトル：青谷上寺地遺跡出土土器の黒斑分析  
—土器づくり体験からのアプローチ—



長崎県立壱岐高等学校

研究グループ名：東アジア歴史・中国語コース2年歴史学専攻

研究者名：坂本蒼羽・中上海大・野口柊亨・森崎光舞

研究タイトル：定光寺前遺跡出土の土師器からみた中世壱岐の研究

## 審査結果

# 佳 作

(高等学校等コード順に掲載、敬称略)



茨城県・江戸川学園取手中・高等学校

研究者名：石田慎太郎

研究タイトル：下総の鉄道路線と水運の関わり

～利根町から活気が消えた本当の原因とは～



茨城県・江戸川学園取手中・高等学校

研究者名：加瀬柚妃

研究タイトル：新撰組と五兵衛新田

—何故、新撰組は五兵衛新田に屯所を構えたのか—



東京都・普連土学園高等学校

研究者名：柳田和音

研究タイトル：津田仙が本当に伝えたかったこと

～明治時代の農業に関する仙の功績を中心に～



東京都・成城高等学校

研究者名：片岡義秀

研究タイトル：戦国期の東国における避難所の形態



東京都・日本大学櫻丘高等学校

研究者名：上都真拓

研究タイトル：吾妻鏡と地域の様子から見る幻の大寺院真慈悲寺と鎌倉幕府の関係性



神奈川県・栄光学園高等学校

研究グループ名：歴史研究部

研究者名：原嶋高志・眞鍋 僚・小野口怜・大伴旺弘・藤間大毅・白江雄々恵

研究タイトル：インフラから見た横浜での関東大震災の復興



兵庫県・灘高等学校

研究グループ名：地理歴史研究部

研究者名：市川雅之・津畑政英・福田光汰・今井 駿・越智晴彩・旭慎之佑  
森田晃弘・清水崇源・露口孝太・西脇 希・羽廣圭人・伊藤剛史  
谷口 悠・井村真岳・山本洋平

研究タイトル：酒造業の発展と物流

～灘五郷の酒造業から見る近世と近現代の産業構造～



# 優秀賞研究レポート

(高等学校等コード順に掲載)





東京を舞台とした異性装が犯罪と結びつく

近代小説と当時の異性装に対する認識

豊島岡女子学園高等学校 地歴部 忠垣希佳



## はじめに

明治・大正の東京を舞台とした、谷崎潤一郎『秘密』や江戸川乱歩『屋根裏の散歩者』では、主人公の青年が女装をすることで犯罪を犯しているような気分になる場面がある。子供向けアニメで異性装をするエピソードがあることですら珍しくない現在において、その感覚は理解しにくい。では、何故近代の日本、特に東京において異性装が犯罪と結びつく認識が生まれたのか。また、そういった認識と当時の小説の関係はどのようなものなのか、そこからみえる当時の東京とはどのようなものなのか、それらを明らかにしていきたい。

### 1. 江戸時代の異性装

まずは近代との比較として江戸時代の異性装についてであるが、当時の日本では異性装に対して近代よりも寛容だったと考えられる。当時の江戸での男装の一例として、幕府評定所の裁判記録である『御仕置例類集』、江戸の書肆藤岡屋由蔵の『藤岡屋日記』、『八丈島流人銘々傳』、三宅島の「流人帳」にみえる、たけ（1814～1838）を挙げる。たけは八王子の旅籠屋に飯売奉公していたが、月代を剃り江戸に逃げ去り、男として蕎麦屋で働いていた。しかし、その蕎麦屋の二階で出産し、実は女だと知られるようになった<sup>1</sup>（資料1）。その後、たけは入墨の上、50日間過怠牢に処されるが、罪状は盗み、密通、若衆・野郎に変身し身分を偽って月雇いしたこと、奉公先からの逃亡である（資料2）。若衆・野郎に変身し偽っての月雇いに関しては、身分を偽り職に就いていたことに重点が置かれており、先例がなく、悪事をするため姿を変えたわけではないので<sup>2</sup>、男装をしたこと自体を深く咎められたわけではなかったが、以後の男装は禁じられた<sup>3</sup>。事件の再発防止のためだと思われる。ところが、前回の逮捕後に2回、禁じられた男装を続けたために捕まり「押込」に処されたうえ、火付盗賊改の手先と偽り、奉公人の盗みの仲介に入り、謝礼金を要求したこと、押し借りの男を組み伏して捕らえて縛り上げ、連れまわしたことなどが理由で遠島の刑に処された（資料3）。本来ならば罪状からして遠島の刑期の重罪にならないが、男装禁止という御上からの申渡しを何度も無視したため、盾突く危険分子と見なされ、見せしめのためにも重罪に処されたと考えられる。これは、男尊女卑観念により男装は女装より厳しい扱いを受けたようにも見えるが、この場合、男装が禁じられたのは前述した通り一度身元を偽り職に就くという風紀を乱すようなことをしたからであり、ただ男装しただけでは罪に問われなかった可能性がある。周囲から黙認されていた男装の例としては、京都祇園町でのことだが、滝沢馬琴『兎園小説余録』（第二集）に記された、元曲妓の宇吉がある。周囲の人々から元服天窓の男女ということで済まされており、娼妓と間夫の関係になったり、曲妓の勤めを引いた女性と夫婦のように同居していたりした<sup>4</sup>。次に女装についてであるが、当時女形は日常生活でも芸の上達のために女として暮らすことが推奨され（資料4）、現に女形は平生女として生活していた<sup>5</sup>。滝沢馬琴『南総里見八犬伝』では、八犬士のうち二人が女装経験者であり、「おかつ」（『兎園小説余録』）や「お琴」（『藤岡屋日記』巻四）、元屋根職人の飴売り「お万」といった日常的に女装していた人々は犯罪さえ起こさなければ、咎められることはなく、生計を営めるなど<sup>6</sup>、世間は女装に対して寛大であったといえる。

### 2. 近代化と異性装

近代になって異性装に対する認識は大きく変化する。文明開化を急いだ明治政府によ

って西洋の服飾の規範が持ち込まれたことが原因である。

西洋において、フランスでは、フランス革命の際に服装のような私生活にかかわる領域でも個人の意志を尊重する解放政策をめざしたが、1793年に出された服飾の自由を宣言する法令では、男女差の維持に注意が払われ、その精神は19世紀末まで引き継がれる<sup>7</sup>。また、1800年11月7日に出された「異性装に関する警察令」であくまで両性に禁じられていた異性装が女性のみの特化していった。一方、イギリスでは、男性による異性装はただちに同性愛と直結し、平和を脅かす要因として異性装者を慣習法的に刑事訴迫していた。ドイツでは、刑法上の猥らな行為を取り締まる条項を異性装に適用し、人目をひかない場合は基本的に裁判所では罪に問われなかったようだが、異性装者を取り締まるために警察の厳重なパトロールが日常的に行われていた<sup>8</sup>。近代の西洋では各国でそれぞれ異性装に対しての取り締まりを行っていたのである。聖書には、神の意向として「女は男の着物を着てはならない。また男は女の着物を着てはならない」<sup>9</sup>とあり、西洋では主にそれを根拠に異性装が禁じられたと考えられる。

以上のような西洋の影響を受け、1873（明治6）年、東京違式註違条例第六二条で「男ニシテ女粧シ、女ニシテ男粧シ、或ハ奇怪の粉飾ヲ為シ醜態ヲ露ス者」は「違式（オキテヲソムク）」の罪となり、犯した者は75銭より150銭までの「贖金」を追徴された<sup>10</sup>。以前は異性装自体は罰されなかったが、近代化により軽犯罪として扱われるようになったのだった。勿論、違法となっても異性装をする人々はいた。その中で警察沙汰になり報道された東京での実例を挙げる。1876（明治9）年4月3日、向島で女の鬘をかぶった花見客の男が逮捕され（資料5）、1875（明治8）年3月14日には日本橋小舟町の火事の際に、「紺木綿の股引、はらかけて、猫頭巾を冠り、麻うら草履をはき、差し子の半天」という姿の「美しき男が彼地こち火事見舞いあるき廻る様子が何うも女らしき物腰ゆゑ」不審に思った巡査が呼び止めたところ、中村清助の養女で「おやま」という名の芸者であったことがわかり逮捕された（『東京日々新聞』錦絵版九六九号）<sup>11</sup>（資料6）。以上のように、花見や火事見舞いなど犯罪行為を行っていないくとも、異性装をしていたという理由だけで一般市民が警官に目を付けられるようになった。近代以前のことを考えると、近代化によりいきなり異性装が厳しい扱いを受けるようになったかがわかる。

しかしながら、違式註違条例の異性装禁止条項は1882（明治15）年に施行された明治刑法には継承されず、法文上異性装は犯罪ではなくなる。それでも警察は異性装者は眞犯者であるという認識を根強くもち続け、異性装者への抑圧を続けた。1897（明治30）年4月19日の夜、東京芝の界隈を「島田まげ立派に結び、お召縮緬の二枚重ねに吾妻コートを持ち添へ、黒縹子に博多の昼夜帯を占め」た人物が刑事巡査に拘引され、麴町警察署に連行された。厳しい取り調べの結果、農商務省に勤務する森勝次郎であることがわかり、「農商務省官吏の女装」という見出しで新聞紙面を賑わすことになる（『読売新聞』明治三〇年四月二一日号）。彼の行為は時期的にみても花見の余興としての仮装（女装）だと思われ、女装は法文上犯罪ではなくなっていたので「その不心得を論じて放免」という処分になった。『読売新聞』では1896～1911（明治29～44）年の間「女装の賊」のような目出しを付けた記事が窃盗9件、強盗2件の計11回数えることができ、彼は「女装の賊」と疑われて逮捕されたのだろう<sup>12</sup>。そしてこうした新聞記事により法文上では犯罪でなくなっても異性装が犯罪と結びつくイメージが人々に刷り込まれていった。メディアが民衆

の異性装に対する認識に与えた影響は大きいと思われる。

### 3. 異性装と犯罪と近代小説

前節までの内容から江戸時代までは概ね寛容だった異性装が近代化により犯罪となり、新聞などで世間に異性装は犯罪であるという認識が浸透し、法文上は犯罪ではなくなった後もその認識は変わらなかったことがわかった。そして、その認識は当時の猟奇的小説に反映されている。異性装が犯罪と結びつく東京を舞台とした近代の小説として、谷崎潤一郎『秘密』（1911年）、江戸川乱歩『屋根裏の散歩者』（1925年）、『黒蜥蜴』（1934年）を扱う。

『秘密』<sup>13</sup>では、主人公の青年が「惰力の為めに面白くもない懶惰な生活を、毎日々々繰り返して居るのが、耐えられなくなって」、「普通の刺戟に馴れて了った神経を顫い戦かすような、何か不思議な、奇怪な事」を求めて浅草の松葉町辺にある真言宗の寺の庫裡の一間を借りて隠遁をはじめ、「成る可く一目にかからぬように毎晩服装を取り換えて公園の雑沓の中を潜って歩いたり、古道具屋や古本屋の店先を漁り廻ったりし」ていたが、「或る晩、三味線堀の古着屋で、藍地に大小あられの小紋を散らした女物の袷が眼に附いてから、急にそれが着て見たくてたまらなくな」り、「あの着物を着て、女の姿で往来を歩いて見たい」と思って「友禅の長襦袢や、黒縮緬の羽織迄も取りそろえ」る。そして化粧をし、「銀杏返しの鬘の上にお高祖頭巾を冠り、思い切って往来の夜道へ紛れ込んで見る。そのとき「芝居の弁天小僧のように、こう云う姿をして、さまざまの罪を犯したならば、どんなに面白いであろう。……探偵小説や、犯罪小説の読者を始終喜ばせる『秘密』『疑惑』の気分」に髣髴とした心持で、私は次第に人通りの多い、公園の六区の方へ歩みを運んだ。そうして、殺人とか、強盗とか、何か非常な残忍な悪事を働いた人間のように、自分を思い込むことが出来た」と述べている。その後、「毎晩のようにこの仮装をつづけ」、「犯罪を行わずに、犯罪に付随して居る美しいロマンチックの匂いだけを、十分に嗅いで見たかったので」、「次第に扮装も巧くなり、大胆にもなって、物好きな聯想を醸させるために、七首だの麻醉薬だのを、帯の間へ挿んでは外出」するのである。ここに江戸時代と近代の異性装に対する認識がそれぞれ見てとれるように思う。

まず、「芝居の弁天小僧」は江戸時代に描かれた歌舞伎であり、オウス＝ヤマトタケルの敵を油断させるため弱者を装う女装を受け継ぎ<sup>14</sup>、古来の女装観を表していると考えられる。『日本国語大辞典』によれば「銀杏返し」は「江戸中期には一二、三歳から二〇歳ぐらいまでの女性、明治以後は中高年の女性にも用いられた」髪型で「お高祖頭巾」は「宝暦（一七五一～六四）頃、歌舞伎の女形中村富十郎が着用してから若い女の間で流行した」、「旧式な頭巾」で彼は自ら「古風な衣裳の好み」と述べていることから、彼は江戸時代の若い女性っぽい恰好をしたかったのであると思われる。そこには近代以前の女装をして悪事を行う華麗さに対する憧れがあるのではないだろうか。これに対しその後、「探偵小説や、犯罪小説」、「『秘密』『疑惑』」など近代的と思われる言葉が続く。そして女装が上達した後、刃物や麻醉薬といった犯罪に使われるような代物を持って外出するが、前述したように『秘密』が出された1911年頃「女装の賊」による犯罪が多発していたため、犯罪行為をしていなくとも女装だと警官に気づかれ連行されることが実際にあった。女装している上、更にそういった怪しげなものを所持していればより疑いが濃くなるであろう。そのため、女装に自信がついた後でなければならなかった訳だが、それでも

絶対安全とはいえず、そういったスリルが「犯罪に付随して居る美しいロマンチックの匂い」となるのだろう。こういった演出は犯罪と結びつく当時の女装のイメージによるものである。光石亜由美氏は違式註違条例における規律による異性装排除と「私」の女装することに感じる秘密という背徳性の関係は否定しているが、谷崎が同時代の女装と犯罪のイメージから受けた影響について指摘している<sup>15</sup>。そして主人公に江戸時代のような恰好をさせ、江戸時代のキャラクターを思い浮かばせるも、江戸時代ではなく、近代になってからのイメージに帰結することから明治生まれの谷崎は当時の異性装に対する認識を受け入れていたことが指摘できる。当時の認識のあり方に疑問を覚える江戸時代を知らない人々は当事者などごく少数で、すでに当然のこととなっていたのかもしれない。

『屋根裏の散歩者』<sup>16</sup>では、「どんな遊びも、どんな職業も、何をやってみても、一向この世が面白くない」郷田三郎が明智小五郎と出会い犯罪に興味をもつが、「さすがに法律上の罪人になることだけは、どう考えてもいや」で「犯罪」のまね事を始める。そして、「しばしば変装をして、町から町をさ迷い歩」くが、「色々の変装をした中でも、女装をすることが、最も彼の病癖を喜ばせ」、「高価な鬘だとか、女の古着だとかを買い集め、（中略）頭の上からすっぽりと外套をかぶって、（中略）適当な場所で外套を脱ぐと、ある時は淋しい公園をぶらついてみたり、ある時はもうはねる時分の活動小屋へ這入って、わざと男子席の方へまぎれ込んでみたり、はては、きわどい悪戯までやってみ」て、「服装による一種の錯覚から、さも自分が姐己のお百だとか蟒蛇お由だとかいう毒婦にでもなった気持で、色々な男たちを自由自在に翻弄する有様を想像しては、喜」ぶのである。乱歩が谷崎を敬愛していたため、『秘密』の影響を受けている。姐己のお百、うわばみお由は江戸時代の講談や歌舞伎に登場する悪女である<sup>17</sup>。江戸時代の人物の名を挙げている点は『秘密』と同様であるが、弁天小僧は目的のため女装した男性であるのに対し、お百とお由は女性である。『秘密』では女として着飾り、「お白粉の下に、『男』と云う秘密が悉く隠されて」いる刺激的な状況を楽しんでいるのに対し、『屋根裏の散歩者』では、女になった気分で悪い女がしそうなことを考え、大胆な行動をして喜んでいるという違いがあることが理由だと考えられる。あくまで男が女の恰好をして女になった気分を味わってみたいという意識に対し、女になりきって良識ある女はせず、悪女がしそうなことをしてみようという意識なのである。前者の方が男であるということをおぼろげに忘れているのではないか。また、お高祖頭巾と頭の上からすっぽりとかぶった外套は似ているが、外套を脱ぐ描写はあるが、お高祖頭巾を脱ぐ描写はない。このことから女装の理由はほぼ同じだが、両者の女装に対する緊張感の違いがわかる。当然脱がない方が女装とばれにくいだろう。『屋根裏の散歩者』の方が女装していることに対する緊張感が低いように思われるのは女装の取り締まりが緩くなったことを表すのではないか。

『黒蜥蜴』<sup>18</sup>では女賊黒蜥蜴が「黒の背広に烏打帽をかぶった若い運転手」に変装して車を運転し、京橋の袂で手下となる青年の前に現れ、気がつかなかった彼は驚く。また、普段の一人称は「あたし」だが時々「僕」になる。どちらも物語の本筋とは関係ないが、わざわざ黒蜥蜴に「男装の麗人」としての要素が入れられたのは、乱歩が大学生時代読んだであろう<sup>19</sup>、コナン・ドイルの1888年を舞台とした、『ボヘミアのスクヤンダル』<sup>20</sup>の影響であろう。ボヘミア王を脅す、犯罪者アイリーン・アドラが火事騒ぎを起こしたのはホームズであることを確認しようと尾行するため、青年に変装し、彼に挨拶するが変装が

気づかれない場面が印象的に描かれているのである。美人で多くの男性の憧れの的であること、大胆な犯罪者であること、三十代であることなど両者は共通点が多い。だが、彼女は女優として修業した際身につけた男装のスキルを珍しくないと述べており、事実当時のフランスの女優サラ・ベルナールは男装して『ロレンザッチオ』や『ハムレット』で男役を演じ好評を得た<sup>21</sup>。更に彼女はその後脅迫を取りやめる。一方黒蜥蜴が男装するのは、青年の代わりとなる死体を用意する際により犯罪と繋がりが深く、「黒い背広の襟を立てた西洋泥棒みたいな風体」は彼女が謎多き犯罪者であることを強調する効果があるといえよう。乱歩の中で男装と犯罪がより強く結びついたのは、異性装はタブーであるという認識がまだ当時日本で強く残っていたためであろう。しかし、黒蜥蜴のモデルといえるアイリーン・アドラの男装が魅力的だったからというのもあると考えられる。そしてその感覚は古来からあり、現在にも通じるであろう。一人称の件は現在ではよくあることといえる。

以上のことから時がたつにつれ、近代化によって植え付けられた異性装のイメージは徐々にだが変化し、近代以前の寛容なものに近づいていったといえるのではないだろうか。そして現在は近代以前の異性装に対して抵抗感が小さいものに近いといえよう。

#### 4. 当時の東京との繋がり

『秘密』では、主人公が「不思議な別世界へ、ハタリと行き逢うことがたびたびある、東京の市内に「下町の雑沓する巷と巷の間に挟まりながら、極めて特殊の場合か、特殊の人でもなければめったに通行しないような閑静な一郭が、なければなるまいと思って」おり、こだわって隠遁先を決めた。『屋根裏の散歩者』では「ちょっと旅に出たかと思うと、いつのまにか、都会の燈火に、雑沓に、引寄せられる様に、」東京に帰ってくる彼は、犯罪に興味をもった後に「もうとっくに飽き果てていた、あの浅草」に再び関心を向け、「犯罪嗜好者」に取っては、こよなき舞台である「おもちゃ箱をぶちまけて、その上から色々のあくどい絵具をたらしかけた様な浅草の遊園地」に出かける。どちらも主人公が浅草を好むことにより明治・大正の浅草の特殊性を見ることが出来る。当時の浅草の一郭の独特な雰囲気、異性装が犯罪と結びつくこれらの小説と調和しているといっても良いだろう。また、大都会ならではの匿名性によって密かに変装して町を歩くという行為が成り立っているといえるかもしれない。『黒蜥蜴』では女賊は「帝都最大の殷賑地帯、ネオン・ライトの闇夜の虹が、幾万の通行者を五色にそめるG街」の表通りを一步裏へ入った「暗黒街の女王」である。このように、当時の東京市内にはこのような禁忌めいた雰囲気がある小説の舞台となるような独特の魅力があったといえよう。

#### おわりに

江戸時代ではいちいち咎められなかった異性装が文明開化による西洋の影響で犯罪となり、新聞で書き立てられたことで人々の中で異性装のイメージが犯罪に結びつき、犯罪でなくなった後もその認識は強く残った。そしてその認識が当時の猟奇的小説に表れたのであり、当時の夜の東京市内にはそうした小説と相性の良い、大都会ならではの雑沓で匿名的な雰囲気があったといえよう。読書の際の些細な疑問がきっかけとなった研究だが、この研究を通して一度浸透した認識というものは簡単には変わるものではないということ、当時からメディアが人々の認識に与える影響が強いことを痛感した。しかし、時代を経て昔からの認識に戻っていったことから近代化によって作られた異性装のイメージが合わなかったと考えられる。

## 註

- <sup>1</sup>鈴木棠三 (2003) . 『江戸巷談 藤岡屋ばなし』 . 筑摩書房. 351-352 頁.
- <sup>2</sup>林玲子 (1993) . 「序章」 . 林玲子. 『日本の近世 第15巻 女性の近世』 . 中央公論社 . 35 頁.
- <sup>3</sup>長島淳子 (2017) . 『江戸の異性装者たち』 . 勉誠出版. 23, 33-34, 42 頁.
- <sup>4</sup>須永朝彦 (2012) . 『江戸奇談怪談集』 . 筑摩書房. 113-116 頁.
- <sup>5</sup>三橋順子 (2008) . 『女装と日本人』 . 講談社. 88-94 頁.
- <sup>6</sup>注5と同書, 117-119, 121-123 頁.
- <sup>7</sup>北山晴一 (1999) . 『衣服は肉体になにを与えたか 現代モードの社会学』 . 朝日新聞社 . 210 頁.
- <sup>8</sup>新實五穂 (2017) . 「十九世紀フランスのモードと性差」 . 服藤早苗・新實五穂. 『歴史のなかの異性装』 . 勉誠出版. 242-247 頁.
- <sup>9</sup>山我哲雄・鈴木佳秀 (翻訳) (2001) . 『〈旧約聖書Ⅲ〉民数記申命記』 . 岩波書店. 349 頁.
- <sup>10</sup>今西一著 (1997) . 『近代日本の差別と性文化—文明開化と民衆世界』 . 雄山閣出版. 105 , 171 頁.
- <sup>11</sup>注5と同書, 130-133 頁.
- <sup>12</sup>注5と同書, 142-145 頁.
- <sup>13</sup>谷崎潤一郎 (2020) . 『秘密』 . 立春舎. 6, 8, 9, 10, 18, 21, 24, 25, 29, 33 頁.
- <sup>14</sup>佐伯順子 (2009) . 『「女装と男装」の文化史』 . 講談社. 21 頁.
- <sup>15</sup>光石亜由美 (2009) . 「女装と犯罪とモダニズム—谷崎潤一郎「秘密」からピス健事件へ—」 . 日本文学, 58 卷 (11 号) , 36-39.
- <sup>16</sup>江戸川乱歩 (2008) . 「屋根裏の散歩者」 . 千葉俊二. 『江戸川乱歩短篇集』 . 岩波書店 . 132, 134, 137, 138 頁.
- <sup>17</sup>平山雄一「明智小五郎年代記1」 (江戸川乱歩 (2016) . 『明智小五郎事件簿 I 「D 坂の殺人事件」「幽霊」「黒手組」「心理試験」「屋根裏の散歩者」』 . 集英社) .
- <sup>18</sup>江戸川乱歩 (2018) . 「黒蜥蜴」浜田雄介. 『江戸川乱歩作品集 II 陰獣・黒蜥蜴 他』 . 岩波書店. 233, 235, 239, 240, 241, 243 頁.
- <sup>19</sup>井上義和 (2021) . 「早稲田大学」 . 落合教幸・阪本博志・藤井淑禎・渡辺憲司『江戸川乱歩大事典』 . 勉誠出版. 27 頁.
- <sup>20</sup>コナン・ドイル、中田耕作 (翻訳) (1992) . 『シャーロック・ホームズ傑作選』 . 集英社.
- <sup>21</sup>島田紀夫 (1999) . 『アルフォンス・ミュシャ アールヌーヴォー・スタイルを確立した華麗なる装飾』 . 六耀社. 18 頁.

資料

(1)

町奉行筒井伊賀守殿へ御届ケ

四ツ谷内藤宿

大宗寺門前丁、山口と申、兵藏店

蕎麦屋忠藏

同人召使 竹次郎

辰二十

右竹次郎義、実ハ山王丁火消二番組の内、も組人足長吉娘ニテ、幼少の節両親相果て、たけ義ハ親類の世話を以て成長致し、十二三才の頃武州八王子宿鯛屋と申す旅籠屋へ年季奉公ニ相済み候処、飯売奉公難義ニ致し、同処を逃げ去り、御当地へ出、月代剃り、男の風俗ニ成り、別人方へ立廻り罷り在り候処、新吉原町其の外茶屋向き等之有る場所、台屋と申す煮売屋等へ売物等持運び致し、給金を取り居り、猶又当八月十日より深川永代寺門前仲町半七と申す者請人ニテ、右忠藏方へ相雇ひ召仕ひ罷り在り候、同廿九日昼九ツ時頃、竹義俄ニ腹痛致し、難義の旨申し候ニ付、忠藏居宅二階へ廻り介抱致し居り候、男子出生仕り候。たけ義、平日半天着、或ハ股引をはき罷り在り、洗湯ハ男湯へ参り候。風俗仕業共、女とハ相見へ申さず候ニ付、何心無く差置き候旨、忠藏申出で候。右の通り男ニテ出産を致し候趣、其の外種〃取沙汰致し候ニ付、一通り御聴きに入れ度く、此の段申上げ奉り候、以上。

名主

幸助

『藤岡屋日記』（巻九）名主が北奉行所へ差出した届（前掲書注1書、351—352頁）

(2) 一 無宿竹次郎事たけ、盗いたし候一件

当时无宿

竹次郎事

たけ

(中略) 酒給合候もの女子之儀相察、不義被申掛候節、相断候処、右姿之儀申触し候由申候、不得止事、密会いたし、其後知人之方え参候処、居合不申候、手元竿ニ懸有之帶盗取、右始末は押隠し、蕎麦商ひいたし候もの方月雇いたし候砌、出産いたし、右之趣主人え申明し、出生之小児は死去いたし候得共、面目無之と存候処、又々悪心出、手元ニ有之合羽盗取、欠落いたし、又候右始末ハ押隠し、煮売商ひいたし候もの方月雇いたし、暇出候後、古着商ひいたし候もの方ニテ衣類銜取、右品之内、所持いたし質入売払候金銀銭は、不残遣捨候段、不届ニ付、入墨之上、五十日過怠牢、(下略)

『御仕置例類集』『天保類集 女之部 火附盗賊之類』『天保三辰年御渡』の箇所にある(

『御仕置例類集』第一六冊、一五六三番) (前掲書注3書, 14—15頁)

(3) 一 無宿入墨竹義、品々悪事いたし候一件

無宿

入墨

たけ

右之もの儀、男之所業面白存候逆、人倫を乱し、野郎ニ成、其上盗いたし候依科、先達て入墨之上、過怠牢申付、以来男之姿ニて徘徊いたす間敷旨申渡候処、不相用、猶又右及所業、両度被召捕、外悪事無之、以来右躰之姿ニ相成間敷旨申渡、或は右依科押込ニ相成候節も、同様申渡有之処、相背、又候同様之姿ニて立廻罷在、(中略)前科ニ入墨有之候もの、ねたり事いたし、重敲之上、重追放ニ相成候先例をも見合、女之儀ニ付、百日過怠牢之上、重追放にて相当可仕候処、元来此ものハ、人倫を乱し、度々之申渡を更ニ不相用、猶身分を紛し悪事いたし候段、一通り裁許を破候類とは訳違ひ、御定書ニ裁許相済候儀を内証ニて不用、破候もの中追放と有之ニ見合、格別品不宜、以来之風俗取締筋ニも拘り候儀ニ付、遠島、『御仕置例類集』「天保類集 女之部 人倫を乱し候もの」「天保八酉年御渡」(『御仕置例類集』第一六冊、一七〇一番) (前掲注3書, 30—33頁)

(4) 女形は色がもとなり。元より生まれ付て美つくしき女形にても、取廻しを立派にせんとすれば、色がさむべし。また心を付て品やかにせんとせば、いやみつくべし。それ故、平生を、をなごにて暮らさねば、上手の女形とはいはれがたし。舞台へ出て茲はをなごの要めの所と、思ふ心がつくほど、男になるものなり。常が大事と存ずる。

芳沢あやめ『あやめぐさ』(前掲書注5書, 90頁)



(5) 花見で女装して三味線を弾く男性

(『東京名所三十六戯撰・隅田川白ひげ辺』1872年) (前掲書注5書, 131頁)



(6) 逮捕される男装の芸者（『東京日々新聞』1875年3月26日号）（前掲書注5書，133頁）





# 柳沢吉保時代における六義園の変遷

東京都豊島区  
私立 本郷高等学校

渡邊 尊仁



## はじめに

柳沢吉保は5代将軍徳川綱吉の小姓から側用人を経て老中に列し、甲府15万石を領するという、異例の昇進をとげた人物である。その柳沢吉保が元禄8(1695)年に駒込の土地4万8,000坪を拝領し、そこに建造したのが六義園である。

本稿では、柳沢吉保の存命中における六義園の質的変遷について明かにしようと思う。吉保の文化活動と六義園との関係を考察し、文化活動や吉保の環境の変化がどのように六義園に影響を与えるかを考察していきたい。

六義園について具体的に見ていく前に、六義園完成以前に柳沢吉保がどのような文化活動を行っていたかについて簡単に述べておく。第一は儒学である。五代将軍徳川綱吉の儒学好きはよく知られているが、吉保自身も儒学を修めており、配下に著名な荻生徂徠を召し抱えていた。第二は和歌である。吉保は幕府歌学方の北村季吟と元禄初期から交流があり、1700(元禄13)年にはその季吟から「古今伝授」を受けたという(注1)。詳細は後述するが、吉保は京都の霊元上皇に対して私的に和歌の添削を依頼したりもしている。第三は禅である。吉保の参禅は1677(延宝5)年、20歳の時に龍興寺の竺道祖梵に参じたことに始まり、多くの禅僧に帰依し、一つの公案について17年も考え続けたり、将軍綱吉の柳沢邸への御成の際に僧たちに禅問答をさせたりと(注2)、かなり禅に熱中していたようである。

それぞれの詳細な内容については省いたが、以上が吉保の主な文化活動である。儒学、和歌、禅の順に「私的」な度合いが高くなっている。すなわち、儒学は将軍綱吉の影響下にあるものであり最も「公的」であり、和歌は「私的」な交流の中にも幕府歌学方や朝廷といった「公的」要素が含まれているため、中間的である。また禅は吉保と禅僧との間の「私的」な関係であり吉保にとっても内的な営みである。これに注意しつつ、六義園について具体的に考察していきたい。

## 1. 「六義園八十八境」の分類と立地

柳沢吉保の日記『楽只堂年録』第108巻元禄15年10月21日の項に六義園の趣旨や名所の由来を示した「六義園記」という記事がある(注3)。そこには88の名所が設定されており、それらは「六義園八十八境」と呼ばれている。六義園完成当初の吉保の作庭構想を知るために、「六義園八十八境」を名所の由来に基づき〔表1〕に分類した。なお、複数の要素を重複して認めたものもある。

分類したところ、和歌の浦関係の名所が54か所と最も多く、次いで和歌関係の名所が34か所で続く。六義園の主題はよく知られているように和歌の浦や和歌であることがうかがえる。一方和歌以外の要素も少なからず存在していることもわかる。

次に、以上の分類をもとに「六義園八十八境」の分布を〔図1〕に示した。これについて考察する前に、柳沢家下屋内部の位置関係について〔図2〕をもとに確認しておく。六義園は本来柳沢家の下屋敷の一部であり、庭園に隣接する屋敷(「六義園記」では「<sup>むくきのたち</sup>六義館」となづけている)のほかにもたくさんの長屋が存在している。また下屋敷の周囲には堀が廻らされており、防備体制も整っていたことがわかる。よって、六義園の構想がなされた当時六義園は公的な下屋敷に内包された「公的な空間」であったといえる。そして六義園内で最も公的なのは下屋敷につながっている六義館である。

以上のことを考慮に入れて〔図1〕を考察していきたい。まず主題とみられる和歌の浦関連のものは和歌の浦に見立てた大泉水の周辺を中心に園全体に立地している。和歌関連のものは大泉水の周辺から築山の周囲にかけて存在している。神道関連のものは玉津島を模した小島にある。ここには和歌の浦の玉津島社を勧請した京都の新玉津島神社をさらに勧請した「新玉松」があり、七本の松が植わっている（注4）。また将軍綱吉につながる、公的なものである儒教関連のものは入口にある「遊藝門」と射場である「観徳場」にあり、やはり園内においても公的な場所につけられている。注目したいのは園北方の築山を越えたところに連立している中国文学関連の場所である。ここについて詳しく見ることにする。

園北方以外の中国文学関連の場所はおおむね杜甫や李白などの漢詩を由来としているが、園北方の中国文学関連の場所はやや趣を異にしている。ここには「座禅石」、「萬世岡」、「水香江」、「芙蓉橋」、「山陰橋」、「剡溪流」の6つがある。「座禅石」は「六義園記」には「石の形によって付けた」とある。「水香江」と「芙蓉橋」は「六義園記」から考えるとともに蓮がキーとなっている場所だ。「山陰橋」と「剡溪流」は『世説新語』の「任誕第二三」にある王子猷の説話がもとになっている。会稽の山陰に住み竹を愛した風流人である王子猷は雪が降っているのを見て、俗世を離れた隠者をたずねようという内容の『招隱詩』を朗詠し剡に住んでいた高名な隠者である戴安道に会いに行く、という話である（注5）。この辺りは禅、蓮といった仏教的要素および王子猷の隠者の風流な要素が存在している、いわば俗世を離れたような要素が集中している。そのうえ築山を越えた先にあり、「公的な空間」、すなわち下屋敷や六義館から最も離れた場所にある。園北方のこの一帯は園内で最も「私的な空間」である。

## 2. 吉保の和歌の交流と六義園

ここでは吉保の和歌に関する人的つながりと六義園との関連について考察していく。吉保の和歌の交流は①北村季吟との交流、②霊元上皇と周辺の公家との交流の二つに大別される。

北村季吟との交流は、「はじめに」でも述べた通り元禄当初からはじまっており、「古今伝授」を行うほど深いものであった。北村季吟の六義園に与えた影響は、島内景二氏が詳しく考察しているので、ここでは簡単にまとめる程度にとどめておく。島内氏によると、季吟は「六義園」のネーミング、「新玉松」の構想に影響を与え、さらには「和歌の浦の風景をうつす」という構想はもとは季吟のものであり、吉保が季吟の意思を引き継ぎ実行に移したと指摘している（注6）。この指摘どおりなら、主題とみなされている和歌の浦関連の名所は季吟と吉保ふたりの産物ということになり、吉保は「私的」な季吟との交流の成果を外部へアピールしようとしていたと考えられる。

以上のような季吟との交流は、六義園完成以前のものである一方、これから述べる霊元上皇や公家との交流は六義園完成以後のものである。吉保が霊元上皇と交流できたのは『松蔭日記』を書いた側室正親町町子の兄正親町公通のおかげであろう。『樂只堂年録』の1703（元禄16）年7月2日の記事（注7）や『松蔭日記』の十六卷「秋の雲」に、吉保が正親町公通に頼んで添削の願いを奏上してもらったことが書かれている。特に『松蔭日記』には「一首にても、此御さだめに入奉りてこそ、わかめいぼくも、こよなくまさるべかめれ」（注8）とあり、吉保が霊元上皇を和歌の権威ととらえていたことがわかる。『松蔭日記』によ

ると上皇は吉保が古墳・天皇陵の保存や古寺古社の復興に心を配っていることなどを理由に添削を引き受けたという。その後吉保は百首歌や千首歌を献上し、1704（宝永元）年には嫡子吉里も院から勅点をいただいている。なお1705（宝永2）年に吉保は参禅録に『護法常応録』という名をつけてもらい、勅序までいただいている。一方公家との交流も盛んであり、1703（元禄13）年以降『松蔭日記』には公辦法親王や鴨祐之、中院通躬といった公家との交流の記事が見える。

これらの交流の集大成というべきものが1706（宝永3）年10月の「勅撰十二境八景」の設定である。これは霊元院から六義園の景勝地十二境八景を選んでもらい、公家たちの和歌を添えたものである。〔表2〕に名称と和歌の作者をまとめたが、和歌の作者の公家は皆高位高官の持ち主であり、霊元上皇は当時の朝廷の実力者たちに和歌を詠ませたことがわかる。吉保が霊元上皇を和歌の権威として捉えていたことを考慮すると、この「十二境八景」の設定は吉保からすれば、「六義園に対する上皇のお墨付きを得た」ことである。さらに島内氏の指摘を考慮すれば「北村季吟の構想していた和歌の浦の景をうつすという構想が評価された」ということになる。六義園は幕府歌学方の北村季吟の考えをもとにし、霊元上皇から認められた、大変権威のある庭園となったといえよう。

なぜ霊元上皇の権威を得る必要があったのか。ここで「六義園八十八境」に由来として挙げられている和歌集をみると『古今和歌集』3か所・『拾遺和歌集』1か所・『千載和歌集』3か所・『続古今和歌集』1か所・『玉葉和歌集』2か所・『続後拾遺和歌集』1か所・『風雅和歌集』2か所・『新千載和歌集』3か所・『新続古今和歌集』2か所となっている。「八代集」からは7か所のみに対し「十三代集」からは10か所も取られている。『続古今和歌集』は後嵯峨院、『続後拾遺和歌集』は後醍醐天皇、『風雅和歌集』は光厳院の勅撰で、『新千載和歌集』は足利尊氏の、『新続古今和歌集』は足利義教の執奏である。また藤原家隆が2か所、定家が1か所、『千五百番歌合せ』が1か所、と後鳥羽院の歌壇の和歌も取り上げられているにもかかわらず、『新古今和歌集』に直接言及はされていない。

吉保は武家政権と比較的協調していた天皇の勅撰和歌集、または足利將軍家の執奏による和歌集を典拠として用い、武家政権と対立した後鳥羽上皇の『新古今和歌集』は典拠に用いなかった。吉保は幕府と朝廷の協調関係を望んでおり、和歌においても足利將軍が勅撰集の作成を執奏したように、公武の和歌に基づく関係を築こうとしていたのではないか。吉保が（あるいは綱吉政権が）公武協調的な姿勢であったことは、上記の『松蔭日記』の記述のように古墳・天皇陵の保存や古寺古社の復興を行っていたことや、大嘗会を復興したこと、禁裏御料を1万石献じたことなどからもうかがえる。そして、もし和歌を通じた協調を吉保が考えていたとしたら、「十二境八景」は吉保が執奏し、霊元院がこれに応え、勅撰和歌集ならぬ「勅撰十二境八景」を作成した、ととらえることができる。「勅撰十二境八景」を一種の勅撰集であるとする、六義園はもはや単なる下屋敷ではなく綱吉政権における公武協調を体現した重要な場所となりうる。

六義園は、和歌をテーマとした点でしばしばおなじ元禄文化に数えられる庭園で儒学を中心に据えた小石川後樂園と対比される。六義園を歴史的な流れの中でとらえようとするならば、吉保が和歌をテーマとして選び、朝廷を権威として捉えているという点で、正徳の治以降の朝廷権威の復興、さらには国学の発生といった今後の時代の潮流の先駆けといえるだろう。

### 3. 宝永期にできた新名所と吉保の「私的」営みの変容

「六義園記」には、1章でも扱った『楽只堂年録』収録の元禄期に書かれた「六義園記」と、宝永元年に卷子本の形で書かれた「六義園記」の2種類があり、両者には名所の数・名称・場所に若干の差異がある。宝永期に新たに出現した名所には「甘露味堂」、「小玉川」、「壺中天」、「架空梯」、「軒端山」、「放鶴亭」が挙げられる（注9）。「放鶴亭」は吉保が師事した黄檗宗の悦峯和尚の勧めでつくられたものである。また「壺中天」は『松蔭日記』に「昔仙人の、壺の中に天地を入れけん例に準へつ」とある。「甘露」や黄檗宗、「仙人」など、新たな名所は世俗を離れたような要素が多い。そして2章で指摘した園北方の地域と似ている。2章では園北方を「公的」な六義館から最も離れた「私的」な場所としたが、新たな名所はどうであるか。

それを考察するためには新たな名所の位置を確認しなければならないが、狩野常信らの描いた「六義園之図」（〔図3〕）や宝暦年間に書かれた「六義園全図並八景十二境和歌」（〔図4〕）などで建物の様子はわかるものの、新たな名所の正確な位置は不明である。宮川葉子氏は新たな名所を屋敷地と庭との間にある場所であろうとしている（注10）。この指摘は〔図3〕や〔図4〕の位置関係にも矛盾せず妥当であると思われる。そこでこの指摘を正しいとすると、完成当初世俗を離れた、「私的」な要素を含んでいた場所は、六義館から最も離れたところにあっただのに対し、新たな名所は「公的」な屋敷のすぐそばにあることになる。これは世俗を離れたような要素がもはや「私的」ではなくなったことを意味するのではないか。前に1705（宝永2）年に吉保は霊元上皇に自身の参禅録に『護法常応録』という名をつけてもらったと書いたが、これは吉保の公武協調のひとつであるとともに、いままで「私的」だった禅の営みの「公的」な営みへの移行を意味するのではなかろうか。

六義園完成時から宝永年間にいたるまで、吉保の環境に何か変化があったのだろうか。考えうるのは1705（宝永2）年5月の側室で吉里生母の染子の死である。染子は才女であり、侍女からも慕われる敬虔な仏教信者であった（注11）。『松蔭日記』によると、吉保は彼女の死に際し「たゞくれまどひ給ふ」（注12）といった様子でひどく悲しんでいたようである。さらに6月には北村季吟、桂昌院の死が相次いだ（注13）。周囲の人の相次ぐ死が吉保の内面に変化を与え、仏教的、あるいは隔世的な要素が重要性を増したことが、今まで遠くにあったそのような場所が屋敷の近くにやってきた理由ではなかろうか。筆者の推測にとどまるが、今後さらに考察・論証を進めるつもりである。

### 4. 吉保引退後の六義園

吉保は1709（宝永6）年の徳川綱吉の死去に伴い政治を引退し、六義園へ移り住んだ。西村氏らは世間に隠居の意思を表明するために宝永期の庭が造られたと指摘しているが（注14）、実際吉保は完全に政治から手を引いた。『松蔭日記』の「月花の巻」では園の情景や吉保の暮らしぶりが詳しく描かれている。そこには園内には多くの家臣が住んでいたこと、吉保が訪れてくる中院通躬ら公家と和歌の交流をしていること、吉保自身は俗世の交流をあきらめていること、六義園は「山里」とみなされていたことなどが描かれている。吉保は月や花をはじめとした、季節の移ろいに心をよせ、風流に、穏やかにくらしていたといえよう。吉保の六義園での暮らしは世間の喧騒を離れ、「山里」で自然と触れ合いながら暮らすものであった。

これは1. でふれた園北方の名所、王子猷の話と似ている。王子猷の話は風流な隠者たちの交流を描いている。「月花の巻」を見ると、吉保も「隠者」のような暮らしをしていたのではなかろうか。実は元禄当時、深草元政の書いた『扶桑隠逸伝』が流行し、肥前鹿島藩主鍋島直條や京都の儒学者伊藤仁斎が愛読するなど、広く流布していた（注15）。隠逸伝には高僧や貴族・武士だけでなく、宗祇、肖伯などのように自分なりの美意識を反映したり、自分好みのものに囲まれて心を楽しませる生き方をした隠逸も書かれていた（注16）。ここに吉保の「月花の巻」に描かれた暮らしぶりが重なるのである。そのため、2. で中国文学関連とした名所のいくつかは「隠逸的」というくくりでまとめることもできるだろう。

綱吉政権の終焉、吉保の引退を機に今まで「公的」な場であった下屋敷全体が「私的」な場になり、六義園の公武協調としての象徴的役割も終わったように思われる。吉保は俗世との交流をあきらめており、和歌の交流など「私的」な営みのみに従事した時期であった。また吉保は「一意禪室に籠つて座禪を修する」（注17）といった暮らしもしており、多くの人の死に接する中で仏教的営みもなされていたことがわかる。

## おわりに

ここまで六義園の名所の分布およびその変化、さらにはそれが意味するところを考察してきた。以上をもとに六義園の質的変遷について3つの区分にわけてまとめてみた。

第1期は六義園完成以前である。この時期に北村季吟が江戸へ出府し幕府の歌学方となり、吉保と季吟の交流が始まった。そして、1700（元禄13）年には「古今伝授」を受けた。また禅の面では10数年も悩んだ公案について許可をもらうなど、吉保はこの時期、禅にも熱心に取り組んでいた。このころに「和歌の浦を移す」という基本構想が確立したと同時に、園内にわずかながら仏教的・隠逸的施設を設置することも構想されたと考えられる。この時期は六義園の基本構想確立期と位置付けられる。

第2期は1702（元禄15）年の六義園完成から1709（宝永6）年の吉保の引退までである。この時期は吉保が活発に霊元上皇や公家とやり取りしていた時期で、また多くの公家の来客があった。3章で述べたように綱吉政権の公武協調の一つの在り方を示していたともいえる。

第3期は1709（宝永6）年から吉保の死去した1714（正徳4）年までである。この時期は多忙な政務から解放されたとともに多くの身近な人の死に接した吉保が文芸活動をしながら仏教的営みをする、隠者的暮らしを望んでいたことがうかがえる。

一般に大名庭園は藩の体制を維持し、自らの身分・職分・地位を維持するための「公的」な役割を担う装置であり、大名庭園の本務は徳川將軍家を接待したり、ほかの大名との付き合いをしたり、大名が家来をねぎらったりするための「公的な儀礼空間」であったとされている（注18）。六義園もはじめは「公的」な空間としての役割を持っていたが、吉保が引退してからは、家臣のねぎらいなどは行われたものの、「山里」としてみなされるなどその「公的さ」を大きく失った。これこそが六義園の最大の特徴といえる。

今回の調査を通じて、庭園には作庭者の意図が深く込められていることを認識した。大名庭園を鑑賞する際、単に木々や池泉の美しさに感動するだけでなく、その奥に隠された作庭者の意図をくみ取ることが重要である。そうすれば大名庭園の深みは何倍にも増すことを実感した次第である。

添付資料

表1 六義園八十八境：森守『六義園』（東京公園文庫、1981年）掲載の「六義園記」をもとに筆者作成

境	名称	由来				
		中国文学	儒教	和歌	和歌の浦	神道
1	遊藝門		○			
2	見山石			○		
3	詞源石	○				
4	心泉			○		
5	心橋				○	
6	玉藻磯				○	
7	風雅松	○	○	○	○	
8	心種松			○	○	
9	古風松				○	
10	詞林松			○	○	
11	掛名松				○	
12	夕日岡			○		
13	出汐湊				○	
14	妹山				○	
15	背山				○	
16	玉笹				○	
17	常盤					○
18	堅盤					○
19	鵲鴿石				○	○
20	詞華石			○		
21	浮宝石					○
22	臥龍石				○	
23	裾野梅				○	
24	紀川			○	○	
25	詠和歌石			○	○	
26	片男波				○	
27	仙禽橋				○	
28	芦邊			○	○	
29	名古屋			○	○	
30	新玉松				○	
31	兼言道				○	
32	藐姑射山	○			○	
33	言問松				○	

34	過勝峯				○	
35	藤浪橋			○		
36	宿月湾				○	
37	渡月橋				○	
38	和歌松原				○	
39	老ヶ峰			○	○	
40	千年坂			○		
41	臚の岡				○	
42	紀川上				○	
43	朝陽岩				○	
44	水分石				○	
45	枕流洞	○				
46	捨玉渚			○	○	
47	紀路遠山				○	
48	白鳥関			○	○	
49	下折峯			○		
50	尋芳径	○		○		
51	吟花亭	○				
52	峯花園			○		
53	衣手岡			○		
54	掛雲峯				○	
55	指南岡			○		
56	千鳥橋			○		
57	時雨岡			○		
58	覽古石			○	○	
59	妹松				○	
60	背松				○	
61	亀浮橋	○				
62	霞入江				○	
63	吹上浜				○	
64	吹上松				○	
65	吹上小野				○	
66	吹上峯				○	
67	木枯峯			○	○	
68	霞淳坂			○		
69	雲香梅			○		
70	桜波石			○		
71	浪花石			○	○	

72	白鷗橋			○	○	
73	藻塩木道				○	
74	藤代峠				○	
75	擲筆松				○	
76	能見山			○		
77	布引松				○	
78	不知汐路				○	
79	座禅石	○				
80	萬世岡	○				
81	水香江	○				
82	花垣山			○		
83	篠下道			○		
84	芙蓉橋					
85	山陰橋	○				
86	剡溪流	○				
87	蛛道			○		
88	藤里				○	○
/	観徳場		○			
/	千里場	○				
/	久護山	○				
	総計	13	3	34	54	5

図1 六義園八十八境の分布：藤井英二郎・浅野二郎「六義園の成立に関する史的考察 その1 吉保退隠までの時代」（『千葉大園学報 38号』、1986年）に掲載されている図をもとに筆者作成

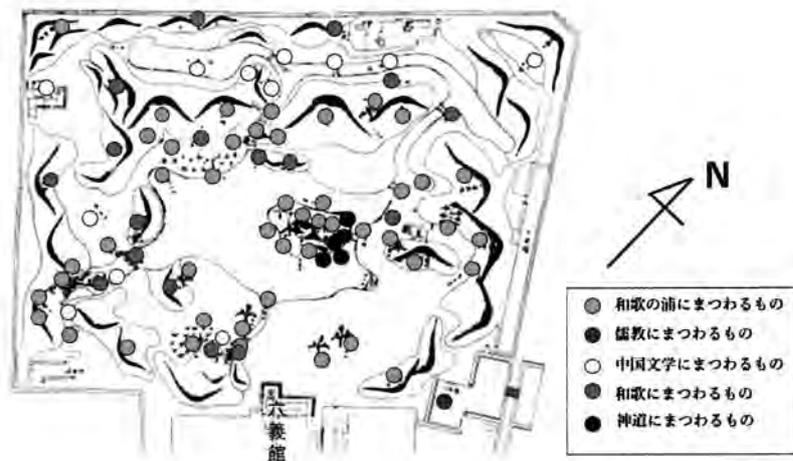


図2 六義園の図：東京都建設局「東京都における文化財庭園の保存活用計画（六義園）Ⅱ 本園の歴史・本質的価値」（2019年）より



表2 「十二境八景」の名称及び和歌の作者：『松蔭日記』・『公卿補任』中編（国史大系10巻）より筆者作成

	名称	作者	官位（宝永3年当時）
十二境	初入岡	中書令邦永	中務卿・不明
	玉藻磯	巫槐宗顕	前権大納言・正二位
	出汐湊	光禄大夫共方	前参議・従二位
	妹背の山	黄門輝光	権中納言・従三位
	新玉松	銀青光禄太夫有慶	従三位
	芦辺	特進公通	前権大納言・正二位
	藤代根	諫議太夫為綱	参議・左衛門督・正三位
	若松原	特進実業	前権大納言・正二位
	紀川上	黄門基長	権中納言・正三位
	嶺花園	光禄太夫光顕	前参議・従二位
	霞入江	八座親衛実陰	参議・右兵衛督・正三位
	藤里	特進重條	前権大納言・正二位
八景	若浦春曙	中書令邦永	（以下は十二境と同じ）
	筑波陰霧	特進重條	
	吟花夕照	光禄大夫共方	
	東叡幽鐘	光禄太夫光顕	
	軒端山月	八座親衛実陰	
	芦辺水禽	左金吾為綱	
	紀川涼風	黄門輝光	
	土峰晴雪	特進実業	

図3 狩野常信他「六義園之図」中巻（部分）国立国会図書館デジタルコレクションより



図4 「六義園全図並八景十二境和歌」(部分) 国立国会図書館デジタルコレクションより



## 注

注1：島内景二『北村季吟—この世のちの世思ふことなき—』（ミネルヴァ書房、2004年）。

注2：辻善之助「柳沢吉保の一面」（『史林』第10号、1925年）。

注3：林守『六義園』（東京公園文庫、1981年）。なお、本稿の「六義園記」はこの本に収録されているものを参照した。

注4：島内景二『北村季吟—この世のちの世思ふことなき—』（ミネルヴァ書房、2004年）。

注5：小林保治『唐物語』（講談社学術文庫、2003年）。なお、同様の話が日本の『唐物語』にもみられる。

注6：島内景二『北村季吟—この世のちの世思ふことなき—』（ミネルヴァ書房、2004年）。

注7：井上敏幸・上野洋三・西田耕三『元禄文学を学ぶ人のために』（世界思想社、2001年）。

注8：正親町町子作、上野洋三校注『松蔭日記』（岩波書店、2004年）。なお、以下本稿の『松蔭日記』の記述はすべてこの本を参照している。

注9：宮川葉子「六義園の歴史—柳澤吉保時代を中心に」（『国際経営・文化研究15巻』、2010年）。

注10：宮川葉子「六義園の歴史—柳澤吉保時代を中心に」（『国際経営・文化研究15巻』、2010年）。

注11：野澤公次郎『柳沢吉保の実像』（みよしほたる文庫、1996年）。

注12：正親町町子作、上野洋三校注『松蔭日記』（岩波書店、2004年）。

注13：正親町町子作、上野洋三校注『松蔭日記』（岩波書店、2004年）。

注14：西村剛・藤井英二郎・森守・浅野二郎「六義園の成立に関する史的考察その2：吉保退隠前後の庭の変化」（『千葉大園学報44号』、1991年）。

注15：井上敏幸・上野洋三・西田耕三『元禄文学を学ぶ人のために』（世界思想社、2001年）。

注16：島内裕子「『本朝遼史』と『扶桑隠逸伝』にみる隠遁像」（『放送大学研究年報』、1997年）。

注17：林和『柳沢吉保』（実業之日本社、1921年）。

注18：白幡洋三郎『別冊太陽 大名庭園 武家の美意識ここにあり』（平凡社、2013年）。



# 鳥取池田家の家老墓について

鳥取県立八頭高等学校 「亀の会」

大東樹生 岡田和華

國米優月 前田一輝

村田颯士 山根瑠斗



はじめに

(1) 岡山池田家と鳥取池田家の墓碑について（昨年までの活動の概要）

「亀の会」は国史跡鳥取藩主池田家墓所（以下、奥谷廟所とする）の研究を目的に2019年に結成された鳥取県立八頭高校生徒有志からなる団体である。このレポートはその研究成果を発展させたものである。はじめに昨年までの研究の概要を述べたい。

鳥取市国府町にある奥谷廟所は鳥取藩主とその一族のための墓所である。初代藩主池田光仲が死去した元禄6年（1693）に造営が始まった。家老荒尾但馬守成倫（米子荒尾当主、後見人として分家当主の荒尾修理亮成紹）、家老津田元長、家老和田式部真信、前家老池田日向守之信（山池池田2代目当主）らが造営を担当した<sup>1</sup>。元禄8年（1695）には光仲の戒名と事績を刻んだ仏式の亀趺墓が完成した<sup>2</sup>。

光仲墓は亀趺（亀形の台石）を用い、竿石の先端が円頭形になった位牌型墓碑であり、以後歴代藩主墓の型式となった。ただし2代藩主綱清墓のみは方趺（立方体の台石）となっている。亀趺は本家にあたる岡山池田家墓所（和意谷廟所）にある池田輝政墓に由来すると推測されているが文献的な裏付けは不明である<sup>3</sup>。

私たちは2つの先行研究に注目した。小坂博之（1988）は岡山藩主池田光政が寛文6年（1666）に光仲へ送った使者の口上に注目している（因府年表）。光政は閑谷学校創設などで知られる好学の大名であり、光仲の従弟にあたる。光仲の後見人でもあった。光政は同年、祖父輝政、父利隆などの遺骨を京都妙心寺より引き取り、和意谷廟所の造営に着手していた。光政は藩主自身が廟所を造営すべき理由、光仲の祖先、父親の遺骨の処遇などについて相談している。

一 左衛門督宰相殿之御墓此方國清寺に御座候拙者当国に居申内は何の氣遣無之候へ共末々子孫に成り國替等有之ては平地にて候得者百姓の田地になり或は人の屋敷になり可申かと心元なく存候葬なをし作事も有（此間原本欠字）同は後々氣遣無之山へ葬かへ然可様存候左候得者其許へ御引可被成哉此方之所を替申可哉思召寄承度之事。

岡山の國清寺にある左衛門督（忠継、光仲の叔父）、宰相（忠雄、光仲の父）の墓について、将来「国替」があれば平地のため田畑や宅地に転用されるかもしれないと心配し、「後々氣遣いの無い山」へ改葬した方がよいと勧め、和意谷に改葬するか光仲が引き取るか光仲の回答を求めている<sup>4</sup>。小坂氏は和意谷廟所の影響の結果、鳥取の奥谷廟所も谷を整地して新たに造営されたと考えている。また亀趺墓についても和意谷廟所の輝政墓が影響を与えたとする。鳥取で最も古い亀趺墓は家老池田之政の墓である。之政は輝政の兄之助（小牧長久手合戦で戦死）の孫であり、岡山池田家の家老池田由之の四男である。之政は光仲により鳥取に招致され、家老となった。之政は寛文9年（1669）に死去し<sup>5</sup>、子の之信が延宝9年（1681）に亀趺墓に改葬した。之政墓は仏式墓に亀趺を使用し、事績を墓碑に刻んでいる。仏式墓になった理由について小坂氏は触れていないが、儒式では墓主が位階三品以上に限定されるが、仏式墓ではその制限がないためという<sup>6</sup>。之政墓の竿石には戒名とともに之政の事績とともに「造建螭首亀趺之石以記行業」と刻まれている<sup>7</sup>。池田光仲の亀趺墓も竿石に事跡を刻み、建碑の目的として「螭頂亀趺之制以垂不朽」と彫られている。小坂氏は之政の墓が光仲墓の原型であったと考えている。

一方、吾妻重二は天和2年（1682）、岡山藩主池田光政の葬儀に際し、津田永忠が行った建議（『池田光政公伝』）に注目した。建議によると和意谷廟所は南宋朱熹の「家禮」

の註の規程をもとに周尺を使用して造営されており、墓碑もその規定に従っていた。

一、家礼ノ註ニ、明朝ノ法墳高一品ハ壹丈八尺、毎品二尺ヲ減ズト有之候ヘハ、四品ハ壹丈貳尺ニテ候、碑ノ高ノ事ハ見ヘ不申候得共、墳ト碑トハ同高サニ仕ル様相見ヘ候、尺ハ周尺トハ無之候、多分明朝ノ尺ニテ可有御座候得共、和意谷ノ御碑ノ尺周尺ニ御從ヒ候間、此度モ其儘周尺御用可然歟。

位階一品が18尺（「壹丈八尺」）、一品下がると2尺ずつ低くなり、四品は12尺（「壹丈貳尺」）となっている。吾妻氏は『池田光政公伝』に「輝政 周尺壹丈四尺 和尺八尺九寸八分八厘 光政八尺二分」<sup>8</sup>とあることから1周尺を1.55和尺とし、輝政（三品）、光政（四品）の墓碑の高さが「家禮」の註と一致すると述べ、岡山池田家が儒教の葬礼文化を受容した証拠とする<sup>9</sup>。

これら2つの研究をもとにすれば、岡山の分家筋にあたる鳥取池田家でも位階四品の藩主墓は12周尺、位階五品の分家当主墓は10周尺になると予想された。ただし、墓碑について高さが公表されているものは限定される。また、墓碑の高さは竿石のみか、台石も含むのか明確ではない。両池田家を比較するためには碑の高さを実測し、換算の基準を明確にする必要がある。2020年に「亀の会」生徒4人が和意谷廟所で実測を行った。津田永忠が言及した利隆墓（四品）は全高が291cmであった。これにより1周尺が24.25cm（1.23和尺）と判明した。和意谷の他の墓碑にあてはめるとほぼ端数のない数値となった。次に鳥取池田家の藩主、分家当主の墓碑の実測データをこの基準で換算した。鳥取では竿石に当てはめると藩主は12周尺、分家当主墓の竿石は同10周尺となり、「家禮」の註の規程に一致した。こうして、鳥取池田家の奥谷廟所の源流は岡山池田家の和意谷廟所であるという小坂氏の結論を補強することができた<sup>10</sup>。

## （2）鳥取池田家の家老墓について（本年度の研究の目的）

坂本敬司（2017）によると、鳥取藩成立直後は家督を継いだ光仲が幼少であったため、将軍秀忠より指示を受けた荒尾但馬、荒尾志摩、乾の3人と和田の4人の家老が合議により藩政を行った。「荒尾内匠成利は、父が利隆の備前監国時代から家老職を務め、自身も元和年間から忠継・忠雄の家老を務め、知行高もただ一人一万石を越える。また、荒尾志摩嵩就・和田飛驒三正は実の弟であった。荒尾志摩嵩就・和田飛驒三正は、共に忠継が独立した家を建てられた時に、忠継の家臣に移った家を継いだ。その経緯と知行高の点で、家格としては兄内匠成利より一段低い、乾甲斐直幾は、淡路入封時から家老として忠雄の側近にあり、知行高は四名の中で最も少ないものの忠雄との関係は最も密であった。<sup>11</sup>」。これら四家は別格の存在として家老職を勤めることが制度化していった。これら四家および津田、鶴殿、筆頭番頭の福田家を加えた7家は領地を与えられ「自分手政治」と呼ばれる自治を行う特権を持っていた。また、山池池田、津田、鶴殿、米子荒尾分家、倉吉荒尾分家、下池池田など新たに家老を輩出する家が追加された。こうした家老を輩出する十家は「着座家」と呼ばれ、明治維新までこの体制が続いた。

それではこれら「着座家」は藩主と同様に「家禮」註の規程を守っているのだろうか。今回は碑の高さから2つのことを検証したい。一つは岡山池田家の影響（「家禮」註の影響）であり、五品の分家当主の墓碑が10尺であれば、家老は六品で墓碑は8尺と想像できる。吾妻氏が引用する丘濬（明代）「文公家礼儀節」は次のようになっている。

墳一品高一丈八尺、每品減二尺。七品以下、不得過六尺。其石碑、一品螭首、二品麒麟、三品天祿辟邪、皆用龜趺、四品至七品皆円首方趺。

ただし家老には位階が与えられていない<sup>12</sup>。さらに「文公家礼儀節」では七品以下は一括して6尺を上限とする。八品、九品などの記事はない。家老は藩主、分家当主につぐ最上級の藩士であるから七品とは考えにくい。よって家老の位階は六品相当であり、家老が藩主とその一族の権威を尊重していれば、墓碑は8尺未満6尺以上となるはずである。

もう一つは藩主を頂点とした階層が成立していたかどうかである。坂本氏の述べるように家老間にも両荒尾家、和田家と乾家の間には格差があり、「自分手政治」を許される「上六家」に対し、領地が無い米子荒尾分家、倉吉荒尾分家、山池池田、下池池田など「下四家」の墓碑はどのような差があっただろうか。また家老と位階五品の分家東館、西館当主墓との差がどれくらいかなど検討する必要がある。要するに墓碑の大きさが藩主を頂点とした序列と対応していたかどうか確認してみたい。既に池上悟2021が鳥取池田家家臣の墓碑について大規模な調査を行っている。ただし、碑の高さについては全高であったり、竿石の大きさであったりして統一されていない。今回は台石と竿石を個別に実測して確認していきたい。

## 1. 調査の概要

### (1) 対象

大野哲二(2017)、池上悟(2021)の2つの先行研究を参考に調査を行った。「自分手政治」を行った家老は鳥取城下の菩提寺と領地の廟所の2箇所に墓碑を建立している。鳥取市内の菩提寺とそれぞれの領地の墓所について実測した。なお、着座家の中で米子荒尾分家については墓碑が確認できなかった。

### (2) 調査方法

調査方法は台石1段毎の高さと竿石の大きさを実測し、その後、1尺24.25cmで周尺に換算する。参考として和尺30.3cmでも換算した。なお、竿石の形態は池上(2021)にしたがって尖頂方型墓、板石整形型(自然石を修正したもの)、円頂方柱型の3種類とする。池上氏は尖頂方型墓を簡易化したものが板石整形型であるとし、円頂方柱型は藩主墓などに由来するとしている<sup>13</sup>。

## 2. 調査結果

家老が位階六品相当を自認していれば8周尺未満6周尺以上になる。乾、津田、鶺殿、山池(山池池田)、下池(下池池田)、倉吉荒尾分家はこの範囲内である。米子荒尾(城下8尺、領地9.1尺、以下同)、倉吉荒尾(9.3尺、9.5尺)、和田三信墓(8.7尺、8.4周尺)は位階五品相当の大きさである。「国替」時点の4家老のうち、乾を除く3家は五品相当の高さ(10尺未満~8尺以上)の墓碑を建てている。また、位階七品の上限である6尺より小さな家老墓は鳥取には無いことが分かった。よって家老は位階六品以上に相当ということになる。

### 3. 考察

両荒尾家と和田家が9尺を超え、五品に匹敵する墓碑を建てている。『世界大百科事典』では大名の「家格」について「大名はまず①国主（国持）、②准国主（准国持）、③城主、④城主格（准城主）、⑤無城の5段階に分けられる」と述べ、さらに「城主は城郭に住まう大名で、だいたい3万石以上の領地高があれば城主とみてよい。」と書かれている。鳥取藩には分家東館（2万5000石）、分家西館（1万5000石）という2つの支藩があり、その当主は大名であった。位階は五品であるが、城は持っていない。米子荒尾は禄高が1万3000石であったが米子城主であった。また、米子荒尾は池田家の外戚であり、初代成利は輝政の従兄弟にあたる。倉吉荒尾初代の嵩就と和田三正は成利の弟であったので同じく輝政の従兄弟ということになる。このように米子荒尾は大名に近い存在であり、それと血縁関係のあった倉吉荒尾、和田はそれに準ずる大型の墓碑を作っている。ただ米子荒尾、倉吉荒尾、和田の三家の墓碑は位階五品の上限10周尺には達していない。例外は鳥取市興禅寺にある米子荒尾初代成利墓のみで11.5周尺ある。この墓碑は明治時代に廃寺となった顕功寺にあったものである。「明治四五碑銘改刻」と刻まれており、竿石に継ぎ目の後がある。これが補修の結果なのか改造の結果なのか判断できない。この荒尾成利墓を除くと米子荒尾、倉吉荒尾、和田三信（三正の子）は9周尺を超えるが分家（五品）の10周尺には達しない。他の家老墓の中で乾家は最大の7.8周尺（領地内墓所）となっている。「国替」時の4家はやはり上位にきている。他の家老墓は基本的に7尺～6尺であり、位階六品相当と思われる。家老以外では福田家が注目される。禄高は乾家より上であり、「自分手政治」が許され、8,9周尺（領地内墓所）の大型墓を作っている。ただ、米子荒尾、倉吉荒尾、和田の9周尺よりは低い。これが偶然なのか、意図的なのかははっきりしない。

### 4. まとめ

このレポートの目的、鳥取池田家の家老墓において岡山池田家の影響（「家禮」註の影響）の有無については影響があったと結論づけられる。家老墓の竿石が位階七品の上限6周尺を超えていること、両荒尾家と和田家を除く家老墓は六品相当8尺未満～6尺以上の大きさの竿石を使用しているなど「家禮」の註の規程に近い。岡山池田家の影響があったと考えられる。なお、両荒尾家を除く家老墓は円頂方柱（円首方趺）であり、これも儒教の規程に忠実といえる。また、家老たちが藩主を頂点とした階層を意識していたかどうかについては墓碑の高さは両荒尾家と和田家が突出し、乾がそれに続く。これは「国替」時の4家老の中で淡路藩家老であった乾が下位にきていることから階層があったと思われる。ただし4家老の墓碑に位階四品の藩主墓（12周尺）を超える墓碑は存在しない。藩主と同等の墓碑は建てられなかった。また、鳥取興禅寺の米子荒尾成利墓を改造された結果として除外すれば、すべての家老墓は位階五品の分家当主墓よりも小さい。

最後に今後の課題を2つ挙げておきたい。一つは碑銘の整理である。家老墓には「米子城主」、「本藩執政」、「因幡執政」「本藩世相」など様々な肩書が混在している。特に「本藩」は因幡、伯耆二国を鳥取池田家として一体視する意味がある。どの時代からそういった意識が成立するか検討していきたい。もう一つは岡山池田家の家老墓の調査である。「家禮」の註など儒教の情報が両池田家の家老を通じて伝わったとすれば岡山池田家の家老墓の墓碑の大きさにも意味があると思われる。機会があればぜひ調査を行いたい。

## 脚注

- (1) 小坂(1977)p33 及び 坂本(2017)p52
- (2) 伊藤(2020)p65
- (3) 小坂前掲書 p43 及び 鈴木健太郎(2004) p38
- (4) 光仲は「被入御念被仰聞候段承届候」と光政の配慮について了解したものの、「當分存寄も無御座事に候はゞ右の墓所所先其儘被為置可被下事」（改葬する場所がないので忠継らの墓は当分、そのままにしてほしい）と回答している。
- (5) 寛文 9 年に池田光政が和意谷廟所で墓前祭を行った。（『備前市歴史民俗資料館企画展 アートする池田家』（備前市歴史民俗資料館、2014 年）p19）
- (6) 鈴木健太郎(2004)
- (7) 小坂前掲書 p43
- (8) 吾妻前掲書 p83
- (9) 吾妻氏は「輝政の墓碑は確かに一丈四尺であり、光政の場合も和尺の八尺二分を周尺に直せば一丈二尺あまりになる。つまり、墳土および墓碑の高さは明礼にのっとっているのである」（p83）と述べている。
- (10) 『2021 年一般社団法人日本考古学協会総会第 87 回総会研究発表要旨』（日本考古学協会）p123
- (11) 坂本前掲書 p38
- (12) 鳥取県立博物館山本隆一郎氏の教示による。
- (13) 「文公家礼儀節」は「四品至七品皆円首方趺」とあるので池上氏の「円頂方柱型」は「円首方趺」と同じと考えられる。

## 参考文献

- 石坂善次郎(1932)『池田光政公傳』（私家版）
- 岡嶋正義（著）佐伯元吉（編）(1915)『因伯叢書第五冊 因府年表』（因伯叢書発行所）
- ※名著出版社復刻本（1972）p123-129
- 松田重雄(1973)『鳥取市龍峯山広徳寺縁起』（広徳寺護法会）
- 梶川栄吉他『鳥取藩史 1』（鳥取県立図書館、1969 年）
- 徳永職男ほか『江戸時代の因伯〈上〉』（新日本海新聞 1978 年）
- 徳永職男ほか『江戸時代の因伯〈下〉』（新日本海新聞 1980 年）
- 河手龍海（1978）「鳥取藩における宗主権の確立」（史林第 61 巻第 4 号、京都大学）
- 西尾護（1982）『旧岩美郡の石碑』（私家版）
- 西尾護（1985）『国府の石碑』（私家版）
- 小坂博之(1988)「奥谷廟所の成立」（『地平線』第 5 号、今井書店）

西尾護 (1989) 『旧鳥取市の石碑』 (私家版)

平勢隆郎 (1993) 「日本近世の亀趺碑 中国および朝鮮半島の歴代亀趺碑との比較を通して」 (東洋文化研究所紀要 (121) p1-85)

鈴木健太郎 (2004) 「近世亀趺に関する考察」 (『史跡会津藩主松平家墓所』 会津若松市) 『国史跡鳥取藩主池田家墓所保存整備計画』 (2004、(財)史跡鳥取藩主池田家墓所保存会)

吾妻重二 (2008) 「池田光政と儒教喪祭儀礼」 (『東アジア文化交渉研究』 創刊号、関西大学)

大野哲二・中原斉 (2010) 「鳥取藩主池田家墓所の調査」 (『立正大学考古学フォーラム』、立正大学考古学会)

『企画展図録 アートする池田家』 (2014、備前市歴史民俗資料館)

坂本敬司 (2017) 「鳥取藩家老制度の成立過程」 (鳥取藩政資料研究会 (編) 『鳥取藩研究の最前線』 (鳥取県立博物館) 所収)

松原典明 (編) 『近世大名墓の考古学』 (2020、勉誠出版)

伊藤康晴 (2020) 「鳥取藩祖池田光仲墓所の造立過程と泉州石工」 (『鳥取県立博物館研究報告』 第 57 号)

池上悟 『山陰歴史考古学論攷』 (六一書房 2021 年)

## 図

図 1. 自分手政治の行われた場所

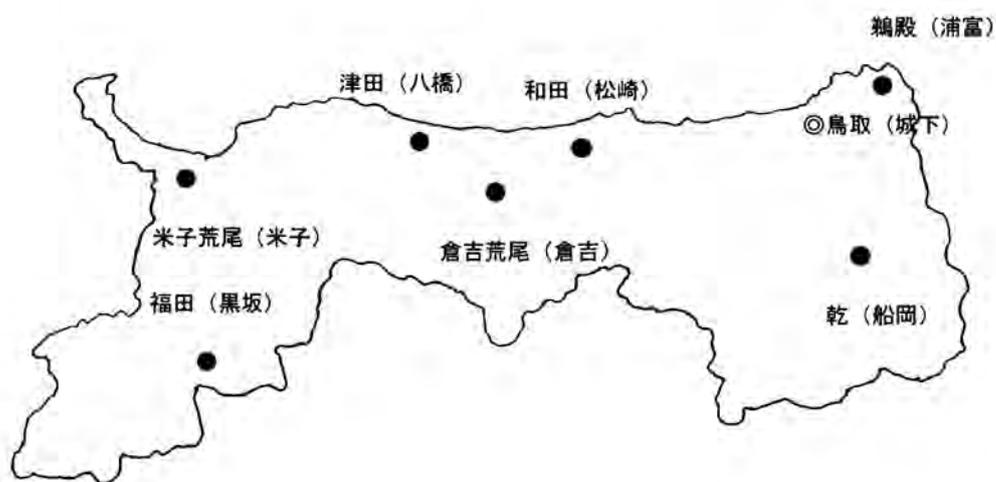


図2. 和意谷廟所（岡山）・奥谷廟所（鳥取）の墓碑（着色部が竿石）

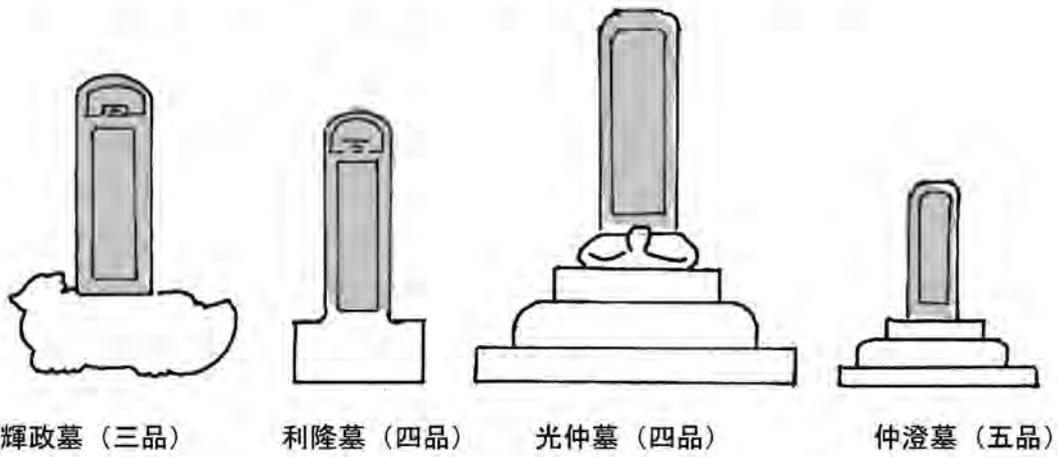
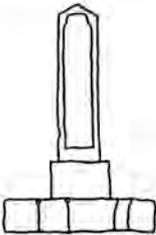
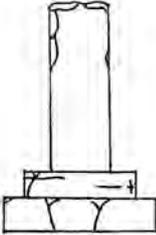
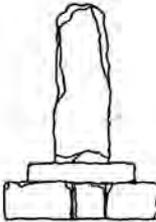
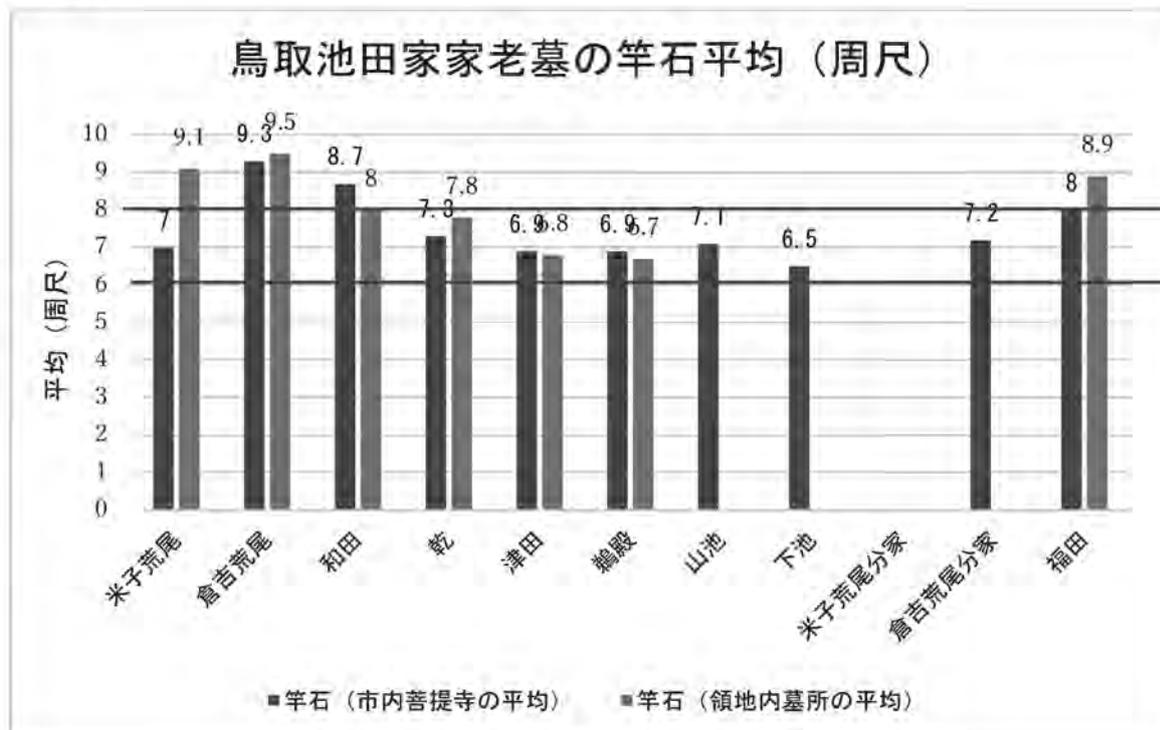


図3. 家老墓の形態

尖頂方柱型	板石整形		円頂方柱型
			
<p>米子荒尾（米子）</p>	<p>津田（八橋）、倉吉荒尾（倉吉）</p>		<p>津田（鳥取） 鶺殿（浦富）、乾、 ※福田</p>

## グラフ

紙幅の関係で以下のグラフにて鳥取市内の菩提寺と領地内墓所の墓碑（竿石）の平均値を示す。



## 表

表 1. 岡山池田家の墓碑

墓碑	位階	所在	没年(和)	没年(西)	竿石(cm)	台石(cm)	合計(cm)	竿石(周尺)	竿石(和尺)	台石(周尺)	合計(周尺)	合計(和尺)
池田輝政之墓	三品	一のお山	慶長18	1613	272.5	65	337.5	11.2	9.0	2.7	13.9	11.1
池田利隆之墓	四品	二のお山	元和2	1616	233	58	291.0	9.6	7.7	2.4	12.0	9.6
池田光政之墓	四品	三のお山	天和2	1682	242	60.5	302.5	10.0	8.0	2.5	12.5	10.0
池田慶政(8代)	四品	四のお山	明治26	1893	234.5	60	294.5	9.7	7.7	2.5	12.1	9.7
池田茂政(9代)	四品	五のお山	明治32	1899	240	60.5	300.5	9.9	7.9	2.5	12.4	9.9
池田輝興(赤穂藩2代)	四品	六のお山	正保4	1647	194.5	49	243.5	8.0	6.4	2.0	10.0	8.0
池田輝尹(綱政四男)	七品相当	六のお山	延宝7	1679	113	39.5	152.5	4.7	3.7	1.6	6.3	5.0
池田政實(慶政長男)	六品相当	六のお山	明治26	1893	162.5	47.5	210.0	6.7	5.4	2.0	8.7	6.9
鋭子(慶政四女)	七品相当	六のお山	明治3	1890	121	23.3	144.3	5.0	4.0	1.0	6.0	4.8
池田恒元(山崎藩初代)	五品	六のお山	寛文11	1667	194.5	49	243.5	8.0	6.4	2.0	10.0	8.0
池田政元(山崎藩二代)	五品	六のお山	延宝5	1677	194	48.5	242.5	8.0	6.4	2.0	10.0	8.0
池田利政之墓(輝政四男)	六品相当	七のお山	寛永16	1639	156	38	194.0	6.4	5.1	1.6	8.0	6.4
池田政虎之墓(輝政七男)	六品相当	七のお山	寛永12	1633	155	40	195.0	6.4	5.1	1.6	8.0	6.4
池田政貞之墓(利隆三男)	六品相当	七のお山	寛永10	1635	155.5	39	194.5	6.4	5.1	1.6	8.0	6.4

表 2. 鳥取池田家藩主の墓碑

墓碑	位階	所在	没年(和)	没年(西)	平石(cm)	台石下(cm)	台石中(cm)	台石上(cm)	龜趺(cm)	合計(cm)	平石(周尺)	平石(和尺)	台石(周尺)	合計(周尺)	合計(和尺)
池田光仲	四品	奥谷	元禄6	1693	276.8	46	47	34	42	445.8	11.4	9.1	7.0	18.4	14.7
池田順清	四品	奥谷	正徳元年	1711	278.5	46	43	35	42	444.5	11.5	9.2	6.8	18.3	14.7
池田吉泰	四品	奥谷	元文4	1739	285.7	24	46	35	48	438.7	11.8	9.4	6.3	18.1	14.5
池田宗泰	四品	奥谷	経亨4	1747	302.9	45	50	36	50	483.9	12.5	10.0	7.5	20.0	16.0
池田重寛	四品	奥谷	天明3	1783	274.9	42	55	36	44	451.9	11.3	9.1	7.3	18.6	14.9
池田治道	四品	奥谷	寛政10	1798	274.9	40	54	35.5	52	456.4	11.3	9.1	7.5	18.8	15.1
池田斉邦	四品	奥谷	文化4	1807	275.6	56	52	37	49.5	469.1	11.4	9.1	8.0	19.3	15.5
池田斉棟	四品	奥谷	天保元年	1830	276.8	45	50	36	50	457.8	11.4	9.1	7.5	18.9	15.1
池田斉親	四品	奥谷	天保12	1841	278.6	31.5	52	36	47.5	445.6	11.5	9.2	6.9	18.4	14.7
池田慶行	四品	奥谷	嘉永元年	1848	299.3	50	53	36.5	43.5	482.3	12.3	9.9	7.5	19.9	15.9
池田慶栄	四品	奥谷	嘉永3	1850	303.9	37	53	38.5	45	477.4	12.5	10.0	7.2	19.7	15.8
平均					284.3545					459.4	11.7	9.4	7.2	18.9	15.2

表 3. 鳥取池田家分家当主の墓碑

墓碑	位階	所在	没年(和)	没年(西)	平石(cm)	台石下(cm)	台石中(cm)	台石上(cm)	龜趺(cm)	合計(cm)	平石(周尺)	平石(和尺)	台石(周尺)	合計(周尺)	合計(和尺)
清定	五品	奥谷	享保3	1718	244	40	44	37		365.0	10.1	8.1	5.0	15.1	12.0
仲澄	五品	奥谷	享保7	1722	238.3	50	36	25		349.3	9.8	7.9	4.6	14.4	11.5
仲央	五品	奥谷	宝暦3	1753	223	41	67	32.5		363.5	9.2	7.4	5.8	15.0	12.0
仲康	五品	奥谷	宝暦8	1758	227.6	33	44	50.5		355.1	9.4	7.5	5.3	14.6	11.7
澄延	五品	奥谷	明和6	1769	222	34	44	47		347.0	9.2	7.3	5.2	14.3	11.5
延復	五品	奥谷	明和8	1771	219	48	48	34		349.0	9.0	7.2	5.4	14.4	11.5
定傳	五品	奥谷	安永2	1773	220	49.5	46	35		350.5	9.1	7.3	5.4	14.5	11.6
澄時	五品	奥谷	天明5	1785	221	50	45	34		350.0	9.1	7.3	5.3	14.4	11.6
定就	五品	奥谷	寛政2	1790	222	47	46	39		354.0	9.2	7.3	5.4	14.6	11.7
定興	五品	奥谷	文化4	1804	213.5	46	47	45		351.5	8.8	7.0	5.7	14.5	11.6
定常	五品	奥谷	天保4	1833	243.5	50	41	37		371.5	10.0	8.0	5.3	15.3	12.3
仲雅	五品	奥谷	天保12	1841	222	42	42	34		340.0	9.2	7.3	4.9	14.0	11.2
定保	五品	奥谷	弘化4	1847	243.5	50	40	37		370.5	10.0	8.0	5.2	15.3	12.2
仲津	五品	奥谷	嘉永3	1850	221	43	42	34		340.0	9.1	7.3	4.9	14.0	11.2
仲立	五品	奥谷	元治元年	1864	221	47.5	40	22		330.5	9.1	7.3	4.5	13.6	10.9
平均					226.8					352.5	9.4	7.5	14.5	11.6	

表 4. 米子荒尾の墓碑

墓碑	位階	所在	没年(和)	没年(西)	平石(cm)	台石下(cm)	台石中(cm)	台石上(cm)	龜趺(cm)	合計(cm)	平石(周尺)	平石(和尺)	台石(周尺)	合計(周尺)	合計(和尺)
1 成廣	五品相当	了善寺	延宝3年	1675	210	40		52		302.0	8.7	6.9	3.8	12.5	10.0
3 成廣	五品相当	了善寺	元禄5年	1692	213	45		62.5		320.5	8.8	7.0	4.4	13.2	10.6
4 成倫 (五輪型)	不明	了善寺	享保19年	1734											
5 成昭	五品相当	了善寺	延享4年	1747	216	45		58		319.0	8.9	7.1	4.3	13.2	10.5
6 成昌	五品相当	了善寺	寛延元年	1748	218	44		53		315.0	9.0	7.2	4.0	13.0	10.4
7 成隆	五品相当	了善寺	天明7年	1787	240	40	38.5	34		352.5	9.9	7.9	4.6	14.6	11.6
8 成尚	五品相当	了善寺	文政6年	1823	241	34	40	40		355.0	10.0	8.0	4.7	14.7	11.7
9 成輔	五品相当	了善寺	文久2年	1862	214	38	39.5	42		333.5	8.8	7.1	4.9	13.8	11.0
1 成利	四品相当	興禪寺	明暦元年	1655	279	26		27		332.0	11.5	9.2	2.2	13.7	11.0
7 成隆	六品相当	興禪寺	天明7年	1787	148			35		183.0	6.1	4.9	1.4	7.6	6.0
8 成尚	五品相当	興禪寺	文政6年	1823	217	15		30		262.0	9.0	7.2	1.9	10.8	8.6
9 成輔	六品相当	興禪寺	文久2年	1862	170	35	35	32		272.0	7.0	5.6	4.2	11.2	9.0
平均					215.1					304.2	8.9	7.1	3.7	12.6	10.0

表5. 倉吉荒尾の墓碑

墓碑	位階	所在	没年(和暦/没年(西)	竿石(cm)	台石下(cm)	台石中(cm)	台石上(cm)	龜趺(cm)	合計(cm)	竿石(周尺)	竿石(和尺)	台石(周尺)	合計(周尺)	合計(和尺)
高親(たかなり)	五品相当	満正寺	寛文9年	1669	233	45	22		300.0	9.6	7.7	2.6	12.4	9.9
寛就(のぶなり)	五品相当	満正寺	天和3年	1683	210	39	24		273.0	8.7	6.9	2.6	11.3	9.0
秀就(ひでなり)	五品相当	満正寺	享保13年	1727	235	37	35		307.0	9.7	7.8	3.0	12.7	10.1
勝就(かつなり)	五品相当	満正寺	享保20年	1735	240	47	34		321.0	9.9	7.9	3.3	11.3	10.6
甫就(もとなり)	五品相当	満正寺	明和4年	1767	219	53	32		304.0	9.0	7.2	3.5	12.6	10.0
斯就(これなり)	五品相当	満正寺	宝暦5年	1755	230	54	28		312.0	9.5	7.6	3.4	12.9	10.3
厚就(あつなり)	五品相当	満正寺	天明6年	1786	237	58	28		323.0	9.8	7.8	3.6	13.3	10.7
為就(ためなり)	五品相当	満正寺	嘉永6年	1853	226	18	55	43	342.0	9.3	7.5	4.8	14.1	11.3
世就(せつなり)	五品相当	満正寺	安政3年	1856	234	18.6	56	44	352.6	9.7	7.7	4.9	14.6	11.6
高親(たかなり)	五品相当	景福寺	寛文9年	1669	236	57	25		318.0	9.8	7.8	3.4	13.1	10.5
寛就(のぶなり)	五品相当	景福寺	天和3年	1683	200	55	43		298.0	8.3	6.6	4.0	12.3	9.8
秀就(ひでなり)	五品相当	景福寺	享保13年	1727	227	52	22		301.0	9.4	7.5	3.1	12.4	9.9
勝就(かつなり)	五品相当	景福寺	享保20年	1735	228	52	26		306.0	9.4	7.5	3.2	12.6	10.1
甫就(もとなり)	五品相当	景福寺	明和4年	1767	214	44	26		284	8.8	7.1	2.9	11.7	9.4
斯就(これなり)	五品相当	景福寺	宝暦5年	1755	237	48.5	22		307.5	9.8	7.8	2.9	12.7	10.1
厚就(あつなり)	五品相当	景福寺	天明6年	1786	214	22	27		263	8.8	7.1	2.0	10.9	8.7
為就(ためなり)	五品相当	景福寺	嘉永6年	1853	240	54.4	54	40	388.4	9.9	7.9	6.1	16.0	12.8
世就(せつなり)	五品相当	景福寺	安政3年	1856	232	37	33		302	9.6	7.7	2.9	12.5	10.0
				227.3					311.3	9.4	7.5	3.5	12.9	10.3

表6. 和田三信墓 ※三信墓(鳥取市奥谷廟所側)のみ原状をとどける。円首方趺。松崎の西向寺の「和田家祖先累代之墓」は池上(2021)によると改造墓とのこと。

墓主	位階	所在	没年(和暦/没年(西)	竿石(cm)	台石下(cm)	台石中(cm)	台石上(cm)	龜趺(cm)	合計(cm)	竿石(周尺)	竿石(和尺)	台石(周尺)	合計(周尺)	合計(和尺)
和田三信	五品相当	奥谷廟所	元禄7年	1694	212	34.5		31	277.5	8.7	7.0	11.4	9.2	
「和田家祖先累代之墓」	五品相当	西向寺			195	40		30	265.0	8.0	6.4	10.9	8.7	
大正7年建之和田信朋														
平均					203.5	37.25		30.5	271.3	8.4	6.7	11.2	9.0	

表7. 乾の墓碑

墓碑	位階	所在	没年(和暦/没年(西)	竿石(cm)	台石下(cm)	台石中(cm)	台石上(cm)	龜趺(cm)	合計(cm)	竿石(周尺)	台石(周尺)	合計(周尺)	合計(和尺)	
長次	六品相当	船岡	元和2年	1616	191	36	42	34	303.0	7.9	4.6	12.5		
長孝	六品相当	船岡	寛政10年	1798	192	39	43	33	307.0	7.9	4.8	12.7		
長徳	六品相当	船岡	文政12年	1829	188	36	40	34	298.0	7.8	4.5	12.3		
長胤(五輪塔)	不明	船岡	文政9年	1826		50								
長明(蓮臺塔)	不明	船岡	嘉永7年	1854		23		18						
徳精	六品相当	船岡	慶応元年	1865	182	38	36	35	291.0	7.5	4.5	12.0		
長胤	六品相当	興禅寺	文政9年	1826	176	37	39.5	33	285.5	7.3	4.5	11.8		
長明	六品相当	興禅寺	嘉永7年	1854	177	42	38	30	287.0	7.3	4.5	11.9		
										295.3	7.6	4.6	12.2	

表 8. 津田の墓碑

墓碑	位階	所在	没年(和暦)	没年(西暦)	竿石(cm)	台石下(cm)	台石中(cm)	台石上(cm)	龜趺(cm)	合計(cm)	竿石(周尺)	台石(周尺)	合計(周尺)
元茂	六品相当	八橋	元禄3年	1690	166	43		33		242.0	6.9	3.1	10.0
元長	六品相当	八橋	宝永5年	1708	166	33		31		230.0	6.9	2.6	9.5
元善	六品相当	八橋	正徳4年	1714	155	35		25		215.0	6.4	2.5	8.9
元知	六品相当	八橋	宝暦4年	1754	167	27		35		229.0	6.9	2.6	9.5
元武	六品相当	八橋	安永6年	1777	158	34		30		222.0	6.5	2.6	9.2
元義	六品相当	八橋	天明8年	1788	165	35		29		229.0	6.8	2.6	9.5
元謀	六品相当	八橋	弘化4年	1847	156	39		35		230.0	6.4	3.1	9.5
元貞	六品相当	八橋	天保11年	1840	166	39		34		239.0	6.9	3.0	9.9
元統	六品相当	八橋	嘉永3年	1850	182	40		33		255.0	7.5	3.0	10.5
元亮	六品相当	八橋	万延元年	1860	158	42		36		236.0	6.5	3.2	9.8
元善	六品相当	興禪寺	正徳4年	1714									
元知	六品相当	興禪寺	宝暦4年	1754	153	34	27	29		243.0	6.3	3.7	10.0
元武	六品相当	興禪寺	安永6年	1777	171	10	40	29		250.0	7.1	3.3	10.3
元義	六品相当	興禪寺	天明8年	1788	169	34	37.5	28		268.5	7.0	4.1	11.1
元謀	六品相当	興禪寺	弘化4年	1847	169	44	37.5	29		279.5	7.0	4.6	11.5
元貞	六品相当	興禪寺	天保11年	1840	171	26	37	27.5		261.5	7.1	3.7	10.8
元統	六品相当	興禪寺	嘉永3年	1850	170	25	39	30		264.0	7.0	3.9	10.9
元亮	六品相当	興禪寺	万延元年	1860	168	32	37	28		265.0	6.9	4.0	11.0
元文	六品相当	興禪寺	文久3年	1863	166	30	38	30		264.0	6.9	4.0	10.9
					245.7						6.8	3.3	10.2

表 9. 鵜殿の墓碑

墓碑	位階	所在	没年(和暦)	没年(西暦)	竿石(cm)	台石下(cm)	台石中(cm)	台石上(cm)	龜趺(cm)	合計(cm)	竿石(周尺)	台石(周尺)	合計(周尺)
長定(長静)	六品相当	浦富	享保5年	1720	170	36		23		229.0	7.0	2.4	9.5
長春	六品相当	浦富	享保15年	1730	160	38		33		231.0	6.6	2.9	9.5
長親	七品相当	浦富	元文元年	1737	133	18		23		174.0	5.5	1.7	7.2
長民(子文)	六品相当	浦富	宝暦4年	1754	170	36		36		242.0	7.0	3.0	10.0
長鼻	六品相当	浦富	宝暦10年	1760	170	35		24		229.0	7.0	2.4	9.5
長長	六品相当	浦富	天明5年	1785	168	40		24		232.0	6.9	2.6	9.6
長春	六品相当	浦富	文政7年	1828	165	40		27		232.0	6.8	2.8	9.6
長世	六品相当	浦富	文政7年	1828	165	37		30		232.0	6.8	2.8	9.6
長亮	六品相当	浦富	安政3年	1856	167	34		30		231.0	6.9	2.6	9.5
長定(長静)	六品相当	妙要寺	享保5年	1720	168	20		25		213.0	6.9	1.9	8.8
					224.5						6.8	2.5	9.3

表 10. 山池池田(山池)の墓碑

墓碑	位階	所在	没年(和暦)	没年(西暦)	竿石(cm)	台石下(cm)	台石中(cm)	台石上(cm)	龜趺(cm)	合計(cm)	竿石(周尺)	台石(周尺)	合計(周尺)
日向之政	六品相当	広徳寺	寛文9年	1669	184	93		31.5		308.5	7.6	5.1	12.7
日向之信	六品相当	広徳寺	元禄12年	1699	190	93		17		300.0	7.9	4.5	12.4
日向之成	六品相当	広徳寺	享保3年	1718	163.5					163.5	6.8	0.0	6.8
能登之茂	六品相当	広徳寺	文化3年	1806	153			21.5		174.5	6.3	0.9	7.2
之真	六品相当	玄忠寺			170	30	30	28		258.0	7.0	3.6	10.7
之純	六品相当	玄忠寺			178	97		27		302.0	7.4	5.1	12.5
					251.1						7.2	3.2	10.4

表 11. 下池池田（下池）の墓碑

墓碑	位階	所在	没年(和暦)	没年(西)	竿石(cm)	台石下(cm)	台石中(cm)	台石上(cm)	龜趺(cm)	合計(cm)	竿石(周尺)	台石(周尺)	合計(周尺)
大藏利恭	六品相当	法清寺	宝曆11年	1761	158	110		26.5		294.5	6.5	5.6	12.2
多仲利久	六品相当	法清寺	享和3年	1803	163	107		20.9		290.9	6.7	5.3	12.0
兵衛利仲	六品相当	法清寺	文化元年	1804	144	35		25.5		204.5	6.0	2.5	8.5
大藏利辰	六品相当	法清寺	天保2年	1831	164.5	95		29.5		289.0	6.8	5.1	11.9
										269.7	6.5	4.6	11.1

表 12. 倉吉荒尾分家の墓碑

墓碑	位階	所在	没年(和暦)	没年(西)	竿石(cm)	台石下(cm)	台石中(cm)	台石上(cm)	龜趺(cm)	合計(cm)	竿石(周尺)	台石(周尺)	合計(周尺)
大藏仙就	六品相当	景福寺	享保17年	1732	177	39.5		37		253.5	7.3	3.2	10.5
長門斯就	六品相当	景福寺	寛延2年	1749	174	37		36		247.0	7.2	3.0	10.2
飛騨昌就	六品相当	景福寺	文化2年	1805	176	44.5		30.5		251.0	7.3	3.1	10.4
					175.7					250.5	7.3	3.1	10.4

表 13. 福田家の墓碑 ※鳥取市一行寺、黒坂とも円首方趺

墓主	位階	所在	没年(和暦)	没年(西)	竿石(cm)	台石下(cm)	台石中(cm)	台石上(cm)	合計(cm)	竿石(周尺)	竿石(和尺)	台石(周尺)	合計(周尺)	合計(和尺)
久次(初代)														
久重(二代)														
久隆(三代)	五品相当	一行寺	延宝8年	1680	207	50		45	302.0	8.5	6.8	3.9	12.5	10.0
久武(四代)	五品相当	一行寺	享保元年	1716	214	42		43.5	299.5	8.8	7.1	3.5	12.4	9.9
久品(五代)	六品相当	一行寺	宝曆4年	1754	185	35	40	41	301.0	7.6	6.1	4.8	12.4	9.9
久茂(六代)	六品相当	一行寺	安永元年	1772	187	41	40	31	299.0	7.7	6.2	4.6	12.3	9.9
久命(七代)	六品相当	一行寺	安永5年	1776	187	39	39	32.5	297.5	7.7	6.2	4.6	12.3	9.8
久章(八代)											0.0			
久鎮(九代)	六品相当	一行寺	天保9年	1838	186	42	39	30	297.0	7.7	6.1	4.6	12.2	9.8
久徹(十代)	六品相当	一行寺	嘉永6年	1853	189	20	38	30	277.0	7.8	6.2	3.6	11.4	9.1
平均→					193.6				296.1	8.0	5.6		12.2	9.8
久武(四代)	五品相当	黒坂	延宝8年	1680	213	42	54	47	356.0	8.8	7.0	5.9	14.7	11.7
久章(八代)	五品相当	黒坂	文政元年	1818	214	36	55	43	348.0	8.8	7.1	5.5	14.4	11.5
平均→					213.5				352	8.8			14.5	11.6

## 調査状況

写真1. 池田光仲墓（奥谷廟所 2020.7.9）



写真2. 池田輝政墓（和意谷廟所 2021.1.30）



写真3. 池田利隆墓（和意谷廟所 2021. 1. 30）



写真4. 和田三信墓（奥谷廟所横 2021. 7. 31）







# 青谷上寺地遺跡出土土器の黒斑分析

— 土器づくり体験からのアプローチ —

鳥取県立青谷高等学校 課題探究（文学歴史コース）

森井優我      森本瑠奈      岡本杏珠      山村崇人  
谷口恵澄      永江紗輔      福本孔明

## 目次

- 1 はじめに
- 2 土器づくり体験から学ぶ黒斑分析
- 3 青谷上寺地遺跡出土弥生土器の黒斑分析
- 4 おわりに



## 1. はじめに

野焼き技術を検証するためには、野焼き実験と考古資料の焼成痕跡（黒斑など）を突き合わせる必要があること、また、有効な方法であることは、今までの研究成果からも明らかである（久世・北野・小林 1997）。青谷高校では、授業で弥生土器づくりをおこない、完成した土器で古代米の炊飯をおこなう体験を実施した。完成した土器は、底部の水漏れや輪積みでの接合の不十分さや側面のひび割れで炊飯に使用できる土器はほぼ皆無であった。ただ、炊飯に使用できなかったことで、野焼きでの黒斑が鮮明に残っており、分析をおこなうきっかけになった。黒斑のつき方には、燃料（薪、藁）や覆い型野焼きの場合には、覆う材質等に左右される。また、黒斑のできる土器の位置には、焼くときの土器の角度も大きく左右される。様々な状況下で、多くの実験を積み重ねることが大切な事ではあるが、限られた時間内でもあり、特に今回は覆い型と開放型の違いでどのように黒斑のつき方が違うのかを検討し、青谷上寺地遺跡から出土した弥生土器の黒斑を分析することによって、青谷上寺地遺跡出土土器が、どのように焼成されたかを推察した。

## 2. 土器づくり体験から学ぶ黒斑分析

### i) 黒斑の形成原理と先行研究

黒斑の形成原理について「黒斑の形成原理は、焼成開始後に薪等の燃料から出る煤などが土器全体に付着した後、温度の上昇とともに焼失するが、土器と何らかの接触部分は温度が十分に上がらないために残ってしまうものであると考えられる。」（岡安 2005）と述べられている。土器づくり体験1・2で十分に温度が上がらない部分が煤がついた状態になっていたことと矛盾しない。

先行研究についてであるが、多くの論文がある中で、特に「黒斑からみた弥生土器の野焼き技術」（久世・北野・小林 1997）、「弥生土器の焼成技術」（岡安 2005）を参考にした。縄文土器が開放型野焼きであり、弥生土器が覆い型野焼きであると考えられており、「縄文土器の黒斑は不定形のものが比較的不規則につくのに対して、弥生土器の黒斑の特徴は以下のようなものである。黒斑がつく位置は180度の位置関係に2ヵ所つく例がもっとも多く、次いで片面だけにつくものが多い。対になってつく例では、黒斑の一方は比較的大きくて形も円形、楕円形で輪郭をはっきりしているのに対して、反対側の黒斑はそれに比べると小さく、形が不整形で輪郭も不明瞭な物が多いというのが一つの典型的なパターンとして存在する。」（岡安 2005）と述べられている。また、「黒斑からみた弥生土器の野焼き技術」（久世・北野・小林 1997）では、研究史に触れられており、石橋新次氏が覆い型野焼き（雲南方式と呼称）と開放型野焼き（ベトナム方式と呼称）の対照実験を行い、両者の黒斑の特徴を弥生土器と比較したことが述べられている。「覆い型（泥を被覆材）では「境がはっきりした黒斑が部分的に付く」「全体に明るい茶褐色を呈する」のに対して、開放型では「全体にくすんだ色調で、黒斑はシミが広がったような漸移的な変化をする」という違いが見いだされた。そして、弥生土器の黒斑と器面色調は雲南方式に類似することから、弥生土器は雲南方式の覆い型野焼きで焼かれたと推定した。」（註1）。論文（久世・北野・小林 1997）では、「この推定には、①「境がはっきりした黒斑」は縄文土器にも普遍的にみられることから、覆い型と開放型の識別基準にはなりにくい、②器面の色調は、開放型でも熱の通りが良ければ明色に焼き上がるので、開放型と覆

い型の識別基準にはなりにくい、③覆い型野焼きでは、被覆材が泥の場合に加え、灰や生草の場合も考慮する方が有効である、などの課題があるものの」と述べられているが、このような研究の方法は「注目される」と評価している。

## ii) 土器づくり体験1・2

### 【土器づくり体験1】図版1・2

土器の成形は2020年9月、2週間連続で水曜日6、7限目（授業45分×2コマ+40分×2コマ）に行った。粘土はテラコッタを使用して、乾燥を2カ月間行った。覆い型野焼き（註2）を11月に実施した。図版1はそのときの様子である。雲南式で覆いは、藁こもの上に土を被せる方法をとった。前週の水曜日6、7限で野焼きの準備で、藁こものにのせる土づくりで、藁を混ぜた。覆いは、①地面を直径2mの円形に20cm浅く掘る。②浅く掘った窪みの中に土器の破片を入れて、下に敷く。③土器の破片の上に薪を並べる。④薪の上に藁を敷く。⑤藁の上に土器を置く。⑥土器の上に藁を被せる。⑦藁の上に、藁こもを被せる。⑧藁こもの上に、土（藁を混ぜて練ったもの）を貼り付け完成させた。7限終了間際に、火入れをし、午後4時から翌朝、午前5時ごろまで約12時間程度焼成した。翌日の木曜日、放課後、午後4時ごろ、土器を取り出した。

7つのうち、1つは、野焼き時に完全に破損した。2つは部分的に破損があり、残る4つは、破損なしであった。4つの土器は、破損しなかったが、すべてに水漏れがあった。水漏れの原因は、底部のあと輪積みして成形したが、接合が不十分であったことである。また、粘土が乾燥によってひび割れ、その部分から水漏れを起こしていた。時間の関係で、ケズリができておらず、野焼き時に粘土に水分が多く破損したと考えられる。また、火入れに失敗し、火入れの入り口の土器が急に温度が上がったため、破損の原因になった。炊飯実験で使用できた土器は1つで、上部が欠損していたが、水漏れがなかったので古代米を炊いた。ただ、途中で火の加減もあり、胴部の中央部分が割れて、最後まで炊飯することはできなかったが、胴部下部分にある古代米自体は、炊けていた。水漏れした4つの土器は、炊飯できなかったため、炊飯による煤はつかなかった。このことから、覆い型野焼きによる黒斑分析をおこなう良好な資料となった。

土器の置き方や燃料である薪の置き方、藁の置き方で黒斑の位置やつき方が異なるが、当日に撮影した写真から、土器の置き方、燃料材の配置が復元できた。黒斑は、土器を横倒しにして焼いたので、地面に接する部分と、天井部の壁が崩れて接した土器側面部に規則的についたと考えられる。黒斑のついた土器で唯一写真から、土器1のみ、1Aは覆い側（上）からついた黒斑で、1Bは地面側だと判断できた。他の土器については、上下は判断できなかった。蓋は、裏面のみ黒斑が見られた。

### 【土器づくり体験2】図版3・4・5

土器の成形は2021年6月上旬、2週間連続で火曜日6、7限目（授業45分×2コマ+45分×2コマ）で行った。粘土は石見赤土を使用し、乾燥を2カ月間行った。土器づくり体験1回目では不十分だったケズリを入念に行い、野焼きは8月上旬に、覆い型と開放型の2種類をおこなった。

開放型野焼き（註3）は、（図版4・5）①午前11時ごろから、地面を直径1m程度、

深さ10cm程度掘りくぼめ、土器を焼成する前に30分程度温めた。②その後、土器を置き、2時間程度温めた。③午後1時半より土器の周囲から火を入れ、1時間程度薪を燃やした後、土器の上に薪を置き、焼成した。④午後5時半ごろまで約4時間程度、焼成した。

覆い型野焼きは、土器づくり体験1回目におこなった方法と同じであったが、藁の上の土器の置き方を、口縁を上にして土器を立てるように配置した。午後1時半から翌朝まで焼成したが、午後8時頃から午後10時頃まで2回にわたって覆いが崩れ、土器が外部にさらされ、温度が上がらなかった。4個の土器のうち、1個は完全に破損しており、1個体のみ破損がなかった。ただ、煤がすべてに付着した状態で、黒斑分析ができなかった。

### iii) 覆い型野焼きと開放型野焼きの黒斑分析

土器1～4(図版2)、土器5～7(図版5)の違いについて表1(図版6)でまとめてみた。覆い型野焼きでは、覆いが崩れて焼成が悪いものもあるので、比較的よい土器1～4を対象にした。大きな特徴としては、規則性があるということである。黒斑が土器の胴部にもしくは肩部あたりにつくが、位置関係が2カ所でおおよそ180度反対側につくか、片面についている。また、土器1でみられるように黒斑と黒斑の境目がわりとはっきりしている。一方、開放型野焼きの黒斑は、土器5Aは黒斑の境界がはっきりしているが多くは、はっきりせず、位置関係も規則性は見られない。覆い型野焼きは、覆いの中で温度が上昇し、均質に熱が通ることから黒斑も接地部分だけが残るものと思われる。土器づくり体験1では、覆い型は口縁部を外に向けて横に寝かして土器を焼いたが、炊きつけに失敗し、炊きつけ口に大きな穴を開けたために、土器の破損やその周辺の土器は温度が上がらず、煤が土器に付着したままになった。また、覆いが崩れて中央部の天井部が落ちたことで、天井の周辺は外気にさらされたことから、口縁部の焼け具合が悪く、口縁部は煤が消え切らなかった。土器づくり体験2の覆い型野焼きは、早い段階で覆いの天井が崩れたため、温度が上がらず、土器の底部をのぞき、ほぼ煤が残り、土器は橙色にならなかった。

黒斑のつき方の違いについて、覆い型野焼きでは、黒斑が規則的につく。片面か、両面つく場合には180度反転させた位置にある。黒斑の境界が割とはっきりとしている。土器は壺形をイメージしてつくったが、胴部の接地面についたことから、黒斑が円形や楕円形の形状となったものが多かった。開放型野焼きでは、黒斑は規則性がない。全体的に煤が残った状態であった。黒斑の境目がはっきりしているものもあるが、全体的に境界がはっきりせず、形もはっきりしない。

## 3. 青谷上寺地遺跡出土弥生土器の黒斑分析

### i) 青谷上寺地遺跡の概要(註4)(図版7)

青谷上寺地遺跡は鳥取県東部の鳥取市青谷町に所在する。青谷平野の東側を流れる日置川と西側を流れる勝部川の2本の川の合流地点にある。青谷上寺地遺跡は約2200年前、弥生時代前期から生活するようになり、約1700年前の古墳時代の初めには湿地化した。弥生時代の約500年間生活の場所であったと考えられている。青谷上寺地遺跡は人・モノ・文化の行き交う交易の拠点として発展した集落であった。出土品には多量の土器をはじめ、容器や建築材などの木製品、漁撈具や装身具などの骨角製品、工具類などの鉄製品や石器など多種多様ものが見られる。特に遺跡で弥生人骨から脳が発見されたこと

が有名である。交流という面ではヒスイやサヌカイトが使用された石材が見つかり、日本海沿岸だけでなく山を越えた交易があったこと、貨泉が出土し、海を渡り北九州や朝鮮半島、中国大陸との交流があったことがわかる。

## ii) 青谷上寺地遺跡出土土器の黒斑分析 (図版8・9に写真を掲載)

青谷上寺地遺跡展示館で陳列している青谷上寺地遺跡出土の弥生土器を研究対象とした。ただ、器種で二次的に火を受けた可能性のある土器(甕等)は除外し、特に土器復元部については、本来のものではないので注意をした。研究対象は蓋を含めて8個体である。表2(図版6)にまとめた。

水差形土器…底部に1カ所黒斑が見られる。黒斑は鮮明で、境界がはっきりしている。

器台…黒斑は、同一の片側に口縁部と裾部に1カ所ずつ黒斑が見られる。黒斑は鮮明で、境界がはっきりしている。

高坏…坏部の内面、片面の脚部に見られる。黒斑は鮮明である。

壺…胴部から底部にかけて半面を覆うように黒斑が見られる。黒斑は鮮明である。

台付鉢…この辺りでは見られない備後北部系の土器である。体部と台部の異なる反対面に鮮明な黒斑が見られる。鉢の内面にも鮮明に黒斑は見られる。

無頸壺…胴部下半に黒斑が見られる。

台付装飾壺…胴部上半に黒斑が見られる。黒斑の境界は鮮明ではない。

蓋…把手のある表面は煤のつきが少ない。裏側は、黒斑が全面についている。

## iii) 青谷上寺地遺跡出土土器の野焼き方法の推察

覆い型野焼きの特徴として、土器づくり体験1の黒斑分析、表1から①黒斑は規則性がある(両面ある場合は180度反転させた位置、片面しかない)②黒斑の境界がはっきりしている、があげられる。この点から、青谷上寺地遺跡出土土器で、覆い型野焼きの可能性が高いのは、水差形土器、器台、壺、台付鉢であった。高坏については、黒斑の位置が坏部、片面脚柱部で、規則性があるとはいえない。ただ、黒斑の境界がはっきりしており、覆い型の可能性はある。無頸壺、台付装飾壺は、黒斑の範囲が広く規則性はない。境界もはっきりしていないので、覆い型野焼き焼成かどうかは不明である。蓋については(表裏)で対照的であり、裏側に黒斑があったが、焼成方法は不明である。覆い型と開放型で焼いた蓋は、裏側に黒斑があり、違いを見つけるのは難しかった。焼成時の土器の置き方を想定すると、図版10のようになる。覆い型野焼き焼成では、一度、土器を設置して焼くと動かすことができないので、黒斑は明瞭でつく位置も規則性があると考えられる。開放型野焼き焼成では、焼成中に土器を動かしたり、追加で薪などを燃やすことがあり、黒斑は規則性がなく、黒斑の境界も明瞭ではないと思われる。あくまで推定であるが、青谷上寺地遺跡出土の弥生土器は、覆い型野焼き焼成で行われた可能性が高いと思われる。

## 4. おわりに

青谷高校では、土器づくり体験を2年間にわたり、2回おこなった。2年次で青谷学、3年次で課題探究の授業時間におこなった。土器づくりのとき、講師の先生から焼成方法が弥生時代は覆い型野焼きであると聞かされ、青谷上寺地遺跡の弥生土器について調べよ

うと思ったのが研究のきっかけである。土器づくり体験1・2から覆い型と開放型の野焼き焼成をおこない、黒斑のつき方を比較して青谷上寺地遺跡弥生土器の焼成を検討したが、覆い型野焼き焼成の可能性が高いという結果が得られた。さらに多くの検証実験や民族誌事例を参照することが重要であると思われる。土器づくり体験から、弥生時代に青谷地域では、稲作農耕民が覆い型野焼き焼成で土器を焼く姿が思い浮かんでくるのである。

(註)

- (1) 石橋新次氏の研究については、野焼きの対照実験から黒斑のつきかたの違いを観察し、弥生土器と突き合わせている点で、本研究の方法と同じであるが、石橋氏の論文については実見できていない。
- (2) 覆い型野焼きは、青谷上寺地遺跡整備室濱本利幸氏にご指導をしていただいた。覆いの方法は、パンフレット「むきばんだ弥生ものづくり講座プロフェッショナル編高坏づくり野焼き」を参考にした。藁の上に泥をのせて窯をつくる方法で、中国雲南省に類例が残っており、「雲南式の覆い焼き」といわれている。ただ、本物を見たわけではない。
- (3) 開放型野焼きについても、青谷上寺地遺跡整備室濱本利幸氏にご指導をしていただいたが、野焼きの方法は、『古代体験 BOOK 縄文土器をつくろう』(いのうえ 1999)を参考にした。縄文土器の焼き方として参照した。
- (4) 青谷上寺地遺跡については、『弥生の港湾集落 青谷上寺地遺跡』(君嶋 2017)、青谷上寺地遺跡/とりネット/鳥取県公式サイト (<https://www.pref.tottori.lg.jp/aoyakamijichi/>)を参照した。青谷上寺地遺跡については、授業で青谷上寺地遺跡の発掘体験を経験したり、鳥取市青谷上寺地遺跡展示館の見学や青谷上寺地遺跡整備室の方から講義を受けるなど、遺跡についての理解を深めている。
- (5) 鳥取県の地図は、パンフレット「国史跡 青谷上寺地遺跡」鳥取県教育委員会文化財課歴史遺産室平成 23 年 9 月発行から抜粋した。青谷周辺の地図は、パンフレット「青谷上寺地遺跡展示館」2021▶2022 施設案内から抜粋した。

(参考文献)

- ・岡安雅彦 2005 「弥生土器の焼成技術」『世界の土器づくり』125・135 頁 同成社
- ・久世健二・北野博司・小林正史 1997 「黒斑からみた弥生土器の野焼き技術」  
『日本考古学』第 4 号 41-90 頁 日本考古学協会
- ・君嶋俊行 2017 『弥生の港湾集落 青谷上寺地遺跡』 鳥取県埋蔵文化財センター
- ・青谷上寺地遺跡/とりネット/鳥取県公式サイト (<https://www.pref.tottori.lg.jp/aoyakamijichi/>)
- ・いのうえせいしん 1999 『古代体験 BOOK 縄文土器をつくろう』 株式会社いかだ社
- ・パンフレット「むきばんだ弥生ものづくり講座プロフェッショナル編 高坏づくり 野焼き」2020

(謝辞)

本研究をおこなうにあたって、以下の機関・個人により、ご指導やご協力をしていただきました。機関では、特に青谷上寺地遺跡整備室、鳥取市青谷上寺地遺跡展示館、青谷高校図書館にお世話になった。個人では、特に土器づくりの講師として濱本利幸氏(青谷上寺地遺跡整備室)、青谷上寺地遺跡展示館の遺物の写真掲載許可では、森佳樹氏(鳥取市青谷上寺地遺跡展示館)に大変お世話になった。記して感謝申し上げます。

※最後に研究レポートを作成にあたり、青谷学・課題探究の授業を担当した吉田学先生のご指導、ご協力のもと完成することができたことを付け加えさせていただきます。



①泥をこね、藁を混ぜて覆いの土をつくる



⑤土器の上に藁をかぶせ、藁こもで包む



②土器の破片の上に、薪をおく



⑥藁こもの上に泥をかぶせる



③薪の上に藁を敷く



⑦穴を空けて、火を入れる



④藁の上に土器を横にして、並べる



⑧12時間焼成し、火が消えたあと



覆い型野焼き焼成後の土器



土器 3 A



土器 1 A



土器 3 B



土器 1 B



土器 4 A



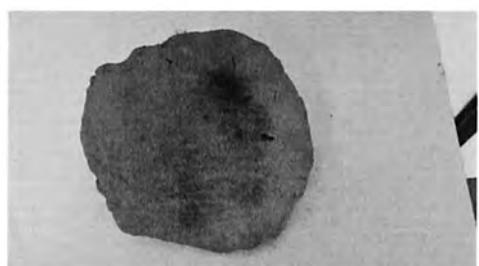
土器 2 A



土器 4 B



土器 2 B



蓋 (裏)

図版 2 覆い型野焼き 1 の土器 (黒斑)



①底の部分をつくる



⑤口縁部の近くまで積み上げる



②輪積みで積み上げる



⑥口縁部をつくる



③輪積みで積み上げながら、境目をなでる



⑦口縁部をつくり、完成



④けずりをおこなう



⑧土器に水をつけ、最後の調整



①土器を焼成する前に、土を温める



⑤1時間程度、周囲から燃やす



②土器を2時間程度、温める



⑥土器の上にも薪を置き、燃やす



③土器の周囲から火を入れる。



⑦4時間程度、燃やしたあと



④土器の周囲から燃やす様子



⑧完全に燃やし終えた様子



土器 5 A (前)



土器 6 B (後)



土器 5 B (後)



土器 6 C (横)



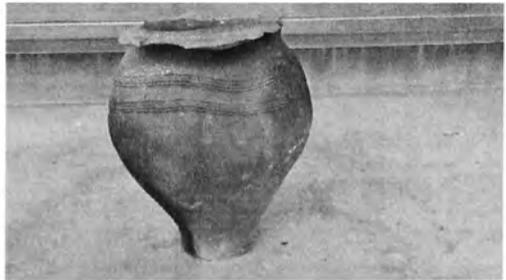
土器 5 C (横)



土器 7 A (前)



土器 5 D (横)



土器 7 B (後)



土器 6 A (前)



土器 7 C (横)

図版 5 開放型野焼きの土器 (黒斑)

表1 土器づくり体験の土器黒斑分析一覧表（本文3頁）

	焼成方法	黒斑の位置	規則性	黒斑(明瞭・不明瞭)	黒斑の形	図版
土器1	覆い型	A	○	A(明瞭)	A(円形)	2
土器2	覆い型	AB	○	AB(明瞭)	A(楕円形)	2
土器3	覆い型	A	○	A(明瞭)	A(円形)	2
土器4	覆い型	無				2
土器5	開放型	AB	×	A(明瞭)BC(不明瞭)	A(形状不明)	5
土器6	開放型	ABC	×	AB(明瞭)	形状不明	5
土器7	開放型	A	×	A(明瞭)BC(不明瞭)	A(形状不明)	5
蓋	覆い型	裏		B(明瞭)	形状不明	2

※黒斑のある1つの面をA(表)として、A(表) B(裏) C(側面) D(側面)と表記した。図版2・5同様。

※土器1のみ、A(表)が上である。他の土器は、覆い側(上)か地面(下)かは判断できない。

表2 青谷上寺地遺跡出土土器の黒斑分析一覧表（本文4頁）

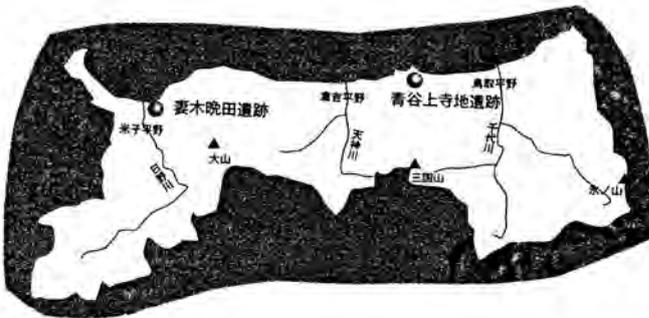
	器種	時代(時期)	黒斑の位置	規則性	覆い型可能性 大(◎)有(○) 不明(△)	図版
1	水差形土器	弥生時代中期中葉	底部1ヵ所	○	◎	8
2	器台	弥生時代後期中葉	片面(口縁部裾部)	○	◎	8
3	高坏	弥生時代中期後葉	坏部(内面)片面脚柱部	△	○	8
4	壺	弥生時代前期末	片面胴部～底部	○	◎	8
5	台付鉢	弥生時代中期中～後葉	片面交互(体部台部)	○	◎	9
6	無頸壺	弥生時代中期後葉	下半部	×	△	9
7	台付裝飾壺	弥生時代後期	上半部	×	△	9
8	蓋	弥生時代後期	裏	△	△	9

※図版8・9については、黒斑のある1つの面をA(表)としてA(表) B(裏) C(側面) D(側面)と表記した。

表の番号と図版8・9の土器の番号は一致。

※土器の時期については、青谷上寺地遺跡展示館のキャプションから表記した。

図版6 表1、表2（本文3・4頁）



図版7 青谷上寺地遺跡 地図（註5）



1 水差形土器 A



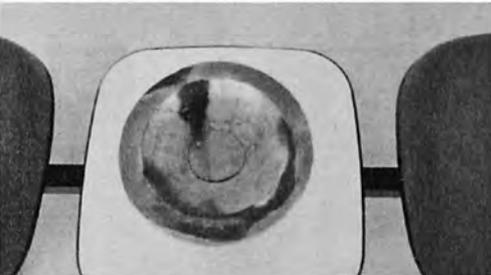
1 水差形土器 B



2 器台 A



2 器台 B



3 高坏 (上)



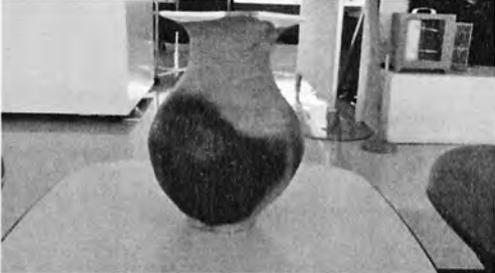
3 高坏 A



3 高坏 B



3 高坏 (下)



4 壺 A



4 壺 B

図版 8 青谷上寺地遺跡出土土器 (青谷上寺地遺跡展示館)



5 台付鉢 C



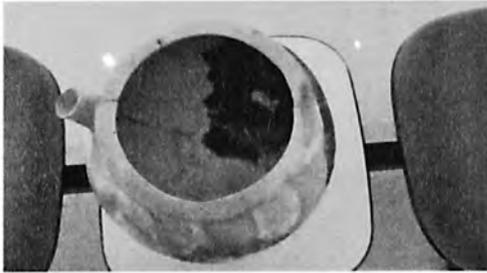
7 台付裝飾壺 A



5 台付鉢 D



7 台付裝飾壺 B



5 台付鉢 (上)



8 蓋 (上)



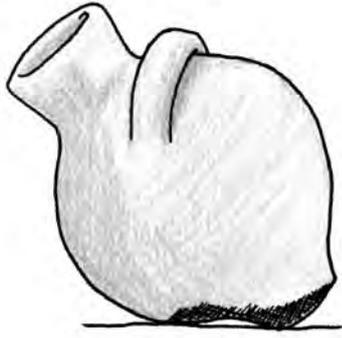
6 無頸壺 A



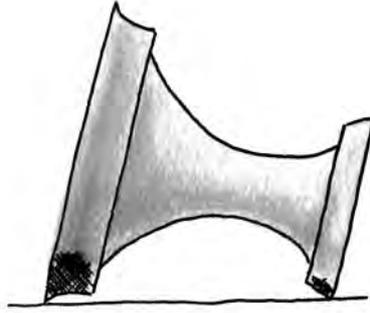
8 蓋 (裏)



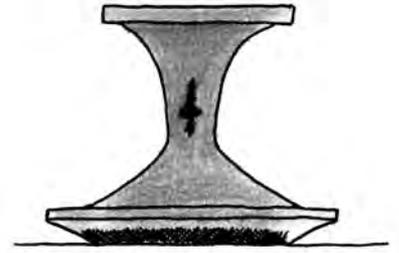
6 無頸壺 B



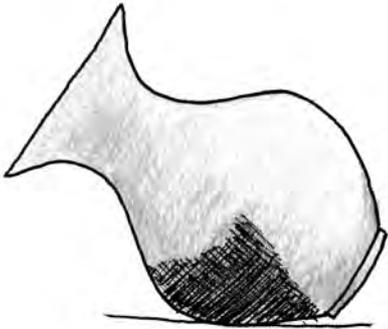
1 水差形土器



2 器台



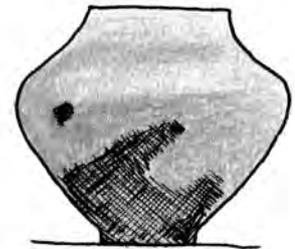
3 高坏



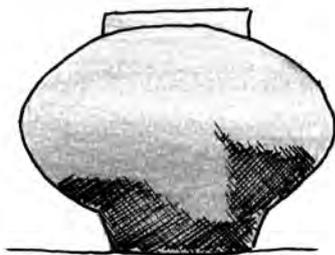
4 壺



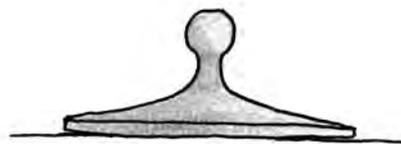
5 台付鉢



6 無頸壺



7 台付裝飾壺



8 蓋

図版 10 青谷上寺地遺跡出土弥生土器の焼成時の置き方（推定）

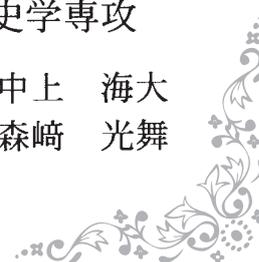


定光寺前遺跡出土の土師器からみた  
中世老岐の研究

長崎県立老岐高等学校

東アジア歴史・中国語コース2年歴史学専攻

坂本 蒼羽 中上 海大  
野口 柊亨 森崎 光舞



## 1. 研究の目的

長崎県立壱岐高等学校東アジア歴史・中国語コースでは、壱岐市にある長崎県埋蔵文化財センターの協力のもと、定光寺前遺跡において令和元年、令和2年の2回にわたり発掘調査を行った。私たちの先輩は、令和元年に出土した貿易陶磁器の分析考察により、壱岐の中世の歴史理解を深めることができた（壱岐高校 2020）。しかし、令和元年の発掘調査において見つかった多くの中世土師器については、研究の対象とはされなかった。そこで私たちは、令和2年度の2回目の発掘調査によって見つかった、多くの中世土師器を合わせて検討することで、壱岐の中世の歴史理解をさらに深めたいと考えた。

## 2. 研究の対象とする地域について

### (1) 深江田原の西北隅にまとまる重要遺跡

壱岐島は、九州西北海上の玄界灘にあり、昔から対馬島とともに、中国・朝鮮半島との対外交渉に重要な役割を果たしてきた。

この島には、深江田原という長崎県内で2番目に広い平野があり、ここには「魏志倭人伝」に記載される弥生時代の「一支国」の王都、原の辻遺跡が見つまっている。この遺跡では更に、古代には木簡5点が出土しており、特に「白玉六口」と書かれたものが注目される。またイスラム青釉陶器、華南産白磁といった珍しい遺物とともに、道路状遺構が確認されていることから、役所の存在が推定されるとともに、この場所が優通駅（ゆうず；現在の壱岐島の南東部に位置する印通寺港）と伊周駅（かす；島の北端に位置する勝本港）を結ぶ、重要な位置にあったと考えられている。

この深江田原平野の西端には興触（こうふれ）遺跡があるが、この周辺は国府につながる地名や、印鑰社とされる興神社があることから、壱岐国府の推定地の一つとなっている。また、ここから北東に300m程度の場所には観城（とじょう）跡がある。『壱岐名勝図誌』によると、ここには平安末期には源義朝を殺害したことで知られる長田壱岐守平忠致が居住していたとする記録があり、また元寇の後、室町時代には壱岐に入って統治していた松浦党五氏のうち、松浦党志佐氏の代官真弓氏が居住していたとされている。1472年の波多泰（はたやすし）の壱岐攻略の際、観城は戦場となり、その時焼け落ちたとされている。

このように、長崎県第2位の面積を持つ穀倉地帯である深江田原の北西隅は、古代から中世にかけて、歴史的に重要な場所であったことがわかる。壱岐の中世館跡・遺物包含地は23地点確認されているが（図1・表1）、その中でも観城跡は、大規模に発掘調査がなされ、この地域において最も多くの情報が集まる遺跡である（壱岐高校 2020）。

### (2) 観城跡

観城跡では、平成8年に長崎県教育委員会と芦辺町教育委員会により調査が行われ、その後平成17年に壱岐市教育委員会により調査が行われた。

平成8年の発掘調査では、圃場整備のため、城の主郭に当たる丘陵部周囲の調査がなされ、掘立柱建物跡や、主郭を囲む壕があることが確認された（長崎県 1997）。調査平成17年度には、遺跡の状況を確認する目的で、低地部と主郭部分にあたる丘陵部のトレンチ調査が行われた。低地部の調査では、土塁と推定される遺構が見つまっている。丘陵部の調査では、4つの整地層と遺構面が確認され、継続的にこの土地が利用されたことが分かった。また、丘陵部からは豊富な遺物が発見されており、特に大量の土師器が出土したことが注目される（壱岐市教育委員会 2006）。

### (3) 定光寺前遺跡

さて私たちが長崎県埋蔵文化財センターの協力のもと発掘調査を行った定光寺前遺跡は、壱岐市芦辺町湯岳本村触の、深江田原平野を見下ろす山の中腹に立地する。周辺は谷が入りこんでいるが、現在この小さな谷の最奥部には定光寺という寺院があり、遺跡はその前面に位置する(図3)。上述の観城跡からは、北北東に直線距離300mのところであり、『壱岐名勝図誌』によると、平安時代末、長田忠致と同時期の平清盛により創建されたとされる。また1472年の波多泰の侵攻により敗北した真弓氏の首を埋葬し、それを弔うために作られた「馬形石」があったとする記録が残るなど、観城と強い関連をうかがわせる(図2)。これまで令和元年7月と令和2年7月の2回にわたって発掘調査が行われて、豊富な遺物から壱岐の中世の様子を明らかにする手がかりが得られている。

#### 3. 令和2年度定光寺前遺跡発掘調査の概要

令和2年度の調査は、昨年度に引き続き、第2回目である。調査期間は令和2年7月28日、30日、31日の3日間である。令和元年度の調査においては1区(2m×5m(10㎡))および2区(2m×5m(10㎡))を設定し掘削を行ったが、日程上の都合により、遺物包含層の掘削を終えることができなかったため、令和2年度も同じ箇所を再び掘削した(図6)。1区は山門前の平坦地中央やや西より、2区は定光寺の位置する谷の西側斜面の平坦地である。1区、2区ともに、粘性が非常に強い昨年度の廃土の掘り上げに多くの労力を必要とし、作業は予定よりはかどらなかった(写真4)。このため、1区では包含層の一部の掘削(写真1)、2区では下層を確認するためのサブトレンチの拡張(写真2)にとどまった。遺物は昨年度と同様に、貿易陶磁器と土師器が多く出土した。この中で、1区において包含層から完形に近い坏(図11-1、写真3)を検出したことが大きな成果として挙げられる。

#### 4. 今年度の分析の対象とそのねらい

令和2年度には、定光寺前遺跡出土の中世の貿易陶磁器を用いて、観城との比較を行った。これは、あ)定光寺前遺跡の貿易陶磁器が、既存の貿易陶磁器の編年案による2期から5b期(11世紀後半～17世紀前半)の6つの時期のどの時期に属するものであるのかを調べ、い)その増減と観城跡の増減を比較するものである。さらに、う)定光寺前遺跡出土の貿易陶磁器については、白磁・青磁・朝鮮陶磁に分類し、各時期の割合の変化について調べた。そしてこの分析によって得られたグラフに基づいて、定光寺前遺跡とその周辺の中世壱岐の歴史について、3つの仮説(仮説A～C)を提示することができた(壱岐高校2020)。

この先輩たちの研究をより進めるために、今年度私たちは中世土師器を用いて分析を行った(注1)。それは、次の4つのねらいがあるからである。

一つ目には観城跡の「主郭部から出土した中世土師器」という資料の特性から、その増減が貿易陶磁器に比べて、より人間の活動の活発さをはっきりと反映している可能性があると考えられること。二つ目には、中世土師器の編年を作ることができれば、貿易陶磁の編年よりも細かな時間幅における変化がとらえられること。三つ目には、今後私たちが壱岐の中世研究を進めるための時間軸とすることができること。四つ目には、壱岐の中世土師器の地域的な特徴を把握して他地域との比較が可能になること。以上の4つである。

#### 5. 観城跡の編年

観城跡の発掘調査報告書(壱岐市教育委員会2006)には、豊富な土師器の出土が報告さ

れている。この中でも全 82 点の坏についての編年を行い、時期ごとの坏の点数の増減を見ることで、先輩たちの研究と比較を行う。坏を今回の研究の対象とするのは、形の変化が追いやすいためである。編年は博多遺跡群の中世土師器の編年を行った楠瀬慶太氏の編年研究（楠瀬 2007）に倣い次の手順で行った。

1：形の変化、および法量の変化（具体的には、①底部形態、②体部形態、③口径の三つ（図 7））によって細別器種に分類を行う。

2：1 で分類した各細別器種について、典型的な分類基準と比べたときに「古い特徴を残すもの」→「典型的な分類基準」→「新しい特徴を持つもの」というように、想定される器形の変化（ここでは体部形態）を用いて、さらに細かく分類する。

3：楠瀬編年の博多遺跡群での存否・頻度のセリエーション（表 2）に、2 で細かく分類したものを当てはめて、それぞれの時期比定を行う。この際、他の細別器種との形態の類似も根拠とする。

以上の 1～3 の手順により組列を組んで作成した編年図が、図 10 である。それぞれの時期に配列した根拠については、表 3 に記載している。これによって、壱岐の中世土師器編年を作ることができた。そしてこの結果からは、観城遺跡から出土した中世土師器が、楠瀬編年によるとⅢb 期からⅥb 期（13 世紀後半～17 世紀前葉）にかけてのものであると判断される。また、この壱岐の中世土師器の編年案と博多遺跡群の中世土師器を比較することで、次の 2 つの傾向を見出すことができた。壱岐の中世土師器は、①全体的に器壁が分厚い。②Ⅴb 期から底部がさらに分厚くなり、回転糸切の痕跡についても粗く、雑になる。③坏 B5<c>のような壱岐独自の細別器種も見られる。

ただし、これはあくまでも博多遺跡群の資料を用いた楠瀬氏の編年案を用いて、壱岐の中世土師器の編年案を作成したものであり、現状では、これが「層位による検証」を経ていないものであることは明記しておく。これは今後の課題である。

## 6. 定光寺前遺跡出土の中世土師器

定光寺前遺跡の調査においては、中世土師器が多く出土したが実測に堪えない小片がほとんどである。本研究においては、このうち、観城跡の分析と同じ基準で比較するために、①底部形態、②体部形態、③口径の三つがそろったものについて分析の対象とした。この基準によって分析の対象となるのは次の 7 点である（図 11）。

図 11-1～4 は、坏 B4 <b> に分類される。図 11-1 は、底部形態が上げ底で、体部が内湾するものの比較的明瞭な段をもつという特徴から、Ⅲb 期のものである。この土器は、包含層（4 層）よりほぼ完形の状態で出土した。この包含層年代を考える手がかりになる可能性があり、注目される。図 11-2 は、底部形態が平底または上げ底とみられ、体部が内湾するもののやや弱い段をもつという特徴から、Ⅳa 期のものである。図 11-3 は、底部形態が上げ底で、体部形態が典型的な内湾であるという特徴から、Ⅳb 期のものである。図 11-4 は、底部形態が平底か上げ底で、体部が内湾するもののやや直線的であるという特徴から、Ⅴa 期のものである。図 11-5, 6 は、坏 B5 <b> に分類される。図 11-5 は、底部形態が平底で、体部形態が典型的な直線状のものであるという特徴から、Ⅳb 期のものである。図 11-6 は、底部形態が平底で、体部が直線的ではあるもののやや外反するという特徴から、Ⅴb 期のものである。図 11-7 は、坏 C13 に分類される。この土器は、通称大内系と呼ばれており、坏 B とは系譜が異なる（楠瀬 2007, p. 24）。楠瀬氏の分類基準

によると、体部調整に凸凹が残り、体部形態が真っ直ぐ外方に立ち上がるという特徴から、坏CI3に分類される(図9)。楠瀬編年の存否・頻度のセリエーションから(表2)、この器種はVIa期のものである。

## 7. 分析と考察

### (1) 貿易陶磁器を用いた研究との比較

私たちは、先輩たちが作成した棒グラフ(壱岐高校2020)の上に、時期ごとの中世土師器の数量の変化を重ねることで、遺物の増減の傾向にどのような違いがあるのかについて検討した(図12)。時期区分については、先輩たちの研究の成果との対照を行うために、昨年度の時期区分に合わせている。

図12を用いた比較の結果、中世土師器の数量の変化において、次の特徴が現れていることを読み取ることができた。

①観城跡において、中世土師器は3b期に現われ、4期に最多となり、5a期、5b期にかけて減少する。

②定光寺前遺跡において、中世土師器は3b期に現われ、4期に最多となり、5a期、5b期にかけて減少する。

①より、観城跡における中世土師器の増減は、4期に最多となる貿易陶磁器の増減と極めて似ている。このことは、これらの出土遺物の増減が、人間の活動の活発さをよく反映しているという前提を裏付けるとともに、私たちの中世土師器編年の妥当性を表しているものと思われる。

②より、定光寺前遺跡における中世土師器の増減は、2期から3b期にかけてが最多となる貿易陶磁器の増減とは、グラフの波形が大きく異なる。特に2期から3a期にかけて中世土師器が見られないことは、昨年の研究による「定光寺前遺跡の周辺こそ、後世に平家に関連すると伝承されるような集団がいた場所ではないか(仮説A)」とする仮説を支持する結果ではない。しかしながら、今回の分析では対象となった定光寺前遺跡の中世土師器の点数が7点と少ないことから、昨年度の仮説が間違っているとは言えない。

また①、②より、観城跡における中世土師器の増減のグラフの波形と、定光寺前遺跡における中世土師器の増減の波形は非常によく似ていることがいえるが、4期から5a期にかけて土師器が多く見られることは、定光寺前遺跡において、この時期においても場所の利用が盛んであった可能性を示す。ただし、このように想定した場合、観城跡の貿易陶磁器の保有率との間に、大きな隔たりがあるものと考えられ、その原因として、観城跡が館であり、定光寺前遺跡が寺院であるという場所の性格の違いを挙げるができる。

### (2) 観城跡出土の中世土師器を用いた仮説の提示

さらに、私たちの研究による編年案では、貿易陶磁器の編年案よりも細かい時期区分が可能である。このため、観城跡の中世土師器の増減をグラフにした(図13)。すると、次のことが読み取れた。

③観城跡において土師器はIIIb期に現われ、IVb期(14世紀後葉)に最大となり、VIa期(16世紀前葉)にかけて緩やかに減少していく。

③より、昨年度の研究により示された「波多泰が亀丘城に拠点を築いてから壱岐の中心が郷ノ浦町周辺に移り、それまで壱岐において歴史的に重要な場所であった深江田原が次第に衰退していったのではないか(仮説B)」とする仮説を支持しない結果が得られた。先

輩たちは4期（私たちのIVa期、IVb期、Va期）から5b期（VIb期）にかけて、貿易陶磁器の減少が見られる理由を、1472年の波多泰の侵攻をきっかけとすると考えたが、波多泰の侵攻は私たちのVb期であり、③のように中世土師器の減少はVa期から始まっている。

このことについて、私たちは次の2つの可能性を考えた。

一つ目は、中世土師器の点数の変化に現われされる変化が、観城跡および定光寺前遺跡周辺の状況を表すものであると考えた場合である。この場合、深江田原には志佐氏の領地として、観城跡の他に「真弓館跡」という代官真弓氏が住んでいたという記録が残る遺跡があるので、一方が城で他方が館であるという観城と真弓館跡の使い方の変化、つまり14世紀後半から15世紀後葉（波多泰の侵攻（1472年））にかけて、次第に観城跡が館から城へと性格を変えていくことによって、次第に人が住む人数が減少し、中世土師器の量が減少したのではないかと（仮説Ⅰ）という可能性である。また、IVb期（14世紀後葉）に、観城における中世土師器の出土が最も多くなる理由については、この時期に、「館」あるいは「城」を築城するための活動や、陣地としての防衛力の確保といった理由から、人間活動が最も盛んであった、という可能性が考えられる。

二つ目は、中世土師器の点数の変化に現われされる変化が、観城跡および定光寺前遺跡周辺に限るものではなく、壱岐島全体の傾向を表すものであると考えた場合である。この場合、14世紀後葉から16世紀前葉にかけて、①戦国時代という世相を反映し、五氏による戦乱あるいは五氏以外との争い、あるいは②自然災害や飢饉などによる人口減少がその理由として想定される。また、中上史行氏の文献に、14世紀末に李氏朝鮮が成立して以降、倭寇に対して投降帰順をすすめ、定住化させたという記載があるので（中上 1995）、③倭寇として活動していた壱岐島民の朝鮮半島への移住が進んだことなども想定される。これらの理由により、IVb期からVa期にかけて、もともと壱岐の衰退は始まっており、こうした壱岐の衰退に乗じて、波多泰が侵攻してきたのではないかと（仮説Ⅱ）、という可能性である。

## 8. まとめと展望

上記のように、観城跡における中世土師器の増減が、前提として何を表すのかによって、仮説Ⅰ、仮説Ⅱがそれぞれ導かれる。そのため次の検討が必要である。

仮説Ⅰ；真弓館での発掘調査によって出土した中世土師器の増減が観城跡の時期的変化と逆であった場合、あるいはVb期に遺物の大幅な減少が見られた場合、仮説はより確からしくなる。

仮説Ⅱ；壱岐島内の深江田原を離れた遺跡において、中世土師器の増減が同じであることを確認する必要がある。この仮説の要因として挙げた①、②、③について、これまでの研究の成果を十分に調べて検討することができなかつたので、五氏の活動や当時の歴史について、学習を進める必要がある。

また、今回の壱岐の中世土師器の土器編年では層位による検証がなされていないので、今後まずはすでに刊行されている報告書をもとに検証を進めたい。

これらの検討によって、今後も中世壱岐の歴史理解を深めていきたい。

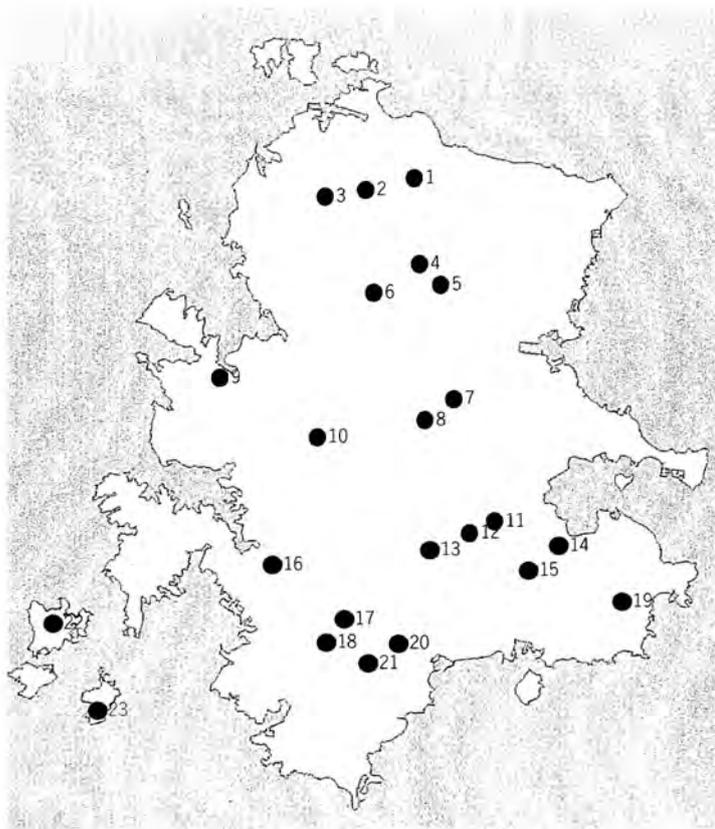


図1 越中世館跡・遺物包含地分布図

表1 越中世館跡・遺物包含地一覧

No.	遺跡名
1	中砂遺跡
2	川津遺跡
3	加賀城遺跡
4	安国寺前遺跡
5	大屋館跡
6	前神田遺跡
7	月読神社前遺跡
8	大谷第三遺跡
9	浜遺跡
10	御屋方遺跡
11	定光寺遺跡
12	郡城遺跡
13	興触川上遺跡
14	天水遺跡
15	古大屋遺跡
16	殿川遺跡
17	宮原遺跡
18	宮原遺跡
19	筒城浜遺跡
20	真弓館跡
21	大宝遺跡
22	大泊遺跡
23	池尻遺跡



図2-1 定光寺周辺絵図（越中名勝図誌より加筆・転載）（越中高校2020より転載）



図 2-2 定光寺周辺絵図（図 2-1 枠部分拡大・一部加筆）  
赤枠①・②は発掘調査区推定位置（①：1区、②：2区）  
（吉岐高校 2020 より転載）



図 3 定光寺前遺跡周辺航空写真（吉岐高校 2020 より転載）



図4 定光寺前遺跡周辺遺跡  
(沓岐高校 2020 より転載)



図5 観城跡平成17年度調査空中写真  
(沓岐市教育委員会 2006 より転載)

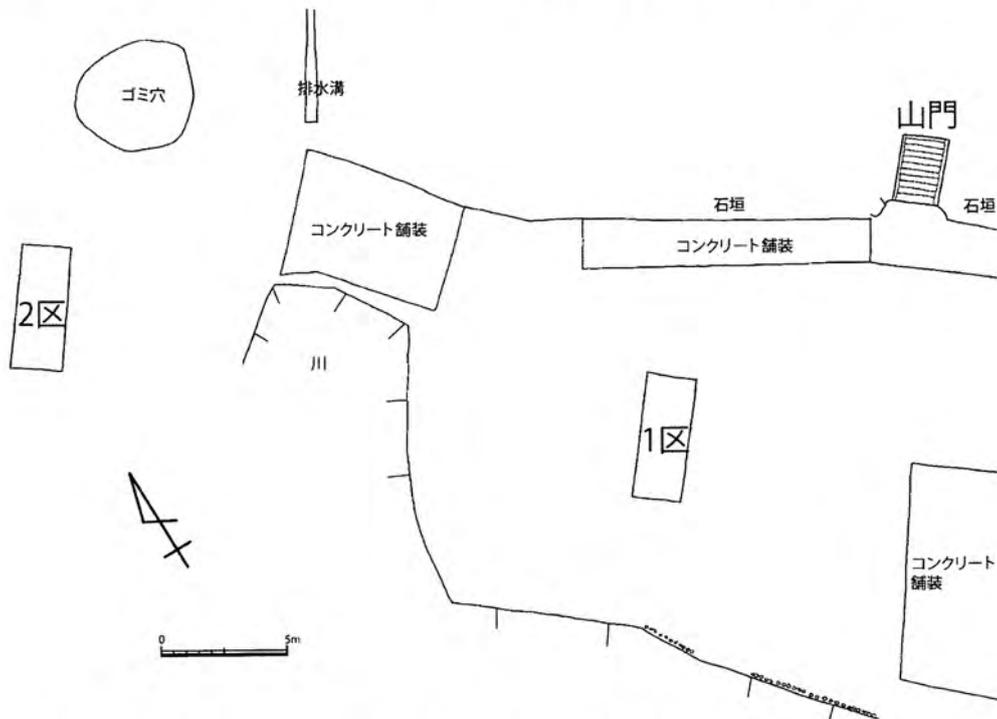


図6 定光寺前遺跡 発掘調査区配置図 (沓岐高校 2020 より転載)



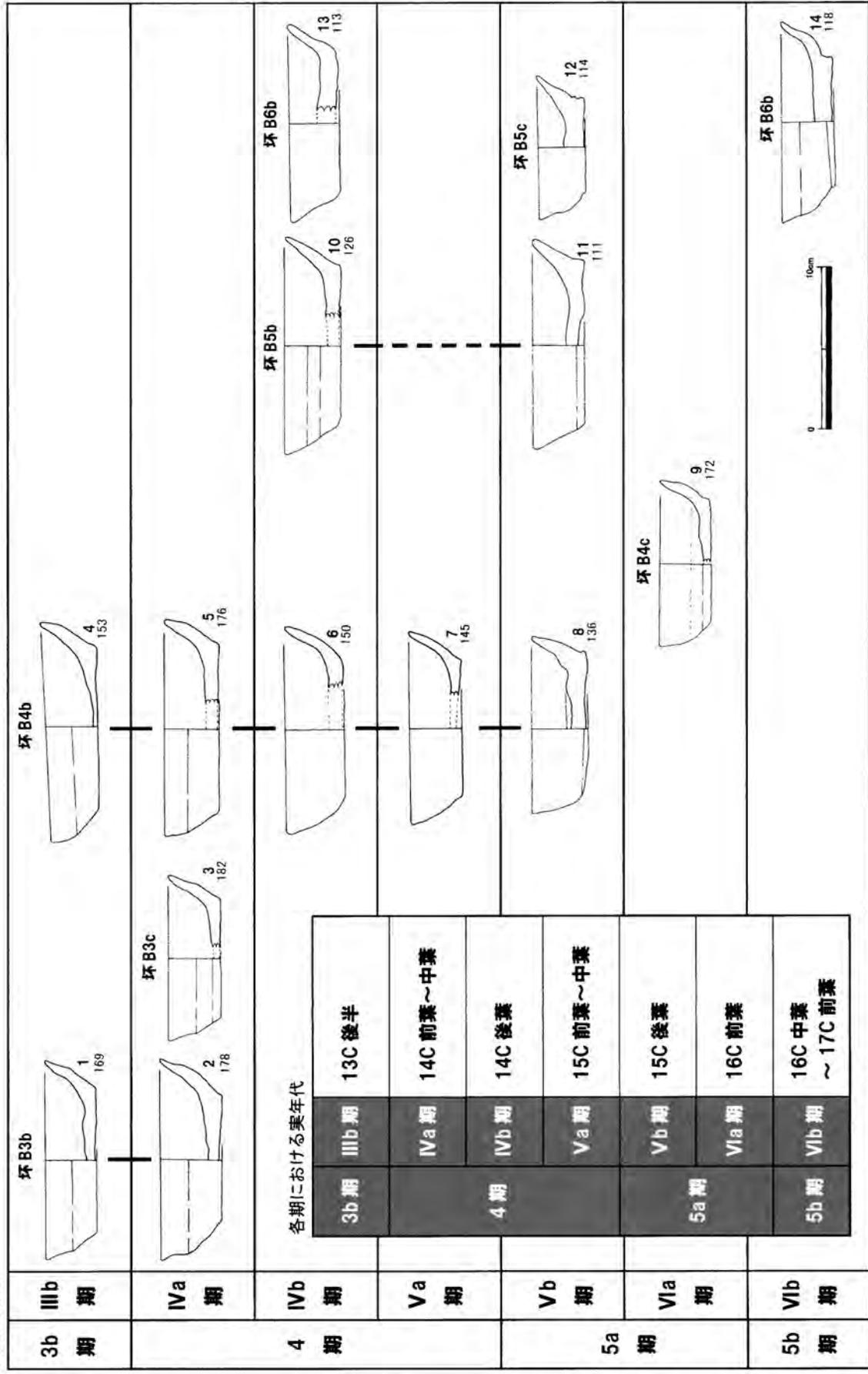


図 10 裾城跡出土中世土師器編年図 (S=1/3. 実測図は巻岐市教育委員会 2006 より転載)

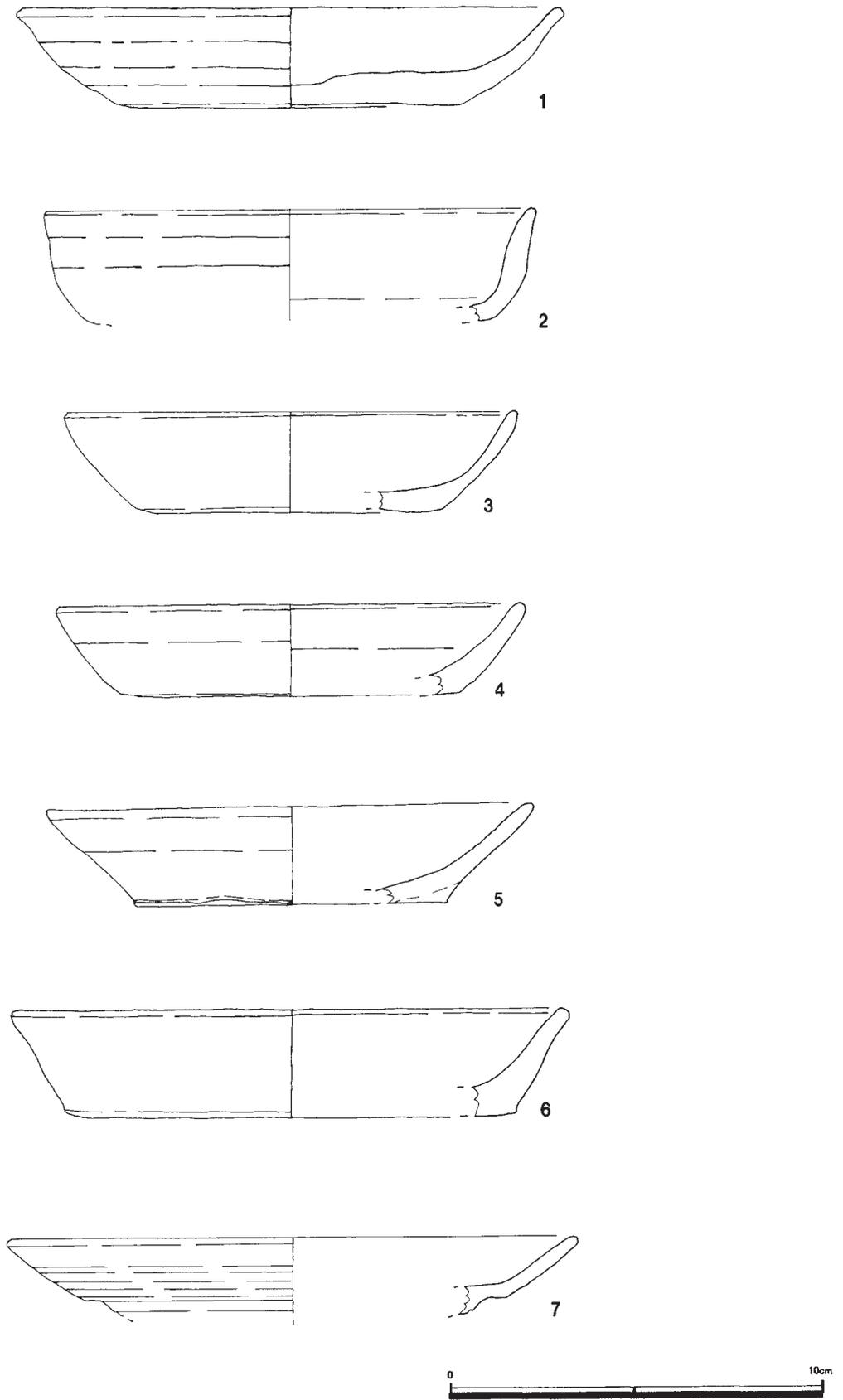


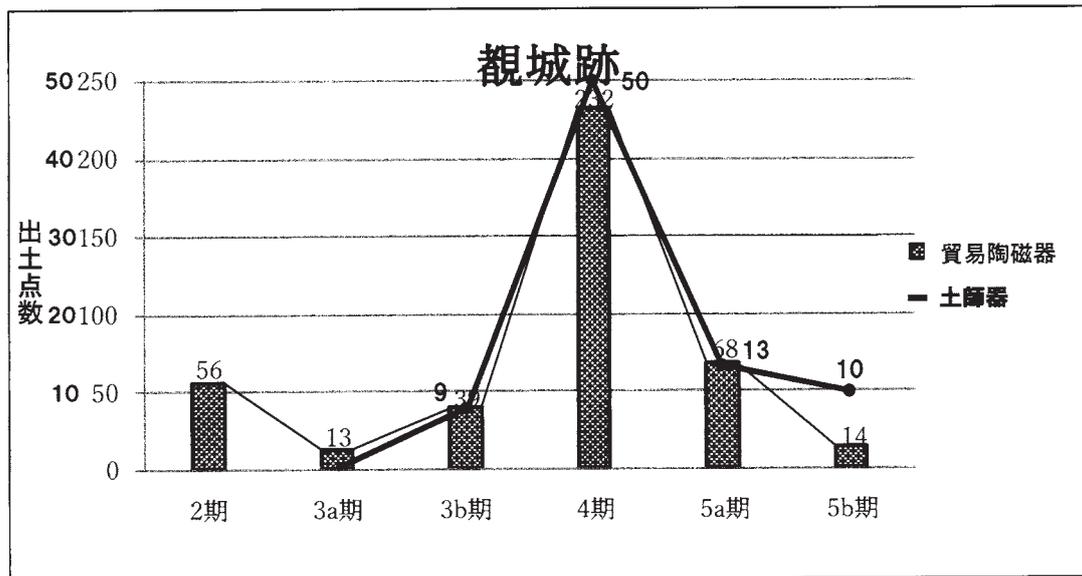
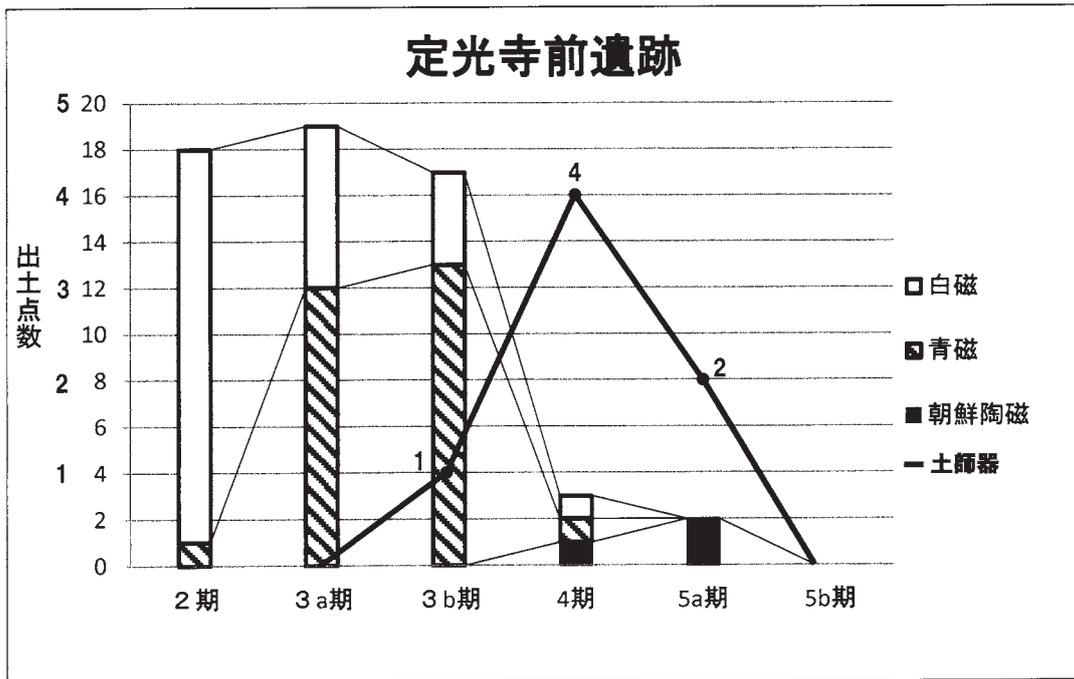
图 11 定光寺前遺跡出土中世土師器 (S=2/3)

表3 観城跡出土中世土師器：各器種における形態変化

坏 B3 <b>	坏 B3 <b> は底部形態が平底あるいは上げ底で、体部形態が外反して立ち上がるものである。この器種はⅡb 期からⅣb 期に存在するが、観城跡出土の例は全て口唇形態が d (尖) であることから、Ⅲb 期以降に位置づけられる。時期が下るにつれて、体部形態が明瞭な段をもつものから、段の稜が不明瞭になり内湾に近くなるものに変化する。以上より、体部が段をもつて立ち上がるものをⅢb 期、段の稜が不明瞭になり体部形態がやや丸みを帯びるものをⅣa 期に配置する。
坏 B3 <c>	坏 B3 <c> は底部形態が平底あるいは上げ底で、体部形態が外反して立ち上がるもののうち、口径がやや小さく小型のものである。この器種はⅣa 期にのみ存在する。
坏 B4 <b>	坏 B4 <b> は底部形態が平底あるいは上げ底で、体部形態が内湾するものである。この器種はⅢb 期からⅥa 期まで存在する。体部形態が坏 B3 の要素を残しやや段をもつもの、典型的な内湾のもの、坏 5 の影響を受けてやや直線化するものと細分することができる。以上より、体部にやや段をもつものうちより屈曲が明瞭なものをⅢb 期、屈曲が弱くなり段が不明瞭になるものをⅣa 期、体部形態が典型的な内湾のものをⅣb 期、体部が直線化するものうちやや直線的になるものをⅤa 期、より直線に近くなるものをⅤb 期とする。
坏 B4 <c>	坏 B4 <c> は底部形態が平底あるいは上げ底で、体部形態が内湾するもののうち、口径がやや小さく小型のものである。この器種はⅥa 期に出現し、Ⅶb 期以降も残存する可能性はあるが、博多遺跡群においてⅥa 期に主体となる(楠瀬 2007, p. 35) ため、Ⅵa 期に位置づける。
坏 B5 <b>	坏 B5 <b> は底部形態が平底あるいは上げ底で、体部形態が直線状に立ち上がるものである。この器種はⅣb 期とⅤb 期に存在する。体部形態が典型的な直線状のものやや外反に近いものがみられ、後者は底部に段をもつ。時期が下るにつれて、体部が典型的な直線状のものから、坏 B6 の影響によりやや外反に近くなるものに変化すると考えられる。以上より、典型的な直線状の体部をもつものをⅣb 期、体部形態がやや外反に近くなるものをⅤb 期とする。
坏 B5 <c>	坏 B5 <c> は底部形態が平底あるいは上げ底で、体部形態が直線状に立ち上がるもののうち、口径がやや小さく小型のものである。体部がやや外反に近く、底部に段をもつことから、Ⅴb 期における坏 B5b と形態的に類似する。よって、この器種はⅤb 期に位置づける。
坏 B6 <b>	坏 B6 <b> は底部形態が平底あるいは上げ底で、体部形態が外反するものである。この器種はⅣb 期とⅦb 期に存在する。体部全体が外反するものと口唇部のみが外反するもののみみられ、後者は底部に段をもち厚みがある。底部に段をもつ特徴は、坏 B5 において新しい要素とみられたことから、体部全体が外反するものをⅣb 期、口唇部のみが外反するものをⅦb 期に配置する。

表4 定光寺前遺跡出土中世土師器観察表

番号	種類	出土層位	時期	器種	部位	色調		胎土
						外	内	
1	土師器	1区3層	Ⅲb期	坏	完形	7.5YR8/6浅黄橙	7.5YR8/6浅黄橙	長石・石英
2	土師器	1区2層	Ⅳa期	坏	口縁部～底部	7.5YR8/6浅黄橙	7.5YR8/6浅黄橙	赤粒・長石・金雲母
3	土師器	1区3層	Ⅳb期	坏	口縁部～底部	7.5YR7/4にぶい橙	10YR7/3にぶい黄橙	長石・石英・雲母
4	土師器	1区3層	Ⅴa期	坏	口縁部～底部	5YR7/6橙	5YR7/6橙	長石・石英
5	土師器	1区2層	Ⅳb期	坏	口縁部～底部	5YR6/8橙	5YR6/6橙	長石・石英
6	土師器	1区3層	Ⅴb期	坏	口縁部～底部	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR7/4にぶい橙	長石・石英
7	土師器	1区2・3層	Ⅵa期	坏	口縁部～底部	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR7/4にぶい橙	長石・金雲母



観城跡の時期別数量表は『観城跡』（長崎県教育委員会 1997）掲載図を元に作成

※各期の実年代については以下の通り。

2期 11世紀後半～12世紀前半

3a期 12世紀後半

3b期 13世紀

4期 14世紀～15世紀前半

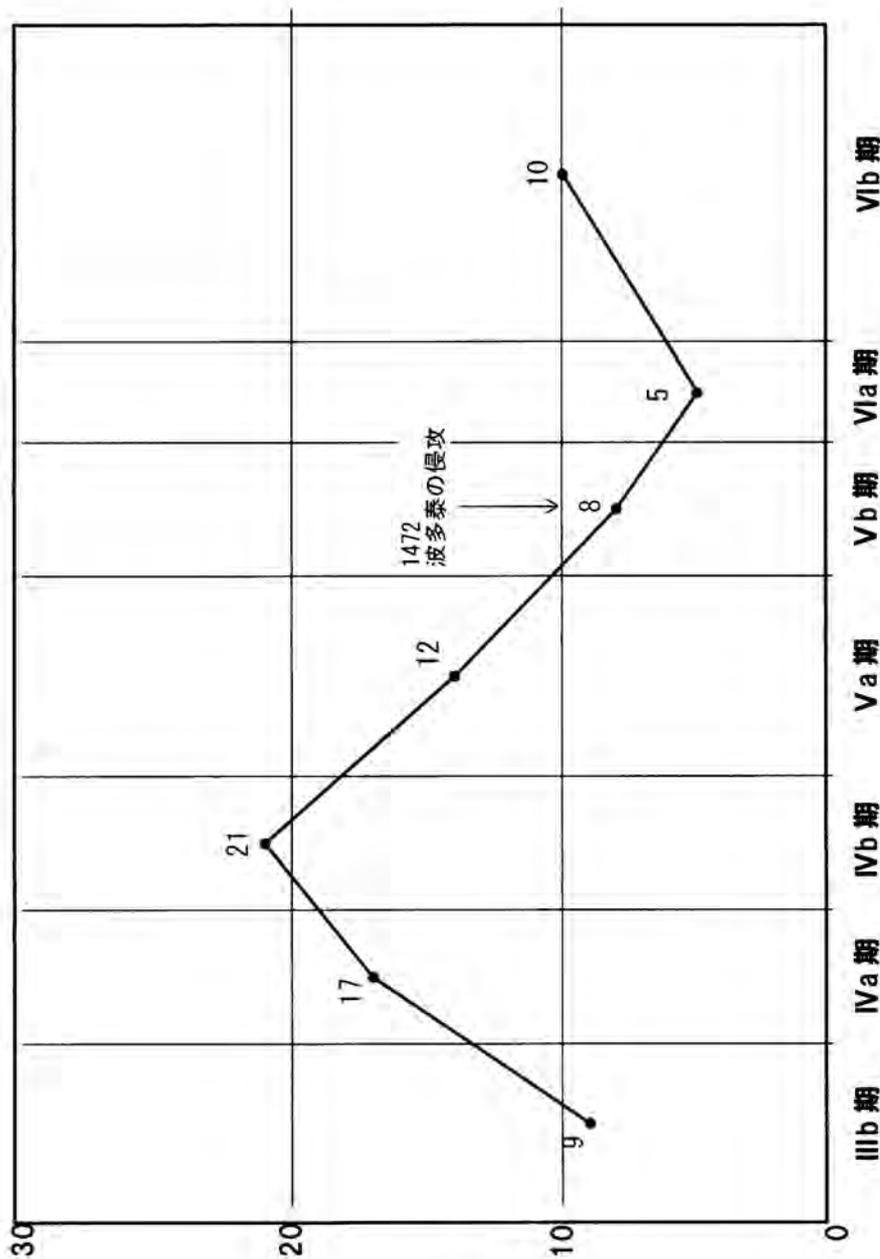
5a期 15世紀後半～16世紀前半

5b期 16世紀後半～17世紀前半

図12 中世土師器・貿易陶磁器における時期別数量変化の比較  
（彦岐高校2020に一部加筆・転載）

表 5 観城跡出土中世土師器  
新分類案と報告分類 (志岐市教育委員会 2006) 対照表

報告番号	報告分類	新分類	時期	報告番号	報告分類	新分類	時期
106	I-a	B4b	IVb期	151	I-b	B4b	Ⅲb期
107	I-a	B6b	VIb期	152	I-b	B4b	IVb期
108	I-a	B3b	IVa期	153	I-b	B4b	Ⅲb期
109	I-a	B4b	IVa期	154	I-b	B4b	Ⅲb期
110	I-a	B4c	VIa期	155	I-b	B4b	Va期
111	I-a	B5b	Vb期	156	I-b	B5b	IVb期
112	I-a	B6b	VIb期	157	I-b	B4b	Va期
113	I-a	B6b	IVb期	158	I-b	B3b	IVa期
114	I-a	B5c	Vb期	159	I-b	B4b	IVa期
115	I-a	B3c	IVa期	160	I-b	B6b	IVb期
116	I-a	B6b	VIb期	161	I-b	B4b	Va期
117	I-a	B5b	Vb期	162	I-b	B5b	IVb期
118	I-a	B6b	VIb期	163	I-c	B5b	Va期
119	I-a	B6b	IVb期	164	I-c	B5b	IVb期
120	I-a	B6b	VIb期	165	I-c	B5b	IVb期
121	I-a	B5b	Vb期	166	I-c	B5b	IVb期
122	I-a	B6b	VIb期	167	II	B3b	IVa期
123	I-a	B4b	Va期	168	II	B6b	VIb期
124	I-a	B4b	Ⅲb期	169	II	B3b	Ⅲb期
125	I-b	B4b	Va期	170	II	B3b	IVa期
126	I-b	B5b	IVb期	171	II	B3b	Ⅲb期
127	I-b	B4b	IVb期	172	II	B4c	VIa期
128	I-b	B4b	Va期	173	II	B5b	IVb期
129	I-b	B4b	IVa期	174	II	B4b	IVa期
130	I-b	B4b	IVb期	175	II	B4b	Ⅲb期
131	I-b	B4b	Ⅲb期	176	II	B4b	IVa期
132	I-b	B4b	IVb期	177	II	B4b	Va期
133	I-b	B4b	IVb期	178	II	B3b	IVa期
134	I-b	B4b	IVa期	179	II	B3b	IVa期
135	I-b	B4b	IVb期	180	II	B4b	IVb期
136	I-b	B4b	Vb期	181	II	B5c	Vb期
137	I-b	B4c	VIa期	182	II	B3c	IVa期
138	I-b	B4c	VIa期	183	II	B3b	IVa期
139	I-b	B5c	Vb期	184	II	B6b	VIb期
140	I-b	B4b	Va期	185	不定形	B3b	IVa期
141	I-b	B3b	Ⅲb期	186	不定形	B6b	VIb期
142	I-b	B4b	Ⅲb期	187	不定形	B3b	IVa期
143	I-b	B6b	VIb期				
144	I-b	B4b	IVb期				
145	I-b	B4b	Va期				
146	I-b	B4b	Vb期				
147	I-b	B4c	VIa期				
148	I-b	B4b	IVb期				
149	I-b	B4b	Va期				
150	I-b	B4b	IVb期				



※各期の実年代は以下の通り。

- Ⅲb期 : 13C後半
- Ⅳa期 : 14C前葉~中葉
- Ⅳb期 : 14C後葉
- Va期 : 15C前葉~中葉
- Vb期 : 15C後葉
- Ⅵa期 : 16C前葉
- Ⅵb期 : 16C中葉~17C前葉

図 13 観城跡出土中世土師器の時期別数量変化



写真 1 1区掘削状況



写真 2 2区掘削状況



写真 3 土師器坏出土状況



写真 4 昨年度の廃土掘り上げ風景



写真 5 令和 2 年度発掘調査作業風景



写真 6 論文作成風景

#### 【参考文献】

- 老崎市教育委員会 2006『観城跡・車出遺跡』老崎市文化財調査報告書第 8 集  
楠瀬慶太 2007「土師器食膳具から見た中世博多の土器様相—博多遺跡群の土師器編年—」『九州考古学』第 82 号 九州考古学会 pp. 21-43  
後藤正恒 1861『老岐名勝図誌』（1975『老岐名勝図誌』上 名著出版）  
中上史行 1995『老岐の風土と歴史』  
長崎県教育委員会 1997『観城跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第 3 集  
長崎県教育委員会 1998『興触遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第 7 集  
長崎県教育委員会 1999『興触遺跡・興触川上遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第 12 集  
長崎県立老岐高等学校 2020「定光寺前遺跡出土の貿易陶磁器からみた中世老岐の研究」『第 14 回（2020 年）全国高校生歴史フォーラム発表集』（第 14 回全国高校生歴史フォーラム実行委員会編）共同精版印刷株式会社 pp. 63-78  
峰岸純夫 1993「戦国の争い」『日本歴史館』小学館

# 佳作ポスター

(高等学校等コード順に掲載)



# 下総の鉄道路線と水運の関わり

～ 利根町から活気が消えた本当の原因とは ～

江戸川学園取手高等学校 2年

石田 慎太郎



## 背景

今日日本には多くの鉄道網が張り巡らされ、沿線には数々の主要都市が軒を連ねている。一方で、鉄道駅を持たず、沿線都市と比較して人口や企業数で大きな差が生まれた地域がある。その多くはかつて水運や商業都市として栄えていた場合が多い。これらの都市では、既得権益を持つ者が鉄道の開通を拒否した、あるいは鉄道が開通したことでこれまでの街の機能を失い、衰退してしまったという、いわゆる「鉄道忌避伝説」がある。本調査では、これらの伝説の確かさと、衰退した本当の原因について、著者が住む取手市と隣接する利根町(旧布川町)をメインに、同じく鉄道忌避伝説が残る流山市および龍ヶ崎市と比較しつつ調査した。

## 事例 1 (流山市)

- 流山は、利根川と江戸川を結ぶ水運の拠点として発展し、北海道・東北の産物を江戸に運ぶ上で重要な役割を担っていた。
- 日本鉄道土浦線(現在の常磐線上野～土浦間)を建設することになった際、埼玉県の下川から流山を通して土浦に至る案と千住から松戸・根戸(現在の我孫子)を通る案が出され、線路の敷設距離等の理由から、松戸を通る案が最終的に採用された。



図 日本鉄道土浦線の建設計画ルートと最終的ルート

常磐線が流山を通る場合、物流手段が水運から鉄道に移り、水運が衰退してしまうのを恐れていたと考えられる。

- 「日本鉄道史」には、流山案と松戸案の2つのルートが比較対照のため調査されたことが記されているが、水運に関する記述はなく、流山の水運業者から反対運動が起きたからという理由でルート変更をしたとは考えにくい。
  - 流山は1916年に馬橋 - 流山の間に流山軽便鉄道(現在の流鉄)が開業し、後述の利根川堤防拡張工事による水運廃止後も衰退は免れた。
- ◎ 流山の鉄道忌避伝説は事実ではなかった。  
◎ 流山は最終的に鉄道を誘致している。

## 事例 2 (龍ヶ崎市)

- 龍ヶ崎市は、江戸時代に農地開発が進み、明治22年の町村施行によって1町6村となり、近隣農村を商圏とする商業都市として発展していた。
- フィールドワークを通じ、日本鉄道土浦線の建設に際し、回線が龍ヶ崎を通る形で開通した場合、商売が衰退してしまうという懸念があったとの話を複数の市民から聞いた。
- 「明治期鉄道資料」には、日本鉄道土浦線は、流山 - 柏 - 呼塚 - 我孫子 - 取手 - 藤代 - 牛久 - 荒川沖 - 土浦のルートで当初から計画されていたことが記されている。
- 一方で呼塚 - 土浦間は、呼塚 - 布施(現在の千葉県柏市) - 板橋(現在の茨城県伊奈町) - 谷田部(現在の茨城県つくば市) - 土浦のルートも比較線として検討されていたことが記されている。龍ヶ崎は、どちらのルートにも元々含まれていなかったと言える。
- 龍ヶ崎は1900年に、佐貫 - 龍ヶ崎の間に龍ヶ崎鉄道(現在の関東鉄道龍ヶ崎線)が開業し、土浦線とのアクセスもあり衰退には至らなかった。

- ◎ 龍ヶ崎の鉄道忌避伝説は事実ではなかった。  
◎ 龍ヶ崎は最終的に鉄道を誘致している。

## 事例 3 (利根町)

- 布川(現在の茨城県利根町)は、布川城の城下町として出発し、江戸時代に近くを流れる利根川を使った水運により発展した。当時水運で栄えた下妻・水海道と肩を並べる屈指の水運の街であった。
- フィールドワークを通じ、龍ヶ崎の場合と同じく、日本鉄道土浦線が布川を通る形になると、水運が衰退してしまう懸念があったとの話を複数の市民から聞いた。



最盛期の布川(1881年)



現在の布川地区

- 布川は、流山や龍ヶ崎と異なり、利根町となった現在に至るまで鉄道は開通していない。対岸の千葉県に1901年に開業した成田鉄道(現在のJR成田線)への連絡手段として水運を使い続けていた。
  - 成田鉄道開業後も布川の水運は極めて盛んで、時には船で川が渋滞したこともあったという。二つの船会社が蒸気船を運航させ、対岸の木下、銚子、東京の方まで利根町の人々を乗せていた。
- ⇒ 布川は、鉄道を通すのではなく、水運と鉄道の共存を選択し、街の衰退を防いだと考えられる。

では何故布川は衰退したか？

- 明治～昭和にかけて行われた利根川の大改修(スーパー堤防)のために、利根川の川沿いにあった布川の街は移転を余儀なくされた。
  - 移転後も布川の街は賑わいを保っていたが、大正13年の大火事により再起不能状態となり、衰退が決定的になった。
- ◎ 利根町の鉄道忌避伝説は事実ではなかった。  
◎ 現在の常磐線の開通が布川(現在の利根町)の経済に負の影響を与えた可能性は否定できないが、衰退を決定付けたのは、堤防拡張工事とその後発生した大火事によるものだった。

## まとめ

- 現在の常磐線沿線に関わる鉄道忌避伝説を調査し、いずれも事実ではないことが分かった。
- 流山と龍ヶ崎は、常磐線のルートから外れた後自力で鉄道を敷いたことで、街の衰退を避けることができた。
- 布川(現在の利根町)は水運と鉄道の共存を選択したが、利根川の拡張工事とともなう街の移転とその後発生した大火事が、街の衰退の原因となった。

## これから

地球温暖化が懸念されている現代において、「鉄道」と「水運」という二つの移動・輸送手段は古くて新しい英知と考える。既に、鉄道を使った物流は再び増え始め、貨物輸送だけでなく旅客輸送での物流も行われ始めている。一方で水運は、海外では盛んな地域があるものの、国内では一般的な物流・移動手段とは言えない。しかし、水運も鉄道と同じように復活し、水運で栄えていた街がまた活気を取り戻してくれるきっかけとなってほしい。そのためにできることを考え、今後の調査に繋げていきたい。

# 新撰組と五兵衛新田

## —何故、新撰組は五兵衛新田に屯所を構えたのか—

江戸川学園取手高等学校 2年

加瀬柚妃



### 1. はじめに

いまからおよそ150年前、幕末から明治にかけて勃発した戊辰戦争を巡る戦いの中で、旧幕府軍側の勢力であった新撰組がこの綾瀬の地に一時的に屯所を置いたというのだ。しかし、綾瀬のすぐ近くには多くの宿が建ち並ぶ千住宿があった。何故、新撰組は五兵衛新田に屯所を構えたのか。五兵衛新田の歴史的地理と、時代背景を明らかにするとともに、この疑問について述べていきたい。



稲荷山 蓮華院観音寺



綾瀬稲荷神社

### 2. 歴史的背景とその周辺の地理



旧小菅御殿石燈籠

✓小菅御殿はかつて、徳川綱吉が鷹狩りをする際に利用していたとされ、その後小菅刑場となり、現在は東京拘置所としてこの国の重要機関を担っている。  
✓小菅銭座は安政6年、江戸金座の直轄で、幕末の財政窮乏と銅相場高騰のため、前例のない鉄小銭を鋳造する場所として設置された。



小菅銭座跡

### 3. 実証実験

(条件)

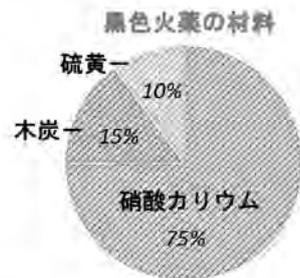
- ①金子宅から観音寺までを出来る限りの最短距離で、歩いた時と走った時のそれぞれの時間を計測する。
- ②甲冑や和装など動きにくい服装であったことを仮定して、10kgの荷物、スカート、ローファーの靴を身につけて検証する。
- ③歩いた時と走った時、それぞれ3回ずつの平均を最終的な検証結果とする。  
(ミリ秒は切り捨てて計算する)
- ④検証を行ったのは160cm・16歳女である。

金子左内宅から観音寺までの距離(時間)			
	歩いた時	走った時	
1回目	95.45	46.18	(秒)
2回目	96.32	45.56	(秒)
3回目	93.98	47.4	(秒)
平均	95	46	(秒)

### 4. 新撰組が求めた武器

✓新撰組は、大量の鉄砲や大砲といった、新政府軍に太刀打ちできる最新の武器を求めていた!

- ・刀や弾丸になり得る「鉄」
- …小菅銭座で製造していた銭の原材料は鉄である。
- ・弾丸の中に詰める「黒色火薬」



#### ・硝酸カリウム

…古民家が多く建ち並ぶ五兵衛新田には、それらの家の床下に長年蓄積された糞尿や鶏糞などの、天然の硝酸カリウムが大量に眠っていた。

#### ・木炭

…新撰組が買い付けた最終的な炭の総合計を計算してみると、五兵衛新田に滞在していた期間の中で、65俵もの炭を購入していたことが分かった。現在の単位に直すと、1俵約15kgとして概算すると、約975kg、ほぼ1トンにも上る。

#### ・硫黄

…硫黄そのものの購入は記されていないが、附木を購入しており、附木は一方の端に硫黄を塗られているため、この附木を購入することで硫黄が手に入る。

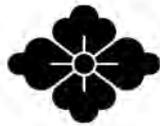
### 5. まとめ

官軍が布陣を布かなかった千住宿、銃弾の素となる大量の鉄が手に入るだろう小菅銭座、古民家の床下に眠る黒色火薬の素となる硝酸カリウム。田園風景が辺り一帯に広がっていた五兵衛新田に、新撰組が屯所を築いた理由として、これらの背景が窺える。そして新撰組は、戦争の準備を整え、約3週間の五兵衛新田滞在后、決戦の地「流山」へと向かうのだ。

#### 【主な参考文献】

- ・増田光明『新撰組五兵衛新田始末』(2006年 嵩書房出版)
- ・『足立区立郷土博物館紀要』第26号(2005年 足立区立郷土博物館)





# 戦国期の東国における避難所の形態

片岡義秀

成城高等学校



## 1.はじめに

平成初期の1990年代から、城郭研究者の藤木久志氏が提唱された、いわゆる「藤木戦争論」は戦国史・城郭研究の分野に非常に大きな衝撃を与えた。藤木戦争論とは、藤木氏が、戦国時代の合戦や治世を民衆（村人）の視点から深く研究したものであり、多くの研究者が影響を受けた。その藤木戦争論の中に「避難所説」というものがある。ここでいう避難所とは、戦国時代の合戦において、戦火を避けるために村人が集団で籠もった施設を指す。こうした施設は、要害性を活かせる山上に設けられることが多く、研究の中では「村の城」や「村人の城」などと呼ばれている。しかし、実際にこうした村の城が存在し、村人の多くが避難したという記録は、当時の一次資料ではあまり確認できないため、それらの正確な場所や構造などについては謎が多い。

そのため、本稿では、現在まで避難所としての伝承が残る城郭や場所を調べた上で、近年議論が行われている村の城の内部構造に着目し、その縄張り（城の高低図）について考察することによって、戦国時代の山城の中における、避難所の姿も探していきたい。

## 2.村の城の実例

村の城内部の構造を考えていくために、当時実際に村の城として使用された実例を調べた。一次資料での村の城についての記述は非常に少ないが、江戸時代などから記録された地誌などには、こうした村の城と思われる施設についての伝承が散見できる。こうした施設は、戦国期に「小屋」や「小屋場」と呼ばれており、江戸時代の地誌にも「小屋場」や「避難小屋」としての記載があるため、これらも村の城の実例に加えるものとする。そのため、明確な縄張り構造を持たない、場所も含む。

・土丸城・雨山城（大阪府泉佐野市土丸）・・・藤木氏によれば、日根根の民衆は有事の際に「山入り（山上に登って籠もること）」や「山あがり（山入りと同様の意味）」をし、戦火から避けていたという。

・滝山城 山の神曲輪（東京都あきる野市高月町）・・・中田正光氏の『村人の城・戦国大名の城』によれば、この曲輪は当城周辺の民衆たちの避難場所だったという。山の神曲輪には、土塁や堀といった主な城郭構造は見当たらないが、周囲の斜面に多数の腰曲輪段（平場）が築かれており、これらが避難した際に民衆の籠もる場所として使用されたと推定できる。

・蜂城（山梨県笛吹市一宮町）・・・江戸時代の後期に編纂された地誌である『甲斐国志』の古蹟部第三（岩崎館跡）の項目には、次のような文言がある。「〔小屋場〕同山中（蜂城が築かれた蜂城山を指す）ニアリ壬午の亂ニ村民遁匿レシ處ナリト云。これは、天正10年（1582）に天正壬午の乱が起こった際に、村民が蜂城山に避難した場所であることを示している。このことから、蜂城山（蜂城）は、壬午の乱の際に臨時で使用されたものと思われる。そのため、現在山中に遺っている無数の曲輪段は、室町期の要害遺構ではなく、この時のものとも考えられる。（図1）

・小屋場（山梨県甲州市大和町）・・・甲府盆地の外れに位置する大和町の曲沢一帯に位置していたといわれる。伝承では、天正壬午の乱の際に村人が避難小屋を建てた場所だったといわれている。

・風越山（山梨県韮崎市三之倉）・・・『甲斐国志』の山川部第十には、次のような文言が見られる。「〔風越山〕茅ヶ嶽ノ麓ニテ深谷アリ天正壬午の亂ニ藤井莊諸村ノ兵ヲ此ニ避ク新府以西ノ諸村ハ武田ノ八幡澤ノ奥ニ匿レシト云。このことから、風越山に藤井莊の人々が、天正壬午の乱の際に避難場所として使用されたことが分かる。

また、風越山に避難した人々と区別するように、「新府以西ノ諸村」とあるが、この「新府」は武田勝頼が滅亡間近に築いた新府城を指していると思われ、壬午の乱の際には、徳川家康の本陣として使われていた。この文言から、ある境界によって区分された地域ごとに、人々が避難するべき場所が決められていたことが読み取れる。

・鐵鬼ののど（山梨県北杜市武川町）・・・戦国期に武川衆の一族であった柳沢氏が、天正10年（1582）の武田氏滅亡の際に避難した場所だといわれている。同地には皇山古城と呼ばれる山城跡が遺っている。非常に小規模な山城ではあるが、その背後になだらかな斜面があり、大人数での避難も可能であったと考えられる。

## 3.村の城の縄張り共通点

複数の村の城（避難所）の実例から、以下の共通点が挙げられる。

- ・避難する人々を収容するため、腰曲輪などの平場を広範囲に有している
- ・堀切などの強固な防御構造が非常に少ない
- ・曲輪段の中心となる曲輪が小規模であること

図1：蜂城縄張り図

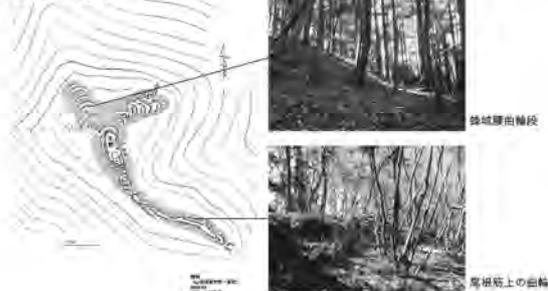


図2：志賀館縄張り図



図3：山吹大城縄張り図



図4：佐貫城縄張り図



## 4.村の城の形態

これまで、村の城と目されている山城や伝承地について見てきた。それらは、以下の二つに分類することができる。

- I：大規模な城郭の一部を避難所とする場合・・・例：滝山城、小田原城（百姓曲輪）、鉢形城、岩付城
- II：民衆たちが独自に設定した山に籠もる場合・・・例：蜂城、小屋場、風越山、鐵鬼ののど

Iの関東の例では、後北条氏の城郭に代表されるように、総構といわれる外郭線を構築し、合戦時にはその外郭内部に民衆を避難させ、一種の「町」を形成するものである。特に、小田原城においては、百姓曲輪と呼ばれる百姓の避難所の城の一部に独立して築かれたものが見られる。天正18年（1590）の小田原攻めでは、北条領国全体が総構の手法を採っており、民衆もそれに従っている。この時にいわゆる「村の城」が機能したという記録はない。

IIの甲斐の例では、村の城と考えられる城郭や伝承地が複数見られるが、それらは全て天正10年（1582）の動乱期にのみ使用されたものとなっている。この時の甲斐の人々からすれば、長らく統治していた守護の武田氏が滅び、明確な統治者がいない状況で戦争が起こっている。そのため、北条氏領国のように、大名や領主によって決められた避難所が存在しなかったのである。

合戦時に民衆が独自に山に籠もったり、山城を築いたりする例は極めて少ないといえる。少なくとも、関東・甲信越地域においては、合戦時の避難所は大名や領主などの明確な統治者によって提供されたものであったと結論づけることができる。ここまで、北条氏や武田氏による避難所の形態を重点的に見てきたが、民衆が統治者の城の一部に避難した形跡は、これら以外にも多く見られる。例えば、志賀城（図2：長野県佐久市）には、堀切で隔てられた区画ごとに、多くの腰曲輪段が築かれている。ここには、天文9年（1540）に武田晴信（後の信玄）が攻めた際に、数千人規模の非戦闘員が避難したといわれている。他にも、諏方氏の原上城（長野県諏訪市）や金刺氏の山吹大城（図3：同県岡谷市）、小笠原氏の林大城・林小城（同県松本市）や日向城（同県佐久市）などには、無数の腰曲輪段が存在する。兵士の駐屯的な機能を果たす一方、民衆の避難所としても使用されていたと考えられる。また、林大城には、それらを区別するように堀切が築かれており、こういった形態も存在する。関東では、里見氏の佐貫城（図4：千葉県富津市）などでは、長大な防壁の内側の谷を避難所として使用していたと見られ、北条氏の他にも、避難所を城内に設けるものがある。それぞれの大名により、避難所の形態や位置に多少の違いはあるものの、合戦時に民衆の籠もる避難所を城内に取り込んでいる点は、共通している。

## 5.総論

本稿では、村の城といわれている城郭や伝承地などを多く挙げた上、それらに二つの形態があることに着目した。その結果、民衆が独自で築く「村の城」よりも、統治者が提供する「避難所」の方が、当時は主に機能したのではないかと結論に至った。戦国時代における、大名間の戦争において、民衆はただ山奥で傍観しているのではなく、統治者と同じ場所に籠もることで、領地内の人々は一丸となって一つの争乱を乗り越えていたのである。

# 吾妻鏡と地域の様子から見る幻の大寺院真慈悲寺と鎌倉幕府の関係性

上都 真拓

日本大学櫻丘高等学校

## I. はじめに～真慈悲寺とは～

日野市には「幻の大寺院」真慈悲寺(鎌倉時代)があった。近年調査が進み、真慈悲寺の実態が明らかになりつつある。さらに鎌倉時代の歴史書、『吾妻鏡』によると真慈悲寺と鎌倉幕府は結びつきがあると記されている。そこで、鎌倉幕府と真慈悲寺の関係について吾妻鏡などの文献などをもとに考察する。

真慈悲寺とは、前述の通り東京都日野市と多摩市の一部にまたがってあったとされている大規模で広範囲に存在したとされている丘陵寺院である。丘陵寺院とは、どのような寺院かという、近世以降の寺院のように平地で本堂や五重塔が集中して置かれているような寺院ではなく、比叡山延暦寺や鞍馬寺のように山や丘陵地に本堂や僧坊、墓地が散開して置かれているような寺院である。真慈悲寺は廃寺になり、その実態を示すものが存在していなかったため、長らく「幻の大寺院」とされていた。しかし、近年、文献や遺物などからその実態が明らかになりつつある。

## II. さまざまな資料から見る真慈悲寺

### (1) 経筒(図1)

平安時代末期の経筒が江戸時代に仁王塚から5点発見された。そのうち、長寛元年(1163)、永万元年(1165)、建久4年(1193)のものが奈良国立博物館に現存している。経筒とは経典を守り、伝えるものである。

百草の経筒はただの経筒ではなく、一流品の物であり、この周辺の地域から発掘されたどの経筒よりも大きいものとなっている。経典を書写し、経筒に納めるためには厳格な作法にのっとった書写や経筒の製作、土中に埋納する儀式など行わなければならない、そのために多くの労力と財力が必要になる。よって、真慈悲寺はさまざまな行事を行えるほどの力と財力を持っていたことが分かる。

### (2) 銅造阿弥陀如来坐像(図2)

この仏像は建長2年(1250)に作られた阿弥陀如来坐像で、百草八幡神社に伝わる秘仏で、国の重要文化財に指定されている。この阿弥陀如来坐像の背面には、日本武州多西吉富真慈悲寺とあり、今の東京都日野市百草の一角に真慈悲寺があったということが読み取れる。

これらの出土物から真慈悲寺は東京都日野市百草と多摩市の一部にあるということ、真慈悲寺はかなりの大きさを持つ寺院であることが読み取れる。



図1 経筒  
リーフレット「中世大寺院」真慈悲寺  
日野市郷土資料館 令和元年

図2 銅造阿弥陀如来坐像の背銘  
リーフレット「中世大寺院」真慈悲寺  
日野市郷土資料館 令和元年より

表1 真慈悲寺と日本の歴史

年代	その頃の真慈悲寺の様子	日本史
平安時代	1051 源頼朝、源義朝親子、百草八幡宮に参拝する	治承9年の役
	1080 聖徳太子御成道忌立成大神神念持法の記載	保元平治の役
	1083	源朝の乱
	1151	治承永年の乱
鎌倉時代	1165 真慈悲寺、鎌倉幕府に有り難を述べ「吾妻鏡」	鎌倉幕府の成立
	1167 後白河法皇の四十九日に真慈悲寺に鎌倉三人を派遣「吾妻鏡」	
	1247 真王百重瀬出土	宝治合戦
	1250 銅造阿弥陀如来坐像が作られる	の及が作られる?

## V. 終わりに

真慈悲寺はこれほどの規模を持ち、鎌倉幕府と深い関わりを持つ寺院なのになぜあまり知られていないのだろうか。その謎を解く鍵は真慈悲寺の土地の移り変わりにある。真慈悲寺のあったとされる場所は戦国時代には百草城、江戸時代には松蓮寺と形を変えていく。一時期、廃寺になったが再興され、廃仏毀釈によって再び廃寺になった。そして明治時代、この地は地元出身の貿易商である青木角蔵が買い取り百草園となり、さらに京王電鉄が買い取り今の京王百草園となった。このことから、真慈悲寺のあった場所は変化を繰り返し、真慈悲寺は忘れ去られてしまったことが分かる。

今回の考察で真慈悲寺と鎌倉幕府の関係について深く考えることができ、その周辺地域が鎌倉幕府と深い関わりを持つ可能性が明らかになった。今後の展望として、真慈悲寺の周辺と鎌倉幕府との結びつきについて考えていきたい。末尾になったが、私の考察のために協力して下さった日野市学芸員の小黒恵子氏に感謝とともに敬意を示したい。

## III. 真慈悲寺が大きくなった理由

では、なぜ真慈悲寺はここまで大きな寺院になることができたのだろうか。その謎を解く鍵となるのが鎌倉時代の歴史書である『吾妻鏡』である。吾妻鏡とは、鎌倉幕府の歴史を記した文献である。その文献の文治2年(1186)2月3日の条には「武蔵国真慈悲寺は御祈禱の霊場なり。しかれどもいまだ寄付の荘園なきに由りては供具の備へなく、僧は衣鉢の貯へを失う」とある。現代語訳すると「真慈悲寺は御祈禱の霊場だったが、荘園が無くなってしまい、仏具の備えがなく、僧は一切の衣鉢の蓄えもなく、ここに僧有尋が今日参上し、一切経を当寺に安置し、破壊を修理すべきのよし、申し請くるの間、すなわち院主職に補せらるるなり。」とある。このことから、平安時代の真慈悲寺は荘園から財源を得ていたことが分かる。これだけの財力をまかなうためには大量の荘園が必要になるため、真慈悲寺は寺域に加えて広大な荘園を所持して財力をまかなっていたと推測する。しかし、鎌倉幕府ができて、武士の世の中になると、荘園を寄付するものがいなくなってしまうため、真慈悲寺は困ってしまう。そこで、真慈悲寺の僧有尋が鎌倉に赴いた。このことから真慈悲寺は鎌倉幕府の力を借りて復興したことが分かる。そして、鎌倉時代以降からは真慈悲寺の栄え方に変化が生じるのではないだろうか。

それは川の渡しの権益によって財を得ることである。なぜそう考えることができるかというと、鎌倉街道の上の道を辿っていくと多摩川にぶつかる。そして、前述の通り、その交差する地点がちょうど真慈悲寺の目の前にあたる。多摩川は幕府にとって重大な防衛線・交通路であり、鎌倉街道は幕府にとって主要な道でもあるため、真慈悲寺に守りを任せておきたい。また、真慈悲寺にとっても川の渡しの権益は荘園と違って安定して収入を得ることができるため、多摩川の渡しの権益は欲しかった。そのため、鎌倉幕府は真慈悲寺に川の渡しの権益を渡したのではないかと推測できる(図3)。

ここで新たな疑問が生まれる。それは、真慈悲寺はなぜ、鎌倉幕府の力を借りて復興したり、幕府の権威を利用したりすることができたのかということだ。

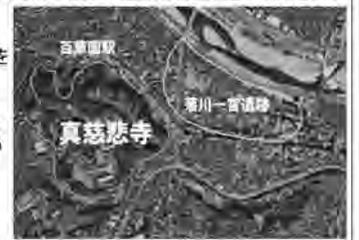


図3 真慈悲寺と多摩川

## IV. 真慈悲寺が復興できた理由

鎌倉幕府が成立したとされている1185年の前後には、養和の飢饉が起こっており、平氏政権が弱体化していた。その平氏政権を滅亡させるために、各所出兵した源氏によって治承・寿永の乱が起き、京都への年貢納入が途絶えてしまったのである。養和の飢饉は1181年から1182年、治承・寿永の乱は1180年から1185年の約5年間に起きた(表1)。その中で成立した鎌倉幕府の政治体制は養和の飢饉の影響と戦乱の後の混乱という二つの精神的な不安要素を抱えたまま成立した。そこで鎌倉幕府はさまざまな仏教事業を行い、東大寺南大門の再建、鎌倉五山の建立などを行ったのである。これらのことから、幕府は仏教の力を借りるために仏教事業を行っていたことが分かる。そして、吾妻鏡に記されている、有尋が鎌倉幕府に赴いたのは文治2年(1186)とされている。このことから真慈悲寺が復興を幕府に願い出たとされている年代と養和の飢饉や治承・寿永の乱が起きた年代が一致することが分かる。

つまり、真慈悲寺も養和の飢饉や戦乱の影響を少なからず受けていたのではないかと考える。私の推測になるが、困り果てた真慈悲寺は鎌倉幕府と同じように何か頼らなければならなくなってしまう、真慈悲寺は鎌倉幕府に再興を願い出たのではないかと考える。そして、仏教に力を借りたい鎌倉幕府と、鎌倉幕府に頼るしかない真慈悲寺の利害が一致したため、鎌倉幕府は真慈悲寺を再興させたのではないかと考えた。

また真慈悲寺と幕府の結びつきを象徴するものが、先述した銅造阿弥陀如来坐像である。銅造阿弥陀如来坐像の背面にはその時の天皇である後深草天皇や執権である北条時頼、その時の将軍職である藤原頼朝の安穩を祈願し、子孫の繁栄や造立者の極楽往生を祈念して造立されたことが記されている。この頃、宝治合戦という事件が起きている。宝治合戦とは、北条執権体制に反発し、将軍である藤原頼朝を支持する勢力である三浦泰村が率いる軍勢が起こした鎌倉幕府での内乱で、それによって藤原頼朝を支持していた三浦泰村の一族は滅亡してしまう。そのような内乱が起こっていた中で、この仏像は造られたのである。この仏像の背面の文字から、内乱による幕府運営に対する不安要素を抱えている将軍職の藤原頼朝と内乱に勝利した北条時頼の安泰を祈願することが分かる。つまり、真慈悲寺は鎌倉幕府に御恩があり、支えてもらっているため、幕府の政治体制を安定してものに戻してほしいと祈願し、この仏像は造立されたのではないかと推測できる。

また、この背銘にある願主仏子慶祐は、鶴岡八幡宮寺の胎堂金剛師の供僧であり、鶴岡八幡宮の第9代別当隆弁の補佐役であることが日光男体山頂上遺跡から出土した経筒に記されている。これは真慈悲寺が幕府と強い関わりを持つことを示す資料である。

## 参考文献

- 「中世の大寺院真慈悲寺」リーフレット 日野市郷土資料館 令和2年改訂版
- 「中世の大寺院真慈悲寺」発掘特集号リーフレット(令和2年改訂版) 日野市郷土資料館
- 『日野市史資料集』古代・中世編 (昭和56年) 日野市史編さん委員会
- 『詳説日本史B改訂版』笹山晴生 佐藤信 五味文彦 高笠利彦 山川出版社
- 『新詳日本史』浜島書店編集部 浜島書店
- 『日野市百草園地区歴史政策ガイド』日野市郷土資料館

# インフラから見た横浜での関東大震災の復興

## 栄光学園高等学校 歴史研究部

原嶋高志・眞鍋僚・小野口怜・大伴旺弘・藤間大毅・白江雄々恵

### はじめに

近年、世界中で地震や豪雨など災害が増加している。横浜は、関東大震災(1923年)を乗り越えて日本のなかで最も魅力的な都市の一つに発展した。この歴史から何を学ぶことができるのか。このような問いかけから、私たちは鉄道、橋、水道という3つのインフラに着目し、横浜における関東大震災復興期のインフラの痕跡一つひとつに足を運び、これらがその後の横浜の発展と繁栄にどのように役立ってきたのかを調べてみることにした。

## 鉄道

当時、横浜駅は現在の場所にはなかった。初代横浜駅は、現在の桜木町駅に日本初の鉄道開通とともに開業した。この横浜駅は後に桜木町駅となり、今の市営地下鉄高島町駅付近に二代目横浜駅が開業(図1)。これが当時の横浜駅である。二代目横浜駅は開業から8年後、関東大震災によって駅舎は焼失(図2)、しばらくはその場所に仮駅舎が建ち利用されたが、現在の東海道線の横浜駅の場所に三代目横浜駅が建設された。

その横浜駅は、当時としては最新様式、東海道線で唯一の新式駅舎だった。この駅の建設は大倉土木が行ったが、三代目横浜駅は海に近く地盤が弱かったため駅舎建設は難工事、地固めの杭としてアメリカから松を2300本取り寄せ、横浜湾は松が浮かび、壮観を呈したという。



図1 関東大震災前の二代目横浜駅

横浜駅には様々な路線が乗り入れた。東京横浜電鉄(現東京急行)が見代目横浜駅の開業と同時に横浜駅に乗り入れ、その1年後の1929年には京浜電鉄(現京浜急行)が横浜まで神奈川から延伸。33年には神中鉄道(現相模鉄道)が乗り入れた。横浜駅西口には、関東大震災で石油が流出し、爆発したスタンダード石油会社の貯油施設があった。この施設は住民からの反発により移転したが、その場所は長年資材置き場として利用されたため、駅周辺の開発は大きく出遅れることとなった。戦後の横浜駅西口の開発は神中鉄道によって行われ、それが今の横浜駅西口を形成している。



図2 二代目横浜駅 遺構

## 橋

開港都市として海辺の印象が強い横浜だが、丘陵地、台地、低地、埋立地など起伏に富んだ地形を持っており、街の至るところに川が流れている。関東大震災では、大岡川や中村川など横浜の中心部を流れる河川に架けられた多くの橋が大きな被害を受けた。道と道を結ぶ重要なインフラである橋が失われたことにより多くの人々が犠牲を強いられた。

復興橋とは、関東大震災で甚大な被害を受けた東京と横浜が地震に負けないような橋を目指して、それぞれ内務省復興局と協力して造り上げた橋の総称である。復興橋の計画にあたり、関東大震災の被害を教訓にして、耐震性の高い橋が設計された。まず基礎工事、橋台、橋脚の設計においては傾斜をしないための工夫が施された。基礎工事の面積も広く、橋台や橋脚のつなぎ目には鉄筋が入れられた。横浜の河川や運河には多くの舟運が通るが、橋は河川の上に存在する大きな障害物となるため、舟運による輸送を円滑に行うための設計も工夫された。このような工夫を反映しながら、復興橋はつくられた(図3、4)。



図3 震災前の吉田橋  
(横浜市「橋」復興誌より)



図4 改築後の吉田橋  
(横浜市「橋」復興誌より)

1929年までにはほとんどの橋が竣工し、横浜だけで178橋(復興局施工37橋、横浜市施工141橋)もの復興橋が完成した。特に復興橋の73パーセントにあたる130橋が鉄橋であったことは画期的であった。関東大震災の火災で多くの橋が崩れ落ち、被害を拡大させたことへの反省が、鉄やコンクリートなどの不燃性の材料を使った橋を増やす理由であった。

復興橋の多くは現在でも使われている(図5)。これら復興橋を実際に見ると、最初に目を惹かれたのは橋のデザインである。アーチ橋や石造りの橋脚といったきれいな外観を備えている。これらのデザインは国際色豊かな横浜において、街並みの外観を保つために取り入れられたものである(図6)。



図5 長者橋



図6 吉田橋の親柱

## 水道

現在の横浜は、江戸時代の新田開墾のために埋め立てられた土地が大部分を占める。関東大震災の前夜、道志川を水源とした浄水場が横浜には3ヶ所あったが、大震災によって川井浄水場と西谷浄水場はひび割れ、滑落の被害を受けた一方、野毛山浄水場は壊滅寸前の状態に陥った。そのうえコンクリートで補強してあった壁は接合面が離脱し亀裂が入り、増設した配水池は全壊。市内各所に埋設されていた配水鉄管も破損、継手の離脱や変形が相次いだ。応急工事により、1924年には市内全域への給水が可能になった。また、根本的な修復のために、取入口・沈殿池・濾過池の復旧工事が行われた。野毛山浄水場はこの時、復旧工費が莫大になることや、施設拡張の余地がないことなどから、配水池のみ残して浄水機能は西谷に移されることになった。



図7 浦川水道橋

甚大な被害を受けた野毛山浄水場は修復の見込みが立たなかったため、横浜の水道の貯水量と濾過能力は大幅に減少してしまった。将来の市域拡大や、工業化を見据えて、水の需要の増加にも耐えられるような仕組みをつくる必要に迫られていた。そこで関東大震災以前から検討されていた水道の全計量制が採用された。全計量制が採用され、水道メーターが各家庭に設置されたことで、家庭の水の消費量は支払い能力に応じた量になったため、節水効果も高まった。この仕組みはその後変わっていない。

野毛山浄水場のあった場所には現在も配水池があり、災害時の緊急用飲料水の備蓄場所や周辺の水道水として利用されている。西谷や川井の浄水場は現在でも稼働しており、相模川と道志川系からの水を一括に処理して横浜の鶴見、神奈川、西、中、南、保土ヶ谷の各区にむけて給水している。関東大震災の復興事業のなかで、被害を受けた配水管や水管橋の敷設替えや修理、保護事業が広く行われた。中村川に架かる「浦川水道橋」は、その痕跡を残している(図7)。

### おわりに

関東大震災から1世紀が過ぎ、横浜は大きく変化した。横浜において関東大震災からの復興は決して容易ではなかった。横浜駅も本来の賑わいを取り戻すまでに長い年月がかかった。今後の復興対策においては、地震そのものや地震による火災に対する対策はもちろんのことだが、そうしたインフラのみならず、地域の生活と連動した復興に対する視点を持つことが重要である。それには官民の協力と被災地以外の場所からの支援が欠かせない。私たちは関東大震災復興期のインフラの現地調査を行い、自分たちの眼で実際に見ることで、これらが現在も横浜の人々の生活を支えていることを痛感した。防災や減災の出発点は「災害の歴史」を知ることである。これからも、関東大震災の復興のためにつくられた鉄道、橋、水道を積極的に保存・利用しながら、後世へ受け継いでいきたい。

# 酒造業の発展と物流—灘五郷の酒造業から見る近世と近現代の産業構造—

## 灘校地理歴史研究部

### 灘高等学校

#### I はじめに

灘中・高等学校(旧制灘中学校)は、白鶴酒造・菊正宗・櫻正宗など灘五郷の酒造家の出資により開校されたものである。この灘五郷は、律令制の制定された当時から酒造が行われたとされ、その後江戸時代中期に商業として酒造が栄え、現在は京都の伏見・広島西条と並んで日本三大銘醸地の一つに数えられるまでになった。このようにして灘五郷の地において、江戸時代酒造が発達した理由を考察するとともに、これを通じて他の酒造地の発展をも考察し、酒造業の発展と変遷の要因を探ってきたい。

#### II 灘五郷の成立

室町時代以前におけるヒトモノの拠点は、当然幕府のあった京都であり、中世における酒の主要な産地は伏見・伊丹・池田など、大阪周辺であった。だが、戦国時代を経て江戸幕府が成立し、ヒトモノの結節点が京から江戸へと移り変わった後は、それまで京に集中していた酒造業は各地に分散していった。その中で、優秀な杜氏(日本酒の醸造を行う職人集団)が存在し、かつ京から伝統的な技術情報を入手しやすい立地であった灘は、他の新興酒造地に比べて有利であり、酒造業が確立された。

灘五郷において酒造業が発展した背景には、次の3つの要素が挙げられる。

#### ① 六甲おろし

1つ目は「六甲おろし」である。この六甲おろしは、広義には灘平野に吹く風全般を指すが、狭義には冬に日本列島に吹く北西の季節風が明石海峡で収束した後一気に平野部に吹き込む、または季節風が山頂に当たってから山を駆け下りて平野部に吹き下ろす、といった冬の寒風を指す。灘においては、この寒風の存在が、寒い環境で酒を醸造することで雑菌の繁殖を抑え、高品質な酒を造る「寒造り」という手法を発展させたのである。

#### ② 宮水

2つ目は「水」である。灘の酒造を江戸時代から支えてきた水が、西宮市で採水される「宮水」と呼ばれる湧水である。宮水には、特筆すべき特徴が2つある。まずはその硬度である。(資料1)と(資料3)からわかるように、宮水は他地域の地下水と比べ、カルシウムやマグネシウム、カリウムなどミネラル成分の含有量が多い。このため、その硬度は約100~120mg/Lと非常に高くなっている。硬水は、その豊富なミネラル成分が酵母の成長を促進するうえ、強い口当たりを生み出すため、優れた酒造用水だといえる。宮水のもう1つの重要な特徴は、その鉄分含有量の少なさである。六甲山系に分布する花崗岩はSiO<sub>2</sub>の含有率が高く、よって(資料2)からわかるように鉄分が少ない。酒に含まれる鉄分が多いと、米の味を特徴とする酒の風味が損なわれるうえ、「清酒」の名前を体現する完全に透明な酒ではなくなってしまうため、酒造りにおいては鉄分の少ない水が好ましい。以上からわかるように宮水は、灘での酒造業発展に大きく貢献しているといえる。

地域	硬度(総硬度)	Ca	Mg	Na	K	Cl	SO <sub>4</sub>	SiO <sub>2</sub>
宮水(西宮)	307	51	7.3	25	9.8	35	39	24
關西の地下水	281	42	5.7	23	6.8	28	40	22

地域	硬度(総硬度)	Ca	Mg	Na	K	Cl	SO <sub>4</sub>	SiO <sub>2</sub>
伊丹の井戸水	224	16	5.6	26	8.5	25	27	35
伏見の井戸水	286	25	4.5	20	6.3	20	27	26



↑↑ (資料1) ↑ (資料3)

(資料2) →

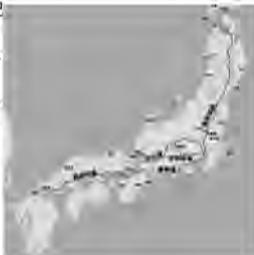
#### ③ 米と流通

3つ目は「流通の便」、特に米の入手と醸造酒の出荷の便である。灘五郷は、灘平野の西にある播磨国で取れる米を入手しやすかったうえ、米の集散地となっていた大阪に近かったため、米の調達に苦しむことはなかった。米は、ワインに使われる葡萄などとは異なり、遠方から運んできてもそこまで品質が変化しないため、原料の産地と酒の醸造地が直結するということはあまり起こらなかった。事実、大阪が酒造にどれほどの影響力を及ぼしていたかは、(資料4)を見れば明白である。ただ、酒については米と違い、樽で運ぶ必要性が出てくるために陸上輸送のハードルが高かった。そこで江戸時代には、各酒造地で造られた酒は最寄りの港に集積され、樽廻船と呼ばれる酒運搬船で江戸まで運ばれる輸送形態が導入された。したがって、当時酒造業を営むには、立地が港に近いことが必要条件だったのである。(資料5)からわかる通り、灘・大阪港から紀伊水道を通じて潮師を回り、江戸に至る航路は東西間大型貨物輸送のメインルートであり、灘という立地は酒を江戸まで輸送することが非常に楽な場所であった。流通の上でも灘は、酒造にうってつけの場所だったのである。

地域	人口(万人)	人口密度(人/km <sup>2</sup> )	比率(%)
灘五郷・西宮	337,431	49.9	
今津	36,296	5.4	
伊丹	85,153	12.6	
その他摂津十二郷	73,554	10.9	
摂津十二郷計	532,434	78.8	
その他畿内	143,234	21.2	
人口総計	675,668	100.0	

(資料4) →

(資料5) →→



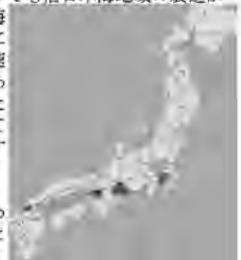
#### III 近世の各種交通と国土軸

江戸と大阪を結ぶ海上交通は近世大型貨物輸送のメインルートであったという旨を前述した。今一度(資料6)を眺めて頂きたい。江戸と大阪を結ぶ樽廻船・菱垣廻船のルートに連続するのは蝦夷地より発し沿日本海の各港湾を結んで下関より瀬戸内海に入る西廻り航路であり、大いに用いられた。その他にも東廻り航路があったものの、沿日本海の東北の諸都市では荒れやすい海など条件に恵まれず西廻り航路による海上輸送が主流となった。つまりこの時代、東北地方の太平洋沿岸を除くすべての地域から江戸に向かう物流は瀬戸内海と大阪を経由するのである。

国土はそれを縦貫する一つの大きな物流ルートを中心として、産業などが発達するという国土軸という考え方があった。江戸時代における主要な物流ルートは東京-大阪-下関を結ぶ海運ルートであり、副物流ルートとして東廻り航路や沿日本海・西廻り航路があった。主要物流ルートのど真ん中に位置する灘五郷がこの海運の恩恵を大いに受けたのは言うまでもない。

#### IV 近世から近現代への移り変わり

物流における近世から近代への変化を見ていく。まず、(資料6)からわかるように江戸期から現在まで主要な国土軸であり、工業的には太平洋ベルトと呼ばれる地域に相当する、このルートは高速道路や鉄道で結ばれ、副ルートであった東廻り航路の太平洋沿岸地域も同じくしている。このルートは明治期以後の北海道の開拓などにより一層の発展を見せたといえよう。対して、東北・北陸・山陰からの主要なルートであった西廻り航路は輸送ルートがぶつ切れとなっており、交通網一つを取ってみても沿日本海地域の衰退が目に見える。明治期以後陸運の発達により日本海海運は鉄道に取って代わられ衰退した。明治期には始まっていた衰退は戦後になってから一層加速する。1940年の日本の主な国際物流は日本領であった朝鮮や日本の保護・友好国とのものであったが戦後、冷戦によりその門戸の多くは閉ざされてしまい、それらを担っていた日本海沿岸は衰退する。そして日本の国際貿易は中東やアメリカ、オーストラリアとのものとなり太平洋沿岸の諸都市・港湾を拠点とするものが多くなったのである。かくして日本の現代国土軸は太平洋ベルトという1つの主要国土軸と北方への補助的な東北国土軸となった。



(資料6) ↑

#### V 国土軸と酒造業

国土軸の変化は、物流と深くかかわる酒造業にも大きな影響を及ぼした。(資料7)は沿日本海地域と畿内の、江戸期以前に成立した酒造業者数と明治期以後に成立した酒造業者数の比較である。沿日本海地域は終じて江戸期より明治期に成立した新興酒造業者が多いのに対し、畿内は江戸期に成立した酒造業者が多い。大型貨物輸送は水運が中心であった江戸期には水運に便利な畿内が発達し、明治期以後は鉄道・道路網の発達によって沿日本海地域が一本の線ではなく太平洋ベルトや東北国土軸の「枝線」で結ばれたことにより、大型貨物輸送を必要とする酒造業は沿日本海地域においても発展を見せたということが分かる。明治期以後の陸運の発達は、沿日本海地域を日本海縦貫線という「線」ではなく各地域が東京と最短距離で結ばれ、「点」ごとに発展させたことが見てくる。

地域	江戸時代以前の成立	明治期以後の成立
摂津十二郷	27	14
京山(嵯峨)・西宮	21	15
畿内計	48	29
出羽(秋田・山形)	22	31
越後(新潟)	24	37
北陸三県(富山・石川・福井)	29	31
山陰(鳥取・島根)	14	34

(資料7) ↑

#### VI おわりに

纏めると、灘の酒造業は歴史的背景から成立し、気候や地理的な条件、そして消費者の変化に合った酒が造られたことを背景に江戸時代中期から後期にかけて発達した。灘は北と西から寒風が吹きこむ立地と酒造に適した地下水という2つの大きな条件を兼ね備えたことで銘醸地の一つに数えられるまでになったのである。これは伏見など摂津十二郷や西条等ほかの銘醸地も同じであり、酒造にはこの二つの条件が地理的には重要であることが分かる。また、江戸時代の物流ルートも灘を中心とした酒造業に大きな影響を及ぼし、この物流ルートが変化するに従い酒造業も変革した。江戸時代の水運を中心とする国土軸が、明治期以後は太平洋ベルトと東北国土軸という日本を縦断する陸運を中心とするものになったということが、酒造業の発達の変遷からも読み取れる。変化を重ねてきた酒造業は、これからまた国土の発達に伴って変わりゆく姿を見せることであろう。

#### ＜主な資料・参考文献＞

- 日下謙「水と人-自然・文化・生活」(思文閣、1987年)
- 「ニューステージ地学図表」(浜島書店、2019年)
- 楠木学「新装版 酒造りの歴史」(雄山閣、2005年)
- 「詳説日本史図録」(山川出版、2020年)
- 「JR 貨物時刻表」(鉄道貨物協会、2018年)
- 経済産業省 石油輸入調査統計
- その他、各府県酒造組合HP等

# 第15回全国高校生歴史フォーラム 研究タイトル一覧

(高等学校等コード順に掲載)

研究タイトル	高等学校名
「臺温泉一見期」から見る江戸時代の台温泉	岩手県立花巻北高等学校
地震の歴史と地域の教訓	〃
宮沢賢治 ～手帳や作品に隠れた人物像を読み解く～	〃
南部杜氏の里「石鳥谷」 長年受け継がれてきた南部杜氏の技術について	〃
石巻の史料価値の検討	宮城県立石巻西高等学校
秋田蘭画の衰退とその原因	秋田県立秋田北高等学校
秋田の鉱山とキリシタン	〃
米と災害 ～秋田の戦後からの災害と米の収穫量の関連性～	〃
佐竹義宣 一常陸の名門佐竹氏 秋田に転封される一	茨城県立太田第一高等学校
浅間山の噴火から見る歴史的背景と今後の防災 ～天明大噴火の被害の教訓を生かして～	茨城高等学校
徳川斉昭と水戸藩の思想	常磐大学高等学校
筑波山の山岳信仰	土浦日本大学高等学校
谷田部藩飯塚伊賀七のからくり からくり人形のルーツ	〃
新撰組と五兵衛新田 一何故、新撰組は五兵衛新田に屯所を構えたのか一	江戸川学園取手高等学校
下総の鉄道路線と水運の関わり ～利根町から活気が消えた本当の原因とは～	〃
渋沢栄一と養育院 ～「日本資本主義の父」の板橋区における慈善活動の真意を探る～	筑波大学附属坂戸高等学校
新河岸川舟運 ～河岸場から見た歴史埋没の現状とそこから考える地域の活性化～	埼玉県立朝霞西高等学校
平安時代・江戸時代における食事の変遷	千葉明德高等学校
西東京市田無町における石仏・石塔	東京都立保谷高等学校
馬込城の再検討 ～下町に潜むなぞ多き城～	東京都立つばさ総合高等学校
シカゴ学派の歴史 シカゴ大学の今と未来	東洋高等学校
津田仙が本当に伝えたかったこと ～明治時代の農業に関する仙の功績を中心に～	普連土学園高等学校
交通の変遷から見る草加宿の様子 明治維新後を中心に	海城高等学校
戦国期の東国における避難所の形態	成城高等学校
伊達政宗が天下統一するためには？ 地方の戦国大名が天下統一するためには	渋谷教育学園渋谷高等学校
興福寺北円堂の魅力	聖学院高等学校
『越境対馬』 一境界を紐解く一	開成高等学校
交通史から見る品川～東海道の発展～	文教大学付属高等学校
久ヶ原遺跡地区での管状土錘片の発見 ～欠片から見る古代の漁～	東京実業高等学校
世界へ求める平和 ～ひめゆり学徒隊を中心に～	駒場学園高等学校
吾妻鏡と地域の様子から見る幻の大寺院真慈悲寺と鎌倉幕府の関係性	日本大学櫻丘高等学校
中島飛行機と杉並区 ～中島飛行機荻窪工場が地域に与えた影響～	中央大学杉並高等学校
東京を舞台とした異性装が犯罪と結びつく近代小説と当時の異性装に対する認識	豊島岡女子学園高等学校
柳沢吉保時代における六義園の変遷	本郷高等学校
関東の地理的要因から考える玉川上水の掘削理由	成蹊高等学校
「偉勲の戦士」上原重雄	神奈川県立足柄高等学校
江戸時代の感染症 一コレラと人々一	〃
奈良時代の皇位継承 なぜ三人四代にわたる女帝が誕生したのか	神奈川県立神奈川総合高等学校
佐屋街道佐屋宿本陣を中心とする、佐屋の街並みについて	浅野高等学校
徳川家康の鷹狩の意義 ～小杉村を例として～	洗足学園高等学校
インフラから見た横浜での関東大震災の復興	栄光学園高等学校
逗子開成学園所蔵学籍簿研究序説 ～明治37・38年学籍簿の分析～	逗子開成高等学校
二宮尊徳の報徳仕法導入に関する一考察 ～大磯を中心とした報徳仕法の導入と展開の検討を中心に～	立花学園高等学校
後北条氏における家臣松田氏の立ち位置に関する一考察	〃
幕末期におけるコレラの流行と庶民の対策 一安政期から文久期における『日記』の検討を中心に一	〃

研究タイトル	高等学校名
文化人としての黒田官兵衛 ー官兵衛参加の連歌会の検討を中心にー	立花学園高等学校
加州刀の艶に秘めた、前田家の文武「二道」観 ～凄みの美学という刃～	北陸学院高等学校
狭野川村八幡神社調査記録	自然学園高等学校
白鳥踊りのルーツを求めて	岐阜県立郡上北高等学校
東常緑の和歌を読む	岐阜県立関高等学校
関飛行場及びその関連施設の調査 陸軍秘匿飛行場の作戦構想とその実態	〃
実は日本でも希少で、価値がある！？ ～日本が誇る中山道太田宿と、文化財の存在意義とは？～	岐阜県立加茂高等学校
美濃国多治見の領主とその歴史を探る ー土岐一族の家紋「桔梗」を追ってー	岐阜県立多治見北高等学校
近年の岐阜県の気候の変化について	鶯谷高等学校
古墳や遺跡から考える古代の多治見の歴史	多治見西高等学校
東濃の戦国武将小里氏に関する研究	麗澤瑞浪高等学校
北条義時 執権への過程	静岡県立葦山高等学校
今川義元 ～「海道一の弓取り」の実像に迫る！	〃
米山梅吉から学ぶ「奉仕」 ～「新隠居論」、「常識関門」、「米山梅吉傳」の研究～	知徳高等学校
山本五十六 ー非戦の英雄はなぜ真珠湾攻撃を実行したのかー	愛知県立旭丘高等学校
円窓付土器の真相に迫る	名城大学附属高等学校
江戸末期に書かれた日記から見る、町人と下級武士の暮らし ～『藤岡屋日記』と『石城日記』を読んで～	京都教育大学附属高等学校
オスマン帝国	大阪府立門真なみはや高等学校
なぜ現東海道本線の一部に旧東海道に沿っていない部分があるのかについて	明星高等学校
大坂城石垣石丁場跡における史跡の保存・活用についての考察	兵庫県立鳴尾高等学校
殖産興業の先駆け ～生野銀山を支えた馬車道～	兵庫県立姫路東高等学校
酒造業の発展と物流 ～灘五郷の酒造業から見る近世と近現代の産業構造～	灘高等学校
真田幸村の一生と武勇	雲雀丘学園高等学校
宗教と雅楽	〃
寿命寺、行基、行基の関わった文化財について	〃
戦艦の歴史と戦艦大和	〃
衆道・男色の歴史	〃
心と宗教 ～西国三十三所巡礼からの考察～	智辯学園和歌山高等学校
日本文学から読み解く感染症 ～コロナ時代を生き抜く知恵～	近畿大学附属和歌山高等学校
鳥取池田家の家老墓について	鳥取県立八頭高等学校
青谷上寺地遺跡出土土器の黒斑分析 ー土器づくり体験からのアプローチー	鳥取県立青谷高等学校
岡山県備中地域、美作地域における弘法大師の巡錫ルート研究	岡山県立勝山高等学校
BANK ではない GINKO の生き方 ～劉生だけが有名じゃあ、父が泣く～	〃
可部町の重要性和その特徴	広島県立可部高等学校
広島市安佐南区八木地区の大蛇伝説と「蛇落地」について	広島県立安西高等学校
大阪城と島の石	香川県立小豆島中央高等学校
市之川鉾山史考察	愛媛県立西条高等学校
大森彦七と鬼女伝説	愛媛県立松山西中等教育学校
嘉明の思いと松山城	松山東雲高等学校
定光寺前遺跡出土の土師器からみた中世壱岐の研究	長崎県立壱岐高等学校
対馬北部における遺跡の分布 ～遺跡の見つけ方～	長崎県立上対馬高等学校
琉球王国 二つの道	沖縄県立首里高等学校
うるま市・金武町の闘牛・闘牛場及び牛庭の歴史的利用価値に関する研究	沖縄県立与勝高等学校

※個人情報に配慮して、研究タイトルと高等学校名のみを記載しています。

## 〈 審 査 委 員 〉

清水 哲郎 (審査委員長・奈良大学 学長)	外岡慎一郎 (実行委員長・奈良大学 文学部史学科 教授)
小林 青樹 (奈良大学 文学部文化財学科 教授)	武田 一郎 (奈良大学 文学部地理学科 教授)
三宅 晶子 (奈良大学 文学部国文学科 教授)	渡辺 晃宏 (奈良大学 文学部史学科 教授)
北岡 一弘 (奈良大学 文学部地理学科 准教授)	杉山 智昭 (奈良大学 文学部文化財学科 准教授)
鈴木 喬 (奈良大学 文学部国文学科 准教授)	卜部 敬康 (奈良大学 社会学部心理学科 講師)
中坊 勇太 (奈良大学 社会学部総合社会学科 講師)	笹岡 勇也 (奈良県教育委員会 指導主事)

### 第15回 (2021年) 全国高校生歴史フォーラム 発 表 集

編集・発行 第15回全国高校生歴史フォーラム実行委員会  
〒631-8502 奈良市山陵町1500 奈良大学 広報室内  
TEL 0742-41-9588  
印 刷 共同精版印刷株式会社  
〒630-8013 奈良市三条大路2丁目2-6



奈良で学ぶ  
贅沢

主催

奈良大学・奈良県